

異文化接触場面に必要な日本事情教育に関する研究 ： インドネシア人日本語学習者のニーズを踏まえて

ジェニ, プトラ

<https://hdl.handle.net/2324/4784711>

出版情報：九州大学, 2021, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

異文化接触場面に必要な日本事情教育に関する研究
ーインドネシア人日本語学習者のニーズを踏まえてー

九州大学大学院地球社会統合科学府

ジェニ プトラ
2022年2月

目次

第1章 序論

1.1 研究の背景.....	1
1.2 研究の目的及び意義.....	4
1.2.1 研究の目的.....	4
1.2.2 研究の意義.....	5
1.3 用語の定義.....	6

第2章 日本事情教育における理論的枠組み

2.1 日本語教育における日本事情の背景及び変遷.....	8
2.2 日本事情の領域.....	15
2.3 日本事情授業の類型.....	17
2.4 日本語教育における日本事情.....	20
2.5 他の外国語教育における文化学習と日本事情の特徴.....	21
2.5.1 アメリカ.....	21
2.5.2 オーストラリア.....	23
2.5.3 ヨーロッパ.....	24
2.5.4 日本事情の特徴.....	25
2.6 異文化接触場面に必要なコースデザインにおける理論的 な枠組み.....	26

第3章 先行研究の概観及び課題の提示

3.1 日本事情が取り扱う内容.....	29
3.2 日本事情の実践報告.....	31
3.3 日本事情教育における課題.....	33
3.4 インドネシアの日本語教育における日本事情の研究.....	34

3.5 先行研究のまとめ及び研究課題の提示.....	36
3.5.1 先行研究のまとめ.....	36
3.5.2 本研究における課題の提示.....	37
第4章 研究方法	
4.1 研究の手順.....	38
4.2 ドキュメント分析.....	39
4.3 ニーズ分析.....	40
4.3.1 ニーズ分析の概念.....	40
4.3.2 ニーズ分析のデータ収集.....	40
4.3.3 データの分析および方法.....	41
4.4 本研究におけるコースデザイン.....	42
第5章 インドネシアの日本語教育における必要な日本事情	
5.1 カリキュラムにおける日本事情の位置づけ.....	43
5.2 シラバスから見えたインドネシアの日本事情.....	46
5.3 シラバスにおける日本事情の課題.....	49
5.4 考察.....	51
5.5 まとめ.....	52
第6章 インドネシア人日本語学習者の日本事情ニーズ	
6.1 日本事情における学習者のニーズの位置づけ.....	54
6.2 本調査に繋がる予備調査.....	55
6.3 本調査の概要.....	59
6.3.1 協力教育機関.....	59
6.3.2 調査対象者の概要.....	60
6.4 調査結果の提示.....	61
6.5 日本事情項目による学習者のニーズ.....	63

6.6 学習者が求める学習活動.....	70
6.7 必要な日本事情の科目数.....	76
6.8 日本事情に関する情報を獲得する手段.....	77
6.9 考察.....	78
6.10 まとめ.....	81

第 7 章 JFL 環境における異文化接触場面に必要な日本事情のコース デザイン

7.1 ドキュメント分析及びニーズ分析を踏まえた日本事情教育の 枠組み.....	82
7.2 Graves (2000) を基にした日本事情のコースデザイン開発.....	84
7.3 ニーズ分析の結果を基にした科目の目的及び目標の設定.....	86
7.3.1 学習者のニーズを踏まえた可能な学習成果.....	87
7.3.2 ニーズを踏まえた学習成果に必要な学習活動.....	89
7.3.3 学習成果と活動を踏まえた目的及び目標の設定.....	92
7.4 学習コンテンツの開発.....	92
7.5 評価デザイン.....	93
7.5.1 学習記録開発.....	93
7.5.2 ルーブリック開発.....	97
7.6 学習内容の組織化及び授業のコンセプト化.....	102
7.7 日本事情における担当教師の役割.....	108
7.8 考察.....	110
7.9 まとめ.....	111

第 8 章 結論及び今後の課題

8.1 結論.....	112
8.2 今後の課題.....	113

参考文献..... 114

付録資料

謝辞

第1章

序論

本章では、日本国内の日本語教育における日本事情学習に焦点を当て、その歴史的な背景から現在に至るまでの過程を解説し、高等教育における留学生のための教育としての日本事情のあり方を述べる。まずは第1節では、本研究の背景となるインドネシアと日本の現状を比較しながら、日本事情教育における課題を洗い出す。第2節では、第1節を基にした研究の背景を検討し、本研究の目的及び意義を述べる。第3節では、本研究のキーワードとなる「異文化接触場面」、「科目デザイン」、「日本事情」について定義する。

1.1 研究の背景

1962年に文部省（現在は文部科学省）が日本事情に関する通知書¹を出して久しい。水田（1998）は日本事情が日本語科目とは別個の科目であり、内容は一般日本事情、日本史及び文化、政治、経済、自然、科学技術だと位置づけている。しかし、この文部省が出した通知書の日本事情は曖昧であり（札幌 1993；金本 1994；小川 1996；河内 1998）、領域が広すぎる（砂川 1998；岡崎 1999）といった指摘が飛び交っている。元々、日本語教育における日本事情は、1980年代に普及したコミュニカティブアプローチ²の影響を受け、日本に関する専門的な知識から日本語運用と問題発見・解決能力に教育の展開が変わった（細川 2003）。また、当時は留学生が異文化環境である日本で生活するために、文化的同化・日本人化³すべきという理念が一般的であったが、80年代後半に、日本語教育に関わる研究において日本事情が注目され始め、文化適応のために文化的同化・日本人化すべきだという理念は不適當だと指摘され、この理念は教師主体の授業と共に崩壊した（三牧 1994；戸田 1992）。それに代わり、90年代に学習者

¹ 通知書の詳細は9ページを参照のこと

² 山名（1998, p. 207）は「コミュニケーション能力の育成を主眼とした英語（外国語）教授法であり、1970年代から英米を中心に広まってきた指導法の総称であって、英語では、communicative approachesと複数形で表記される」と定義している。

³ 異文化環境で問題なく暮らしていくためには、「その文化の行動様式や考え方を学び「適応」することが不可欠だという考え方」（牲川^{せがわ} 2002 p. 170）。

主体の授業が検討され（徳井 1996 b；佐藤 1998；小川 1996）、学習者のニーズ⁴を把握する必要性が主張された（戸田 1992；札幌 1993）。当時は外国人留学生の増加につれて、多様性、多様化という語が日本事情教育に普及し、日本人との交流を求める外国人留学生のニーズもあったため、徳井（1996, 1997）、土屋他（1997）、橋本（1999）、宮本・松岡（1999）のように、日本人学生が日本事情に加わる実践報告もある。こういったクラスでは、多国籍の外国人留学生と日本人学生が異文化接触場面のプロセスを重視し、思考パターンや表現の仕方、価値観等の異なる部分にお互い気づくことで、異文化理解⁵あるいは異文化コミュニケーション⁶能力を育成することを目的としている。現在ではこういった日本事情の授業がより一般的に行われており、アクティブラーニング⁷のアプローチで日本事情が展開されている。つまり、学習者が現地の社会との交流や祭りに参加することにより、地域の文化への目配りの重要性を主張しているのである（島崎 2016；二谷 2017）。このように、日本国内において現在に至るまでの日本事情が展開されてきたきっかけは、留学生のニーズの把握やコミュニケーション⁶アプローチの普及に影響を受けたことがわかった。この点を踏まえ、JFL環境⁸であるインドネシアの日本語教育において、学習者のニーズを把握し、科目の典型に取り入れることは現状と異なる日本事情の概念を構築するきっかけとなる。

一方、インドネシアの場合、日本語教育における学習者のニーズ分析の結果が報告されたことはあるが、日本事情学習のニーズがどのようになっているのかは未だに不明で

⁴阿濱他（2018）は、学習者が実際に学びたいことやできるようになりたいことだとしているため、学習者自身の視点から求められる学習であるとしている。

⁵鈴木（2005, p. 81）は「違ったものを認めあい、違いに敬意を払いつつ、その違いを共感する」といった態度を示しており、相互作用においては相手の文化的な背景の違いを認め、互いに尊重して理解しようとする態度のことを指している。

⁶文化背景が異なるコミュニケーションのことを指す。鈴木（2016）は、こういったコミュニケーションを円滑にするために、お互いに異なる文化を知り敬意を払わなければならないため、異文化理解と異文化コミュニケーションは親密な関係にあるとしている。

⁷文部科学省（2015, p. 1）によれば、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者（ママ）の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」である。教室内では発見学習、問題発見・解決学習のみならず、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等の活動も含めている。

⁸JFLはJapanese as a Foreign Languageからの頭字語であり、外国語としての日本語を指す。JFL環境とは中村（2015）が海外で日本語を学ぶ環境のことを指したが、より細かく解説すると、学習者の母語は日本語ではなく、学習環境で用いられる言語も日本語ではない環境である。そのため、インドネシア国内で日本語の学習環境はJFL環境だと言える。

ある。しかし Diner (2014) は、日本語母語話者とコミュニケーションをするためには、4 技能（聞く技能、話す技能、読む技能、書く技能）だけでなく、日本文化を理解することも必要であるとしている。Rahayu (2018) も Diner とほぼ同様の見解であり、インドネシアの日本語教育において日本事情を担当するインドネシア人の日本語教師は、外国語である日本語でコミュニケーションを行うために日本文化を理解することも必要だという考えを持っていることがわかった。しかし、Putra (2018) は、インドネシアの日本語教育における日本事情が、コミュニケーションに関わる文化の学習内容⁹よりも知識的な文化コンテンツに傾いていることを指摘している。また、日本事情を専門にしているインドネシア人の日本語教師は非常に^{まれ}希であり、学習内容も各教師に任されているうえ、川上 (1999) が述べたように、教師によって科目の内容が大幅に異なっている。また、教師個人が日本事情の項目を基にして授業を展開しているため、教師の主観の影響が日本事情教育に強く反映されることは否めない。しかし、日本事情とは何かを多様な見方で捉えることが日本事情の本質である (河野 2000 ; 国際交流基金 2010) ため、学習者が自分自身の観点で日本事情を発見すべき (細川 2003) だとされている。したがって、こういった状況では、橋本 (1999) が述べたように学習者個人個人が既に日本事情に対する事象¹⁰を持っているならば、それが深められず、教師の日本事情の事象による影響で学習者の個人的な事象が変容してしまう。

次に、インドネシアに日本事情のテキストが不足していることも課題としてあげることができる。この点は、高崎・都 (2016) の研究で明らかにされている。多くの日本事情のテキストは、東京といった首都圏を背景にすることが多い (澤田 2001 ; 膽吹 2013) が、学習者の日常に身近ではないテーマに出会うと、日本国内にいても日本という国が遠く感じられてしまう (膽吹 2013) ため、学習者の環境にある日本事情に目を配る必要がある。国外では、現地の日本人滞在者のネットワーク形成、日本語の本の購入場所、日系企業のリストや情報も日本事情に含まれるのである (宮崎 2000) 。インドネシア人の日本事情担当教師は、日本国内にある日本事情を授業に取り入れ、インドネシア国

⁹ 本研究では、学習内容が日本の伝統文化、日本史、日本の政治、経済といった日本事情が扱う学習テーマの領域を指す。

¹⁰ ここでの事象とは視点によって異なる日本事情に関わる現象に対するイメージや解釈等のことをさす。

内の日本事情を導入していないのが現状である。したがって、学習者の日本事情に対する学習ニーズを把握すること、及び現地の日本事情により目を配る教育の展開が必要である。

また、日本事情は、日本語と親密な関係にある文化を扱うため、異文化コミュニケーション教育の観点から授業を展開することが重要になってくる。ウィディアンティ (2016) 及びグスティニ他 (2016) では、日本語母語話者との異文化接触場面において、「日本人は細かすぎる」、「日本人は時間に厳しすぎる」、「日本人は意思決定が多い」、「日本人ははっきりしていない」といった違和感を感じている卒業生がいることが明らかにされているが、異文化コミュニケーションの観点を含めなければ、学習者がこのような葛藤や誤解等を招く要因に繋がりがねない。この点を踏まえ、コミュニケーションに関わる文化を扱う日本事情では、どういった文化学習が必要なのかを探り、ドキュメント分析¹¹の結果や学習者の文化学習のニーズ及び学習環境を考慮し、インドネシアの日本事情教育を展開するための考案が必要である。

1.2 研究の目的及び意義

1.2.1 研究の目的

本研究では、インドネシア人日本語学習者のニーズ及び学習環境を基に、インドネシアの日本語教育現場で求められる日本事情教育を分析し考察することにより、異文化接触場面に必要な学習の内容を解明することを目的とする。

¹¹ ドキュメント分析とは資料等に注目する調査方法である (Scambor, 2009)。データは研究者が介入せずに記録された記述や画像等である (Bowen, 2009)。

1.2.2 研究の意義

インドネシアの高等教育における日本語専攻科は、国際交流基金が構築した教育のスタンダード¹²（JF 日本語教育スタンダード・JF Standard¹³）を考慮した教育が行われている。しかし、日本事情教育のガイドライン¹⁴が存在しているとは言えず¹⁵、日本事情及び日本の社会文化を専門にしていないインドネシア人日本語教師が授業の担当を任せられているのが殆どである。また、現在の担当教師が展開している科目は、学習内容を絞らずに日本事情に関する様々な知識を授業の中で教え込もうとしているため、学習者はこれらの知識を根本的なところまで深められるとは言えず、科目終了後に学習した知識が役立っているのかは不明である。そのため本研究の結果は、扱う領域が非常に広く自由度も高い日本事情を異文化接触場面に必要な日本事情というアウトラインで縛ることにより、実際の異文化理解に役に立つ学習内容及び学習方法へ直結するものとなる。また、本研究の結果はインドネシアという、日本国内の日本語環境とは異なる視点からなる日本事情教育の概念を構築し、日本事情（日本社会・文化を含む）を専門としない非母語話者教師を支援しうるものとなる。

¹² スタンダードは枠組みを指し、外国語教育を行う場合、そのスタンダードを基に教育を展開するという意味である。

¹³ 国際交流基金が CEFR（Common European Framework of Reference for Languages /外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠）を基に展開した日本語教育スタンダードである。国際交流基金は英語で Japan Foundation と称されるため、インドネシアの日本語教育ではこのスタンダードは JF Standard と呼ばれている。（CEFR の詳細は 25 ページを参照）

¹⁴ ガイドラインとは教授の指針を指す。

¹⁵ 新版のガイドブック（国際交流基金 2017）には「異文化理解」に関わる節が多く記載されているものの、日本事情に関わる節は記載されていない。日本事情という語も「外国人日本語教師のための訪日研修」（p. 32）のプログラムに一回のみ表出され、教授法科目や日本語科目と並び、研修の内容として記載されている程度である。そのため、JF Standard における日本事情は教育レベルではなく、科目レベルだと位置付けられている。したがって、本研究では JF Standard に日本事情教育を行うためのガイドラインは存在しないと判断する。

1.3 用語の定義

異文化接触場面

尾崎（1998）は日本語を媒介語とする際も含め、言語と文化を異にする個人と個人がコミュニケーションを行う場면을異文化接触場面としている。渡辺（1995, p. 92）は「ある程度の文化を経た人が、他の文化集団やその成員と持つ相互作用」と定義している。言語コミュニケーションのコンテキストでは、ある言語は一人の個人にとっては母語である一方、他者にとっては外国語であり、文化背景に関しても個人によりさまざまである。本研究では日本語教育の視点に立ち、日本人と高等教育機関で日本語教育を受けたインドネシア人との日本語を媒介語とした接触を指し、異文化接触場面の領域を限定することとする。

コースデザイン

本研究では、コースデザインとは、教師が設定する科目の目的及び目標、学習内容、学習活動及び評価方法等の計画を設計する手続きを指す。

日本事情

1962年に文部省が日本国内で日本語教育を実施している大学に通達した通知によれば、日本事情は外国人留学生のための一般日本事情、日本の歴史及び文化、日本の政治、経済、自然、日本の科学技術等に関わる科目である。日本国内の日本語教育において、80年代後半に日本語教育に普及したコミュニカティブアプローチ及び90年代に外国人留学生のニーズを考慮した影響により、現在に至る日本事情教育は異文化理解教育及び異文化コミュニケーション教育の理念に支持されるようになった。この点を踏まえて、本研究では日本国内とインドネシアにおける日本語教育の事情が異なることを考慮し、日本国内とインドネシア国内のコンテキストで日本事情の定義を二つに分ける。日本国内のコンテキストでは、日本事情は外国人留学生のための日本の社会文化及び日本の政

治、教育、経済といった日本という国に関わる物事の学習である¹⁶。一方、インドネシア国内のコンテキストの場合、高等教育の日本語専攻科¹⁷において、日本の社会文化に関わる事柄から日本の経済、政治、教育、地理、天候といった日本という国に関する情報や知識を学習の領域とし、一学期にわたる数十回の授業を行う科目名と定義する。

¹⁶日本事情科目について、日本国内では塩谷・小野塚（2015）のように一つの科目名を指す一方、横山（2017）のように、「日本の文化」「日本の歴史」「異文化理解」等の複数の科目を一つの科目のカテゴリーとして指すものもある。この点はインドネシアとの相違点である。

¹⁷インドネシアの高等教育において、4年間の制度で日本語教育を実施している「日本語教育学科」、「日本語学科」、「日本文学学科」、「日本文化学科」等の学科を指す。

第2章

日本事情教育における理論的枠組み

前章で述べた研究背景及び研究背景を基に、本章では日本語教育における日本事情の位置づけ及び概念を理論的な枠組みとして構築する。インドネシアの日本事情に関する文献は極めて希少であるため、本章は日本国内における日本語教育を背景にした日本事情の教育理論を反映する。第1節では、日本国内の日本語教育で日本事情学習が実施される背景及び変遷について概説する。第2節では、日本事情が扱う学習の領域を概説する。第3節では、現在に至るまでの日本事情の授業の類型に着目し、様々な日本事情の学習方法を論説する。第4節では、実践報告で共通点となった文化の領域に至る日本事情を考慮し、本研究の視点から日本語教育における日本事情の重要性、及び他の位置づけを概説する。第5節では、他の外国語教育における文化学習と比較することにより、異文化理解及び異文化コミュニケーションとの関連性を含めた日本事情の特徴を論説する。第6節では、第1節から第5節までの論説を基にし、本研究における異文化接触場面に必要な日本事情の理論的枠組みを構築する。

2.1 日本語教育における日本事情の背景及び変遷

日本事情とは何か、またその領域がどうなっているのかという点については、いまだにコンセンサスに至っていない（戸田 1992；宮城 1993；土屋他 1997）。この点は、日本事情の自由度が非常に高いことが要因となり（倉地 1994;大竹 2000）、日本事情の多様性が高くなっていることが理由となっている。日本事情の理念となったのは、昭和37年4月14日付で文部省が出した「外国人留学生の一般教育等履修の特例について」という通知書であり、これを検討すると、文化と言語の関係が重視されていなかった60年代から異文化に対する姿勢を養うことを重視する現在に至るまでに様々な変遷があったと結論づけられる。当時の通知書の内容は以下のとおりである。

外国人留学生の一般教育等履修の特例について（通知）

昭和 37 年 4 月 18 日

文大大第 244 号

文部大学学術局長から国公立大学
（短期大学を除く）長あて

<中略>

3. 特例による科目開設にあたっての留意事項

（1）日本語科目及び日本事情に関する科目（以下日本語科目等という。）を置き、これを開設する場合、いくつかの授業科目に分けて実施することができるものとする。たとえば、日本事情に関する科目としては、一般日本事情、日本の歴史および文化、日本の政治経済、自然、日本の科学技術といったものが考えられる。

（2）日本語科目等として開設する授業科目は、大学教育の水準に応じた内容を有することを要し、初歩的内容のものは従来どおり基礎外の扱とする。

また、各授業科目の内容については、日本人学生に対する一般教育科目の趣旨と同様の教育的意図を実現できるように留意するとともに、学生が在学または進学する学部の専攻分野に応じた基礎知識をも合わせて学習し得るよう配慮することが望ましい。

（参照：文部省「文大大 244 号 国公立大学（短期大学を除く）長宛て通知」）

上記からは、日本事情の領域は一般日本事情、日本の歴史及び文化、日本の政治、経済、日本の自然、日本の科学技術といった広範囲に及んでいることがわかる。この日本事情の内容について、金本（1994）、札幌（1993）、戸田（1996）、小川（1996）、河内（1998）は曖昧だと指摘している。より詳細に述べると、河内（1998, p. 166）は「教師が自由な発想でさまざまな活動をすることができる」と指摘している。金本（1994）は、概念及び内容の曖昧さが日本事情は文化教育として関心をひかない要因であると指摘しており、小川（1996）は文化が客観的な実体として存在しない¹⁸ことが、文化の領域まで扱う日本事情の曖昧さの要因だと考えている。それに加え、戸田（1996）

¹⁸ 文化が客観的な実体として存在しないとは認識者によって文化に対するイメージは変容するため、文化には客観的な実体がないという意味である。

は日本語教育との関係性が曖昧なところに注目しており、札幌（1993）は日本事情の目標が定義されない点が、概念が曖昧になっている要因だと述べている。日本事情が曖昧である原因について、様々な側面で指摘されているが、岡崎（1999）は、文部省が出した日本事情に関する通知書の内容が大雑把過ぎるとしながらも、ある程度の目安になるという見解を述べている。しかし、現在に至るまでの変遷を検討したところ、国内における日本事情教育の現状は、多国籍の留学生と日本人学生との異文化接触場면을学習手段とし、異文化理解及び異文化コミュニケーション力の育成を教育方針としていることがわかった。日本事情の領域に関しては、そのインターアクションを促す文化的なテーマが多く設けられている場合が殆どである。

こうした現状に至るまでの日本事情の変遷について、細川（2003）は「60年代～70年代」、「80年代」、「90年代～」の3つに分けている。「60年代～70年代」は、日本事情教育は素朴な内容であり、文化は日本研究の領域の一つだと扱われ、文化と言語の関係性を学習内容として捉えられなかった時期である。「80年代」には、日本語教育に普及したコミュニカティブアプローチの影響により、コミュニケーション能力と日本についての教養的な知識が重視されるようになった。つまり、言語と文化の関係が重視されるようになった時期である。「90年代～」は学習者の「個の文化」¹⁹を引き出し、発信させることに注目するようになった時期である（細川 2003）。

90年代には、異文化コミュニケーション教育及び異文化理解教育との関わりへの注目がより盛んになった。戸田（1992）は、異文化としての日本文化を観察し体験を行うことにより、自己文化の認識を超えて日本文化や世界への視野も広がる、と異文化への認知の過程を述べている。戸田とは異なるが、長谷川（1996）は、異なる考え方をもち相手との接点を探ることが視野を広げることにつながると付け加えている。徳井（1996a）は、相手とのコミュニケーションにおける誤解のプロセスに学習者の注意を向けさせ、そこから異文化交流に大切なことは何かを考えるとといった異文化トレーニング

¹⁹ 細川（2003）は、社会は個と個との創造的な関係から成り立つため、文化は集団である社会の中にあるのではなく、人間の個人個人の中にあると捉えている。

が大切だと、異なる見方をしている。もう一つの異なる見方として、河野（1997）は相互理解、即ち相手の文化に対しお互いの理解が異文化理解の扉だと述べている。ここでは、日本事情における異文化理解の捉え方や視点は様々である。しかし、異文化理解教育の理念に基づく日本事情の大切さを主張している点は一致している。なお、90年代初頭には、異文化適応学習のため（戸田 1992）、新たな視点を生み出すため（三牧 1992）、また、外国人のための日本文化教育である日本事情や外国人留学生との交流を通して異文化の学習を行うことが日本人学生の関心をひき、お互いに異文化を学習できるという意見（宮城 1993）も現れた。これらは、日本人学生が日本事情に加わることの大切さに気づくきっかけにもなった。そのため、90年代の半ばには、長谷川（1996）や徳井（1996a）のように、日本事情の授業に加わった日本人学生についての実践報告も確認されたが、当時は日本人学生には単位が与えられないケースもあった。土屋他（1997）は、日本人学生と留学生が日本事情の合同授業に参加することにより、異文化環境でどのように理解し合い共存する力を養うかに注目した日本事情教育を試みた。また、徳井（1997）も日本事情を異文化コミュニケーション分野として捉えている。土屋他（1997）及び徳井（1997）の実践報告の結果から、日本事情が講義型かつ理論的な文化を教授する知識の科目ではなくなっており、受講者が互いに異文化を超え共存する練習をする場、という役割も担うようになっていくことがわかる。当年代の終わり頃に、橋本（1999）は日本事情の授業を日本人学生と留学生のコミュニケーションの場としてとらえ、様々なテーマについてディスカッションを行わせた。また岡崎（1999）も、留学生のみならず日本事情の授業を受講する日本人学生のニーズを検討しており、日本事情は日本人学生にとっても重要な科目の一つであることを指摘している。

以上のように日本事情が異文化理解教育の場となった基礎の一つとして、日本文化に適応するための文化的同化、日本人化を教育方針にするのを控えることが最も大切なことだという指摘（三牧 1994）がある。文部省が通知を出した 1962 年から 1980 年代にかけては、文化的同化や日本人化は日本語教育において一般的な理念だったが、アンチテーゼとして機能したのが、当時広まっていた学習者主体・中心主義である（^{せがわ} 牲川 2002）。日本事情特集の「日本語教育」65号（1988）等では、学習者主体・中心が関

心を引き、日本事情教育における文化的同化、日本人化主義の崩壊の要因の一つとなっていた。文化的同化主義は多くの場合、教師主体の授業に支えられていたためである。1980年代には、いわば日本語教育に普及したコミュニカティブアプローチが学習者主体の理念に加わり、教師主体の授業の減少に伴い、日本事情における文化的同化・日本人化主義も衰退していった。

2000年代には、日本事情を再考する動きが見られるようになった（大竹 2000）。この時期には、異文化理解及び異文化コミュニケーション力の養成を目標とする日本事情もあれば、大竹のように日本人の日常的な生活についての理解を深め、留學生活の支援を目的とする日本事情もあった。この現象は倉地（1994）と大竹（2000）が述べたように、日本事情が自由度の高い科目であるため、担当教師によって日本事情で扱う内容も異なり、日本事情の目的にも影響を与えることを示している。また、当年代に細川（2000）は新たな視点として、外国語教育における「文化」とは何かを捉え直すことにより、日本事情の教育の開発を提案している。一方、脇田（2000）は、日本人学生と留學生が共同で作品を作成することにより、異文化交流体験をし文化や異文化理解を深めインターアクションする重要性を挙げている。宮本・松岡（2000, p. 64）は「異なる文化背景を持つ学生が交流することにより、自分の社会や文化、思考・行動様式などを客体化できるようになる」と述べており、日本事情の授業における討論、交流等の重要性を主張している。奥村（2000）は、日本事情の目的を国際化に置き、実生活のための望ましい教育に達するために、先ず文化的背景が異なる相手と討論やゲーム、共同作業等を行うことが必要だとしている。山口（2001）は異文化的な側面に関わる年中行事の学習を通して、日本人の価値観や考え方等を理解することができ、母国の文化のことも認識しなおすことができるとし、日本事情での学習と異文化的な体験を行うことが可能な学習環境への配慮の必要性を指摘している。以上のように、2000年代初頭に様々な提案が出てきたが、異文化接触場面や交流等の体験をするということが先行研究や実践報告の大きな共通点だといえよう。この理念を基にした教育を展開及び実施した例は、討

論やロールプレイ²⁰を行った柴田（2002）、ディスカッションを実践した三浦（2003）、プロジェクトワーク²¹を試みた吉廣・Gehrtz（2005）、一二三（2006）等にも見られた。

2010年以降は2000年代の理念を引き継ぎながらも、アクティブラーニングのアプローチで日本事情の実践を行うことがより盛んになった。これはアクティブラーニングというアプローチは受講者が受身的態度で科目を受講するのではなく、能動的に学ぶように設計されたアプローチであるためである。細川（2002）が述べたように、学習者が日本事情を自ら考え、日本文化を発見するという意見を支持している。また久保田（2012）も、日本文化を学習者が批判的に考え²²、それを学び、理解するという文化学習の理念を展開している。このように、日本事情学習において学習者自身の視点で日本文化を理解するということが教育の理念になったため、学習者の能動性を促すアクティブラーニングを教室に多く取り入れる要因となった。このアプローチで実践を行ったものには大橋・Gehrtz（2014）、高橋・都（2016）、二谷（2017）等がある。また、伊藤（2013）、膽吹（2013）、島崎（2016）は地域の文化に目を向け、アクティブラーニングを用いる授業の試みを報告している。こういった先行研究から、文化の事象を学習者が自らの視点で観察し、メタ認知²³レベルで深い考察を促すためには、アクティブラーニングのアプローチが多く用いられることがわかった。したがって、現在、異文化理解及び異文化コミュニケーション力を訓練する場としての日本事情はもちろん、客観的実体がない文化（小川 1996、p. 8）を学習するためには、文化に対する学習者の思考力を育てることが望ましいというわけである。

²⁰ 「ロールプレイとは、役割演技とも言われ、ロールカードによって与えられた役割や状況に応じた会話で演じる活動である。他者との会話を演じ、その活動を、教師や友達、自分自身の振り返りによって評価することにより、自分のコミュニケーションのあり方や良さを意識させ、それをクラス全員に共有させることがねらいである。」（牛頭 2014 p.75）

²¹ プロジェクトワークとは「ある外国語を学習するときに、クラスまたは学習者のグループでなにかのプロジェクトを設定し、それを遂行していく過程でその外国語を多量に使用しながら学習していく活動」（田中・斎藤 1993 p. 140）である。

²² ここでは批判的に考えるとは学習者が文化に関する物事を自ら問いかけながら、学び及び日常生活を取り巻く世界との関連性を考えることである（久保田 2008）。

²³ メタ認知とは「認知を超える認知という意味であり、自己の認知活動すなわち『知覚する』『記憶する』『理解する』などの活動を客体化して評価し、それらの活動を制御することであり、学び方を学ぶときに必要となるものである」（奥田 2007、p. 2）

日本事情の授業に日本人学生が加わるという授業のスタイルは、1990年代に盛んになった。三牧（1992, 1994）は、日本人学生が日本事情の授業に加わり、インタラクティブな学習活動を行うことにより、学習者に新たな視点を持たせることができ、新鮮な視野を広げるとしている。留学生と異文化接触場面をすることにより、異文化接触場面体験ができるということである。橋本（1999, p. 93）は「日本人にとっても日本とは何か日本人とは如何なる文化的存在であるのかを発見創造する開かれた場、それが日本事情という科目の持つ可能性として捉え返されていると言えよう」と、その可能性を挙げている。野村（2002, p. 62）は日本人学生に「①知らないこと②ふだん気にもとめないこと③知っていても深く考えたことがないこと④自分でやってみたいことがないこと」といった点に改めて気付かせる機能があると指摘している。また、留学生と様々な交流を行うことにより、ふだん何気なく使っている日本語も改めて考え直す機会になる（出原 2002）。他の利点としては、日本人だけでなく留学生にとっても、入学した時の友達の存在は欠かせず、ストレスの軽減や異文化適応力を培うためにも有効である（戸田 1992）という報告もある。

日本人学生が日本事情の授業に参加することにより、様々な利点を得られるということが多くの先行研究で述べられているが、授業自体にも情報量や質を上げることができるといった利点がある（佐藤 1999）。また、日本事情の授業に参加した日本人学生の数も増加しつつあり（徳井 1996b）、来日する留学生数が増加するにつれ、日本語教育に付随する形で日本事情の開講も増加している。つまり、日本事情は奥村（2000）が述べたように、日本国内における国際化及び90年代に用語として流行り始めた多様化に欠かせない存在だということである。こういった国際化及び多様化している日本国内で、日本語教育における日本事情の授業は多国籍留学生と日本人のディスカッション、対話等といった接触型の学習活動が行われる合同授業の場となった。また、相互理解及び異文化理解、異文化コミュニケーション力を養う場の一つにもなったと言えよう。

2.2 日本事情の領域

前述したように、日本事情の領域は先行研究では曖昧だと指摘されていることもあった。しかし、日本事情の領域が非常に広いという点は、日本事情の目的の設定により、領域を絞ることが可能であり、学習内容の領域もより明確となる。現在は日本国内において日本事情が異文化理解及び異文化コミュニケーション力を育成する場となっている側面があるため、このように授業の目的が明確となった場合、学習内容や学習活動を選定するための手助けとなる。以下、国際交流基金（2010）が挙げている日本事情の領域を提示している。

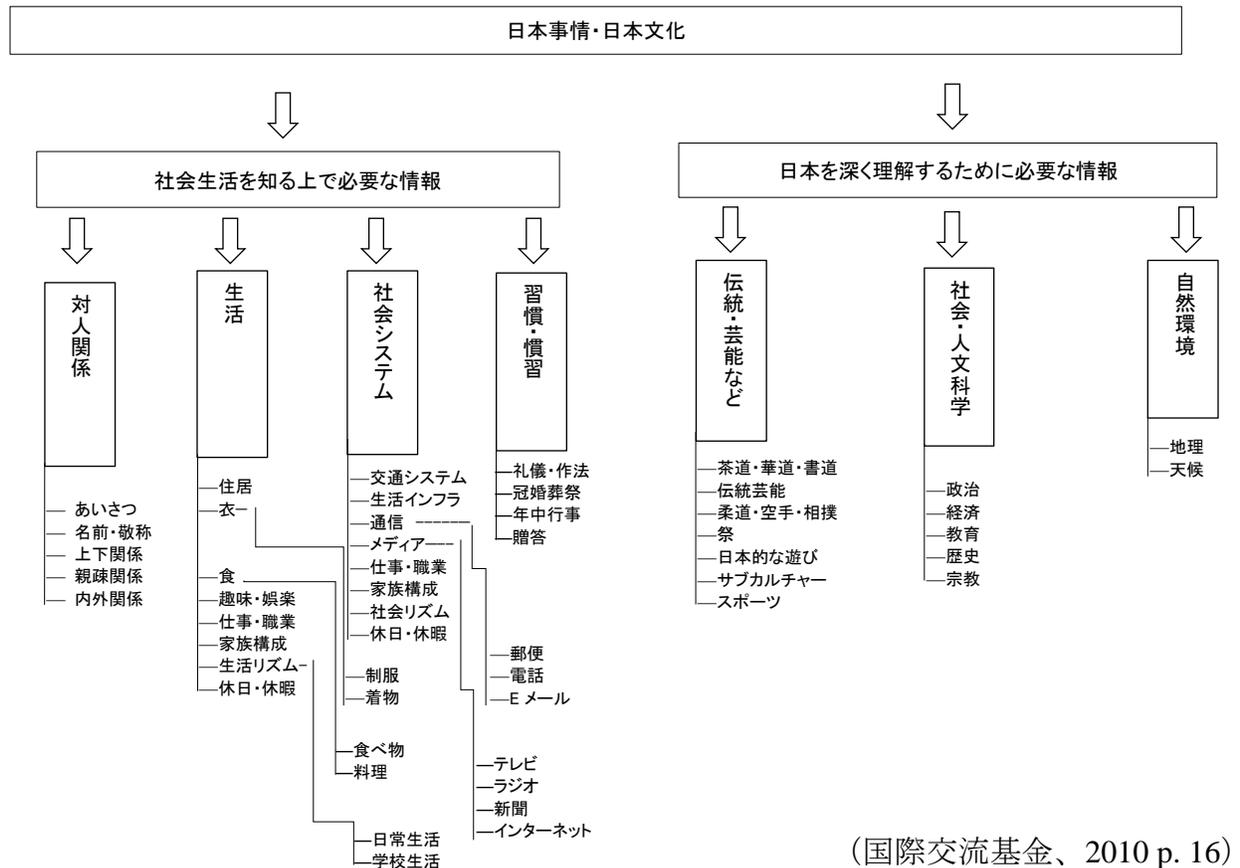


図 2.1 日本事情の領域

図 2.1 では、国際交流基金が定める日本事情の領域は、「社会生活を知る上で必要な情報」及び「日本を深く理解するために必要な情報」の二つに分けられている。「社会生活を知る上で必要な情報」はさらに「人間関係」、「生活」、「社会システム」、「習慣・慣習」の 4 つに分けられ、一方「日本を深く理解するために必要な情報」は「伝統・芸能など」、「社会人文科学」、「自然環境」の 3 つに分けられている。このような領域が非常に広い日本事情を担当する場合、教育の学習活動等を決定するため、大学の教育方針の検討、ドキュメント分析やニーズ分析を行うことが欠かせなくなる。国際交流基金（2010）は、日本事情を一つの科目として教える際、中級以上のクラスの場合は「何を扱っているか」ということを、教師及び学習者も意識し学習活動を行っているが、初級の場合は日本語の授業で日本事情に関わることを無意識に教えたり学んだりすることが多いことを指摘している。国際交流基金も、これまでの日本事情の内容を意識し、授業の目的や学習者の関心に合うかという点を振り返り、確認することが大切だと述べている。

日本事情が扱う学習内容において、佐々木（2002）は国際交流基金とほぼ同じ見解を持っているが、日本事情で重視される概念を分析し、日本事情の学習内容を「所産・知識としての文化」、「他者との相互作用に介在する文化」、「個としての文化」といった 3 つのカテゴリーに分けている。「所産・知識としての文化」は、例えば玄関での靴の脱ぎ方、お風呂やトイレの入り方といった日常生活を重視する文化であり、日本の大学に留学する学習者や日本社会に就く人などを対象としている。また、他の学習テーマとしてはジェンダー、環境問題、教育問題等といった一般的な教養を重視する文化の概念も含んでいる。他の領域は歴史、経済、政治、宗教、文学などといった、専門的な知識を重視する文化の概念であり、テレビドラマ、アニメ、カラオケ、コスプレなどといった大衆文化を重視する概念である。次は茶の湯、歌舞伎、生花などといった伝統文化を重視する概念、最後に日本人の考え方、価値観、思想等の見えざる文化及び内面を「文化」の中心に置く捉え方をしている、精神的な文化を重視する概念である。次に、佐々木の「個としての文化」は細川（2002）の「個の文化」の概念とほぼ同じく、文化というものは個人の社会に対する認識だと捉えている。最後に「他者との相互作用に介在する文化」の概念は、日本語母語話者と直接接触する機会が多い学習者のためのもの

であり、文化の背景が異なる他者と直接的な接触の中で、自己と他者との価値観や認識、行動様式の差異を重視する概念である。この概念には、「コミュニケーションスタイル」²⁴、異文化トレーニング²⁵、コミュニケーション上での言語及び非言語伝達といった、異文化背景のある人と外国語でコミュニケーションする能力を育成するために必要な項目が含まれている。また、この概念は細川（1999）が述べた言語習得の主課題として、他者との相互関係をどのように確立し、保持するかという点にも関わっている。以上の点を考慮したうえで、インドネシアの日本語教育の主目的をコミュニケーション能力の育成に置くとすれば、「他者との相互作用に介在する文化」の概念をもとに、日本事情を展開することを検討する必要がある。

2.3 日本事情授業の類型

日本事情の類型に関しては様々な視点からの分類が見られるが、宮城（1993）は担当教授者、使用媒介語、対象学習者、授業方法という 4 つの視点で分けている。詳細は次のとおりである。

- A. 担当教授者に関する視点から捉えた教授形態
 - 一、 日本語教師による担当
 - 二、 日本語教師以外の教授者による担当
- B. 使用媒介語に関する視点から捉えた教授形態
 - 一、 日本語使用による教授
 - 二、 日本語以外の媒介語の使用による教授
- C. 対象学習者に関する視点から捉えた教授形態
 - 一、 外国人学生だけのクラス
 - 二、 日本人学生との合同クラス
- D. 教授法に関する視点から捉えた教授形態
 - 一、 教師主導による学習活動
 - 二、 学習者主体の学習活動

（宮城 1993, p. 262）

²⁴ コミュニケーションスタイルとは相互作用を行う際に、個人の性格や習慣等に影響されるメッセージの伝え方である（Franksiska, 2006）。

²⁵ 異文化トレーニングとは異文化環境における勤務を有効に行うために、研究の結果を基に展開された行動能力のトレーニングである（Grove & Hallowel, 2002）。しかし、実践としては生活に関わる勤務外の行動能力のトレーニングを行うこともある。

日本事情という分野は融通性が高いため多様性が高く、宮城のように4つの視点で分けることができる。さらに、現在はオムニバス型で日本事情の授業を行う大学もあるため、授業形態によっては「日本語教師による担当」、「日本語教師以外による担当」、また、合同で担当するという形態になることもある。教授形態は、学習項目やテーマによって教師主体の授業から学習者主体の授業に切り替えることが可能である。これまでの先行研究は、様々な日本事情の類型を教育の目標・方針、方法によって分けることが可能である。教育の目標・方針で分けているのは戸田（1996）及び松島（2004）である。戸田は「一般教養型」、「専門基礎知識型」、「日本的文化語彙型」、「日本語能力型」、「異文化適応能力型」、「課題解決能力型」と日本事情の教授形態を6つの類型に分けている。詳細は以下のとおりである。

- ① 一般教養型：日本人に対する一般教養科目の代替物とするもので、専門領域の背景としての基礎的包括的知識の授与を重視する。一般教養の教員が担当する。
- ② 専門基礎知識型：専門課程の研究を有効かつ円滑に進めていく上で必要となる専攻分野に応じた基礎知識を重視する。留学生の専攻分野の教員が担当する。
- ③ 日本的文化語彙型：コミュニケーションアプローチ全般の教室活動の中で、ともすれば見落とされがちな日本に関する語彙を、体系的・系統的に教授することを重視する。「日本語」の教員が担当する。
- ④ 日本語能力型：日本語よりはそのものに焦点を当てるが、本質的には、日本語の聴解及び読解能力の育成を重視する。「日本語」の教員が担当する。
- ⑤ 異文化適応能力型：留学生が直面する異文化不適応の実例の提示、説明に基づき、適応能力の養成を重視する。「日本語」、「異文化理解教育」の教員が担当する。
- ⑥ 課題解決能力型：日本の文化に関して与えられた課題を、インタビュー、アンケートなど調査に基づいてまとめ、発表する能力の育成を重視する。「日本語」の教員が担当する。

戸田（1996, p. 71）

松嶋（2004, p. 32）は学習者の日本語のレベルに合わせて、日本語レベルが低いクラスには「理解項目を知識としてインプットをすることを中心とした」授業が望ましく、学んだ日本語を用いて日本と学習者の出身国を文化的に比較する、または異文化コミュニケーションに関する話題を取り上げる方法は上級のレベルに望ましいと述べている。なお、松嶋は日本事情のタイプを次のように分けている。

① 入門者向けの「理解すること」に重点をおく知識

日本で暮らしていく上で最低必要な、いわゆるサバイバル的な知識を理解させることから、日本で生活していくことと関連させた情報まで。ここに前述した、学習者が在住している地域と結びついた特有の名称の学習なども含まれる。

② 今後日本の高等教育機関で学ぶ上で、最低限有しなければならない知識

これは、学部で学んでいく上で、最低限必要な地理・歴史・一般常識に関する知識を指す。学習者のレベルと段階にもよるもので、①と重複する部分も含まれるが、生活していくのに必要なレベルから、学部学科で専門科目を学ぶ際、日本人学生が既に有している一般常識レベルの知識まで、幅広く対応して教育する必要がある。地理・歴史的なこと・社会事情・文化習慣に関連した項目が含まれる。

③ 異文化理解教育と関連させたコミュニケーション

日本の社会・生活・文化についてある程度理解した上で、自国の社会・生活・文化との比較、さらにその上で、学習者が日本人とどうコミュニケーションしていくべきかを考えるもの。中級・中上級レベル向けで、学部における日本事情教育に近い。

松嶋（2004, p. 33）

上記で松嶋は3つの日本事情の類型を述べているが、現在の日本事情の実践報告を検討すると、日本国内では③が多く行われていると考えられる。田中（2000）は、90年代に行われていた日本事情はプロジェクトワーク型のものが最も多いと報告しているが、プロジェクトワーク型では留学生と日本人学生が様々な異文化接触場面を行うことはタスクを達成する手段としての機能を持つ。

教育目標・方針による日本事情の類型は、戸田及び松嶋に述べられたが、授業の形式に関して金本（1994）は、「講義形式」、「討議形式（ゼミ形式）」、「学生発表形

式」、「教材読解形式」、「教材視聴形式」、「校外学習形式」の 6 つに分けている。金本と異なり大橋・Gehertz (2014) は、現在の日本事情教育に設けられるタスクを検討し、そのタスクによって「成果発表型」、「調査型」、「共同作業型」と日本事情を 3 つに分けている。日本事情教育を行う際に、一つの類型を選定することは絶対的ではなく、設定した教育の目的を達するために混合の類型のタスクや方法を用いて教育を行うことが望ましいと考えられる。なぜなら、学習者のニーズは多様化しつつあり、毎回、学習目的に合わせたタスクや方法を適切に選定できれば、最大限の日本事情教育の効果を見出す可能性も高くなるのではないかと考えられるからである。

2.4 日本語教育における日本事情

外国語教育の分野では、文化を学習する必要性をめぐる議論は際限がない。本研究は異文化接触場面に必要な日本事情に着目し、当然外国語としての日本語学習における文化学習も異文化接触に役に立つ文化学習でなければならない。つまり、この領域を日本事情学習に入れると、日本事情学習は異文化接触に役に立たなければならないということになる。接触に関しては同質の文化背景でも、摩擦や葛藤等が絶対に起こらないとは言えない。そのため、異文化接触を行う際に摩擦や葛藤等を回避する行動能力は無論必要であるが、倉八 (2001) が述べたように、摩擦を恐れず相手と積極的に関わろうとする態度が必要である。したがって、相手との違うところを認め敬意を払う態度を養うことという異文化理解教育の理念 (鈴木 2005) は文化学習に必要である。しかし、摩擦や葛藤等が起こった場合、相手と積極的に関わり解決しようとする態度を養うことも、外国語教育における文化学習には必要なことである。つまり、本研究では日本語教育における文化学習は学習者が百科事典のように様々な文化の事柄に関する知識を知ることを目的にすべきではないとしている。この点は、本研究での外国語としての日本語教育における文化学習の必要性と位置づける。

2.5 他の外国語教育における文化学習と日本事情の特徴

ここでは日本語教育における日本事情ではなく、アメリカやオーストラリア、欧州等といった他国の外国語教育における文化教授を検討した結果を述べる。インドネシアでは外国語教育における文化教授のフレームワーク²⁶が存在しておらず、今後、そのフレームワークの開発が待たれる。文化教授のモデルはこれまで多くの文化研究者により提示されている。また、多くの国はその国の事情に合わせて文化教授のフレームワークやガイドラインを展開している。ここでは異文化学習のフレームワークにおける言語学習と文化学習の関連性を考察し、アメリカ、オーストラリア及び欧州の文化教授のモデルを概観する。

2.5.1 アメリカ

アメリカには 21 世紀の外国語学習スタンダード (standards for foreign language learning in the 21st century) があり、National Standards in Foreign Language Education Project (1999) で展開されている。この教育の枠組みは外国語教育における文化のみを対象としているスタンダードという意味ではなく、学習者が文化を他の言語の項目と統合的に学習する仕組みである。この仕組みには「コミュニケーション (Communication)」、「文化 (Cultures)」、「関連 (Connection)」、「比較 (Comparisons)」、「コミュニティ (Community)」からなる 5 つのスタンダードがあり、英語では 5C と称されている²⁷。

このスタンダードの考え方によれば、目標言語で話している社会とのコミュニケーションを行うためには、実際に他者とコミュニケーションを行う際に適切に意思疎通を図り、文学作品及びメディア等を通して、その人々の考え方や価値等を解釈する力を育成しなければならない。そのためには、目標言語を使っている社会がいかなるコミュニケーションをし、話し言葉及び書き言葉はどのように構成され、それ以上にその言語で話

²⁶ 外国語教育における文化教授のフレームワークとは政策レベルまたは全国レベルの学会が構築した文化教授の枠組みを指す。

²⁷ 5C は国際交流基金 (2010) の解説によれば、コミュニケーション (Communication) は外国語で相互作用を行うこと、文化 (Cultures) は学習対象となった外国語で話す社会の文化を理解すること、関連 (Connection) は他の教科で学んだ内容と関連づけることにより情報を得ること、比較 (Comparisons) は外国語と母語を比較することにより、言語と文化の洞察力を養うことである。コミュニティ (Community) は、その外国語で話すコミュニティに能動的に参加することを指す。

している社会ではどのように人間関係が構築されるかといった点も学習しなければならない。

このスタンダードの文化学習の側面を検討した結果、「生活習慣・慣習 (Practices)」、「所産・産物 (Products)」、「ものの見方 (Perspective)」といった3つの領域で、文化を学習する方法が展開されている。この3つの領域はそれぞれに関係性を持ち、外国語教育における文化学習とは決して離れることができないものである。詳細は図 2.2 のとおりである。

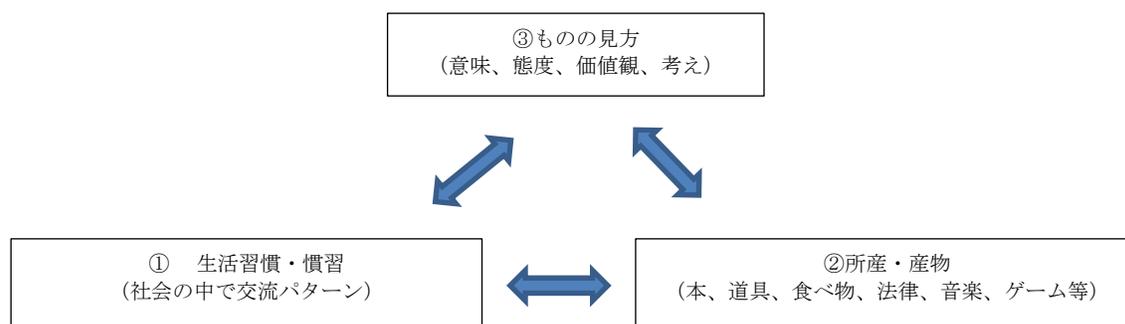


図 2.2 21 世紀の外国語学習スタンダードの原理及びその関連性
(National Standards in Foreign Language Education Project,1999 聖田訳 2002 p. 37)

上述に関して、国際交流基金（2010）は見える文化²⁸には①「生活習慣・慣習」及び②「所産・産物」があり、③「物の見方」は①「生活習慣・慣習」をもとに②「所産・産物」の背景であるとしている。このスタンダードの文化学習プロセスとして、まずは目に見える文化である①「生活習慣・慣習」及び②「所産・産物」を観察し、可能な場合は体験し文化的な深い認識を促すことが文化学習には望ましい。そして、最初のプロセスが完了したら、学習者同士で分析や討論を行うことにより、③「ものの見方」を理解しようとする。そういったプロセスで、このスタンダードの文化の学習方法は成り立っている。

²⁸ 中村（2011）は見える文化を音楽、住居、料理、ファッション等の文化に関わる具体的な事柄としている。一方、見えない文化は友人関係、論理観、職業観、コミュニケーション方法等といった抽象的な文化の事柄を指す。

2.5.2 オーストラリア

アメリカとほぼ同じく、オーストラリアにも異文化間言語学習（Intercultural Language Learning/IcLL）といった外国語教育における学習スタンダードがあり、アジア言語専門学習プロジェクト Asian Languages Professionals Learning Project/ALPLP（2005）によって展開されている。元々このスタンダードは Liddicoat et al.（2003）が考案しており、言語及び文化と学習がそれぞれの関係性を持ち、この関係性を言語学習において中心にすべきだとしている。このモデルでは、既に認知の母語及び母国文化を新たな言語・文化学習に取り入れ、最終的には自分のアイデンティティを維持しながら目標言語²⁹で話し、目標文化³⁰を理解することを目的としている。このスタンダードは「能動性の構築（Active Construction）」、「関連づけ（Making Connection）」、「社会的やりとり（Social Interaction）」、「内省（Reflection）」、「責任（Responsibility）」といった5つ³¹の領域から成り立つ。

教育の目的を達するために、このスタンダードは自文化を第1地点（the first place）、目標文化及び他文化を第2地点（the second place）とすることにより、自分のアイデンティティを維持しながら、外国語で流暢に話せる第3地点（the third place）を目指す（国際交流基金 2010）。国際交流基金は（2010）はこのスタンダードの原理を日本事情教育において学習方法の参考となれると提示している。図 2.3 はその方針を表している。

²⁹ 目標言語とは学習の対象となる外国語を指す。

³⁰ 目標文化とはその外国語を母語として話す人々の文化を指す。

³¹ ジョナック他（2008）は「Active construction（能動性の構築）」は言語的、社会文化的な事柄を意識させるための様々な活動的なタスク（課題）を学習者に与えること、「Making connection（関連付け）」は学習者が学んだことを他の教科で学んだことと関連づけることにより関係性を考えること、「Social interaction（社会的なやり取り）」は外国語で文化背景が異なる人とやりとりを行うこととしている。「Reflection（内省／熟考）」は、学んだことや気づいたことをメタ認知レベルでより深い考察へと至らせようとするものである。「Responsibility（責任）」は、学習者の学習のプロセスに対する責任感を養うことである。詳細はジョナック他（2008, pp. 119-120）を参照のこと。

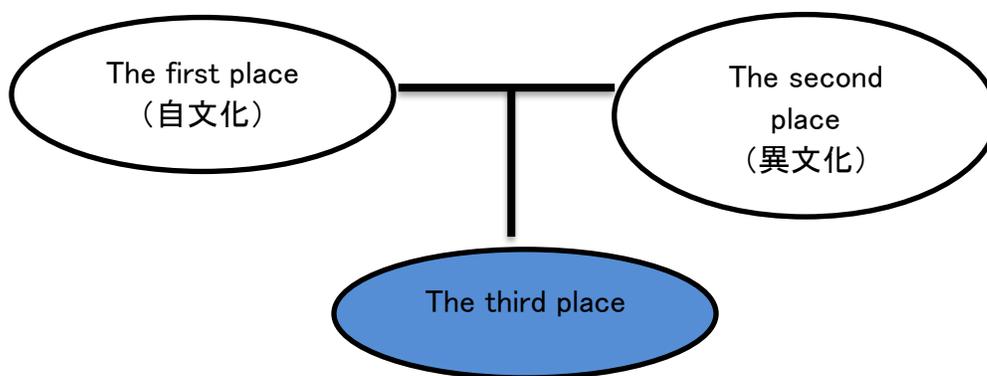


図 2.3 異文化間言語学習の原理及びその目的

(国際交流基金 2010, p. 37)

2.5.3 ヨーロッパ

ヨーロッパを見ると、欧州評議会/Council of Europe (2001) によって 2001 年に公開されたヨーロッパの外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) が開発されている。最新の補遺版 (2020 版) は以前よりも異文化能力に関わる節が多くなり、異文化能力は「複文化³²能力(Pluricultural Competence)」だと称した。しかし、ここでは能力は文化における相違点と類似点を識別することにより、他者性を受け入れる姿勢を指し、異文化仲介者としての役割をしようとする姿勢も指す (Council of Europe, 2020)。そのため、CEFR は複文化能力がコミュニケーションを仲介する行動³³に反映され、仲介を行うには「複文化間の促進 (Facilitating Pluricultural Space)」の役割を行うべきだとされる。この「複文化間の促進」は Council of Europe が展開したレベルに合わせたため、A1 から C2 までという 6 つの能力のレベルに分けられている (Council of Europe, 2020 pp. 114-115 を参照)。この点においては最初版 (2001

³² Council of Europe は学習者に文化の多様性に対する視点を持たせ、文化の多様性は「複文化」だと称した。

³³ 複文化能力がコミュニケーションを仲介する行動とはコミュニケーションを仲介する行動は言語及び文化背景が異なる対話者に入り、各対話者に言語及び文化の違いによるニュアンスや違和感等を感じさせないように、相当の能力が必要だとされる。この能力は複言語能力・複文化能力である。

版) よりも文化に関わる能力により重点を置くようになっている。その背景には、コミュニケーションの仲介者へのニーズが高まっていることが推測される。

2.5.4 日本事情の特徴

日本語教育における日本事情は、アメリカの 21 世紀の外国語学習スタンダード、IcLL、CEFR と異なり、1962 年に文部省が出した通知書がきっかけとなっている。しかし、本章の第 1 節で述べたように、外国語としての日本語学習と文化学習の関係性には重要性を示さず、留学生に必要な日本に関わる事柄の学習の重要性のみ記載されている。そのため、当時は日本事情と日本語学習との関連性に着目せず授業が行われていた。しかし、日本語教育で普及したコミュニカティブアプローチの影響や 90 年代に多国留学生のニーズに着目した影響もあり、日本語学習と文化学習との関連性が注目されるようになった。しかしながら、日本の地理、天候、経済、政治等といった言語学習に直接に関わらない事柄が日本事情から衰退したという意味ではない。当然、そういった事柄に関わる学習も日本事情の領域となっているため、この点は日本事情の特徴と言える。

教育の展開にも日本事情の特徴が見られる。本節で述べた外国語教育のスタンダードではチームが形成され、数十年にわたる研究と実践を重ねたうえで、外国語学習における文化学習の位置づけが構築された。これは外国語教育のスタンダードにおける文化学習のフレームワークとなる。しかし、前節で述べたように、日本事情は現在に至るまで多くの研究や実践がなされてきたが、フレームワークと言える教育の指針が存在していたとは言い難い。これは、科目としては自由度が高いため、教師は個人の教育観³⁴を基に授業を展開することが可能なためである。この点も、日本事情の特徴であると言える。

本節で挙げた外国語教育のスタンダードにおける文化学習の教育理念は、異文化理解及び異文化コミュニケーションに影響されるのかといった点を検討の領域に入れていないのだが、日本事情は異文化理解教育や異文化コミュニケーション教育の教育理念に支

³⁴ 教育観とは教師自身が考える理想的な教育、またその理想的な教育を達成するために必要な実践・方法のことである。

持された側面とされていない側面がある。鈴木（2005）が述べたように、異文化理解教育の理念が異なるものを認め、共感や敬意を払う態度を養うことであれば、宮城（1993）が述べた「日本人学生との合同クラス」、松島（2004）の「異文化理解教育と関連させたコミュニケーション」、大橋・Gehertz（2014）の「共同作業型」、佐々木（2002）が述べた「他者との相互作用に介在する文化」といった日本事情の類型は、異文化理解教育及び異文化コミュニケーション教育の理念に支持されると言える。本研究では、日本事情と異文化理解及び異文化コミュニケーションとの相違はなんであるかという点をめぐる議論から抜け出し、日本事情は異文化理解と異文化コミュニケーション教育の理念に支持される側面があると捉えている。この関連性に関して、日本事情が社会問題や生活等に関わるテーマを扱うとしても、現状のように外国人留学生と日本人学生が行うディスカッションやプロジェクトワーク、ディベートといったインタラクティブ³⁵な学習活動を行う日本事情は少なくない（この点に関しては第3章で実践報告の例を挙げる）。こういった活動の目的が、テーマに対する視野を広げさせ、学習者に様々な視点に気づかせ、お互いに異なるものを認め敬意を払う態度を養うことであれば、これらの活動が異文化理解教育及び異文化コミュニケーション教育の理念に支持されると言えよう。この点も日本事情の特徴の一つだと捉え、異文化接触を行うために必要な日本事情教育の一部であると考えられる。

2.6 異文化接触場面に必要なコースデザインにおける理論的な枠組み

第1節から第4節までを再検討すると、日本事情の教育理念が多様化するきっかけをもたらしたのは、80年代後半に日本語教育で普及したコミュニカティブアプローチ、及び90年代に日本語学習者のニーズに配慮するようになったことである。この点は前節で述べたように、異文化理解及び異文化コミュニケーション教育の理念に支えられる日本事情は異文化接触場面に必要な日本事情であるが、こういった日本事情の存在に至るまでは様々な実践と研究が重ねられた背景がある。本節では、異文化理解及び異文化

³⁵ インタラクティブとは対話または双方向のことを指す。

コミュニケーション教育の理念に支持される異文化接触場面に必要な日本事情となるプロセスに着目する。

元々、日本事情学習は知識的な学習であったが、80年代後半にコミュニケーションアプローチが普及したこと、さらに外国人留学生のニーズに配慮するようになったことが日本事情の革新的な背景となり、異文化理解及び異文化コミュニケーション教育の理念に支持されるようになった。当然、知識的な学習を提供する日本事情が衰退したという意味ではない。本研究では様々な理論的な文献や実践報告を検討し、図 2.4 に示すように、日本国内における日本事情の展開をまとめた。

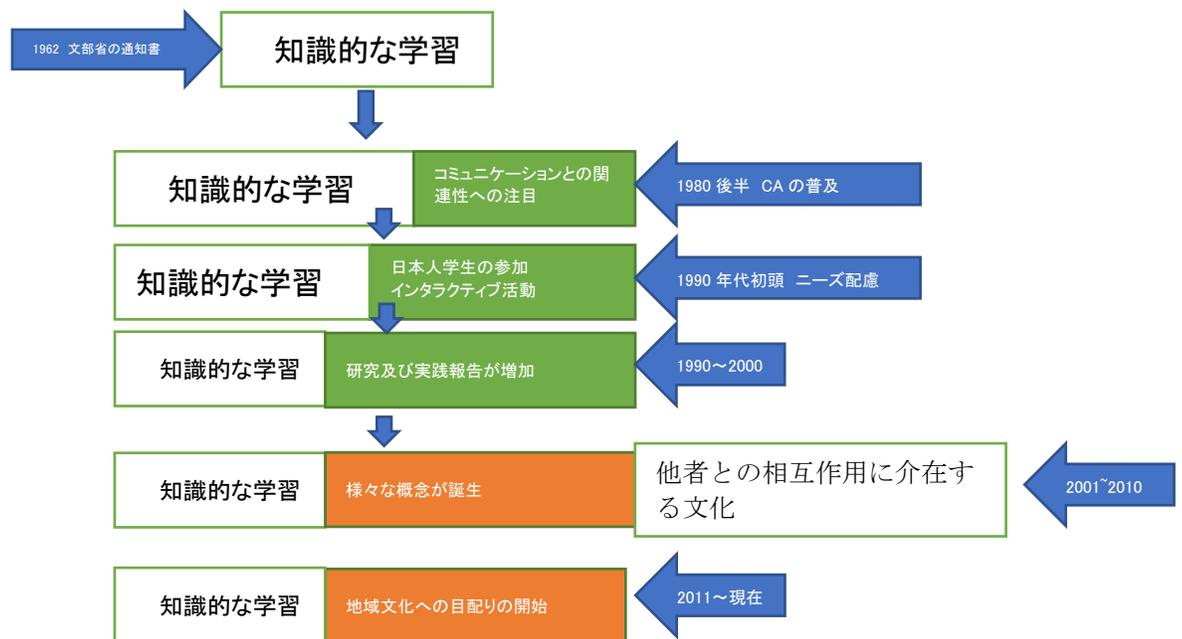


図 2.4 日本国内における日本事情の展開

図 2.4 からは、コミュニケーションアプローチ（図では CA と省略する）は日本事情における最初の変遷のきっかけとなったことがわかるが、日本事情の学習ニーズを把握しそのニーズに応えるという配慮も軽視されるものではない。むしろ、学習者のニーズに応えようとするからこそ、現状のように日本事情の授業で様々なインタラクティブな学習活動が多く行われるようになった。そのため、JFL 環境において異文化接触場面に必要な日本事情を展開するためには、ニーズ分析を行うことにより学習者の視点を考慮す

る必要がある。無論、ニーズ分析の結果のみでは異文化接触場面に必要な日本事情が明らかとなるとは言えないため、異文化コミュニケーション教育の理念をもとに分析する必要がある。異文化接触に必要な日本事情は、松嶋（2004）が指摘したように、異文化理解及び異文化コミュニケーション教育の理念に支えられ、日本語レベルが中上級の学習者のために設けなければならない。以上の内容を、図 2.5 にまとめる。

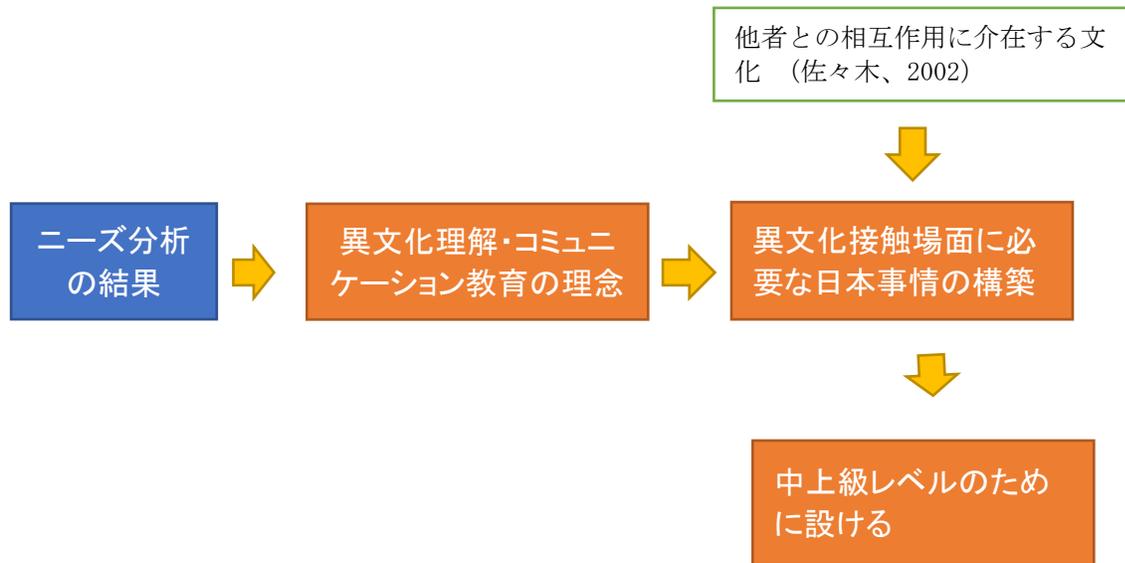


図 2.5 理論的枠組みに基づく日本事情開発

第3章

先行研究の概観及び課題の提示

前章で述べた理論的な枠組みを基に、本章では日本事情教育に関わる先行研究を概観する。第1節では、日本事情の領域が極めて広いため、日本語テキストにも日本事情に関する情報や知識から盛り込まれていることを概説する。第2節では、日本事情が一つの科目としてどのように実践され、どういった効果をもたらすのかという点についていくつかの例を挙げ、実践と成果をめぐって議論する。第3節では、近年の日本国内における課題を挙げ、求められる日本事情はどういったものなのかを議論する。第4節では、インドネシアの日本語教育における日本事情に関わる先行研究を挙げ、ベトナムやマレーシア、タイにおける日本事情と比較し、課題及び日本事情学習に関する共通点や相違点を論ずる。第5節では、先行研究から明らかとなった点及び課題となっている点を論じることにより、本研究の課題を提示する。

3.1 日本事情が取り扱う内容

橋本（1994）は、精神的風土³⁶と日本人の精神性も含め、日本人に関係のある事柄は日本事情の領域であるため、日本語の初級教材において日本事情に関わる項目がどの程度含まれているかを考察した結果を報告している。橋本によれば『日本語の初歩』、『にほんごのきそⅠ』・『にほんごのきそⅡ』、『文化初級日本語Ⅰ』、視聴覚教材としてのテキスト『ヤンさんと日本の人々』及び『日本語初歩 LL』の全ての教材には、日本事情に関する情報や知識が組み込まれているということがわかった。日本事情は日本語教育から決して切り離すことができず、日本という精神的風土から日本人の精神性の理解に至るまで発展・充実させることにより、日本語と日本事情が相互補完的關係を十分に果たし、望ましい日本語の学習が可能になると橋本は主張している。

京（2001）は、学習者が様々な情報を得て、その情報をもとに学習者自身が考え、各自が持つ最大限の力を活用することにより、日本で円滑に生活できるための総合力を養うことを日本事情の教育の目的だとしている。さらに、日本事情は時代によって変わり

³⁶ 精神的風土とは集団における精神的な共通点を指す。

つつあるという説を基に、当時の代表的な日本事情のテキストを分析した。そのテキストは『日本語・日本事情リソース型総合教材の過渡期の「日本」を考える』（1997）、『日本を話そう 15 のテーマで学ぶ日本事情』（1994）、『中・上級日本語教科書 日本への招待』（2001）である。分析の結果、全テキストが扱っているテーマは、子供を取り巻く環境、女性の生き方、若者の価値観、組織での個人のあり方、日本国内の外国人、日本社会・日本人の意識や行動様式等、現代の日本社会が抱えた多様な課題であった。また、20世紀から21世紀の過渡期の日本を視野に入れることにより、将来を考える狙いを持つと指摘されている。各テキストには一般的な日本の紹介、問題点の提示、学習者が日本を身近に感じられるようにするという目的が共通していると結論づけている。しかしながら、日本事情教育においては科目の学習項目が各教師に任されているため、科目の内容が教師の主観に影響される可能性が高い。また、どのテキストを用いるかによって、日本に対する学習者の印象も異なってくるといったように、課題が二つあるとしている。

西井（2002）は、日本事情が留学生に対する特別な配慮をもとに展開されている科目であり、異文化適応もしくは大学への進学のための予備教育トピックであるとしている。日本事情における課題は、日本で起こっている現象、日本に存在するものは全て日本事情だと言えるため、範囲が非常に広い点である。なお、専門的な部分まで網羅することは日本事情の目的ではなく、専門的なレベルと日本事情との関係が曖昧であるため、各分野において「基礎」、「常識」についての認識をしっかりと持ち、各専門家との共同検討が必要である。また、特徴に関して西井は、日本事情が日本語教育の一環になると同時に、英語等を媒介語とした場合、留学生教育の一環ともなり、日本事情教育の効果がより独自性を持ってくと主張している。

日本事情的な日本語学習のコンテンツは、橋本（1994）が指摘しているように、初級日本語のテキストにも現れるため、日本事情は日本語学習から切り離せないということがわかった。しかし、日本事情領域が、具体的な事柄から日本人の精神的かつ抽象的な事柄まで幅広く及んでいるため、日本語教師はどのようにそれらを学習者に伝えるべきかということはまだ不明である。なお、一つの科目のレベルになると、京（2001）が指摘しているように、日本事情の学習内容や教える方法は各教師に任されているため、教

師の主観の影響が強く、テキストの異なる視点も日本事情に対するイメージに影響を与える。そのため、日本事情の教育において、学習者は自分自身の視点で日本事情に対する解釈や事象をどのように引き出せるかという点が課題となっている。元々、日本事情は多くの先行研究で学習内容として何を取り扱うか、どのように教えるかは曖昧である、ということが指摘されている（金本 1994；河内 1998；小川 1996；戸田 1996；札幌 1993）。そのため、多くの日本事情の担当者は、自分の文化の解釈に基づいた日本事情の授業を展開している（川上 1999）。日本事情のテキストはもとより日本語テキストにも、日本事情学習に関わるコンテンツは存在しているが、日本語学習者が幅広く様々な日本事情の学習内容の中から何を求めているのかは、未だ不明である。日本事情に対する視点は個人によって異なり、多様な見方で見るとすべきである（川上 1999；河野 2000；国際交流基金 2010）ため、学習者の日本事情に対する学習ニーズを分析する必要がある。また、ヒューマニスティックアプローチ³⁷の観点から見れば、自立学習を促すために、学習者には何をどのように学習するかを言う権利があり、教師はそれに応える義務がある（Nunan, 1988）。そのため、学習者の学習ニーズを把握することも、日本事情教育においての一つの課題ではないかと考えられる。

3.2 日本事情の実践報告

三浦（2003）は、大学の日本事情において文化学習方法としての多文化交流ディスカッションを行い、40～45名程度の多国籍留学生及び日本人学生が受講した。討論のテーマとして、日本人の“Yes”は“No”なのか、日本人は差別主義者か、宗教による差別、外人、グループ志向、日本人の謝り方、結婚、男女の役割、男らしさ・女らしさ、社会に出て成功するために何が必要か、人は何をもって判断するのか、人生の目標、学歴、フリーター等が設定された。評価の方法は、討論したテーマに関連した研究レポート、討論についての感想文を学期末に提出してもらい、それに加え授業への積極的参加度を判断して評価を行った。受講生からの感想として、「有意義で印象深い授業であったこ

³⁷ 宇野（2015, p. 19）は「ヒューマニスティックアプローチ（人間主義的教授法）は、教育の場で人間主義的な視点と配慮を再認識させるものであり、授業という場面においても、お互いが他者を全人的な存在として受け入れ、尊重しつつ、授業内活動を行う」としている。

と、視野が広がったこと、友達ができたこと、討論で自分の考えを言う練習ができたこと、レポートの書き方の講義や、具体的な指示が大変ありがたかったこと、レポートや発表の良い練習になったこと、楽しみな授業だったことなど、ほとんどが肯定的なコメントであった」（三浦 2003, p. 39）ことが示されている。三浦の授業から見られた課題は、授業や討論において学生の主体性を引き出す方法、討論のきっかけを作る宿題用資料の選定をスムーズに行う方策、討論用資料の対訳版が不十分なこと、科目は後期のみの開講だったため通年の授業を望む声が多かったことであった。

ケリ（2005）はアンケート結果をもとにカリキュラムを構成し、日本事情教育の実践を報告している。ケリが実践した日本事情教育では、教師が何かを教えるよりも、留学生の母国と日本を比較し、ディスカッション、討論等を行うことにより、受講者が自分なりの意見を引き出すことができた。テーマとしては気候、日本の教育、伝統文化、日本史等などが設けられている。ケリは学習者からの感想として、「ビデオを見てからグループに分かれ、ディスカッションで自分の意見が言えた」、「ビデオ視聴は役に立つ」、「学んでいる日本語を使って活動できた」等の肯定的な印象を挙げている。課題としては、他の日本語クラスとのテーマの関連性をどのように結びつけるか、また学習者の意見がより引き出せるように、授業前に資料を配布するなどの工夫が必要だとしている。

サウクエン（2006）は、日本事情の主目的は「日本の常識」を教えることであり、留学生向けの科目だとしても、同年代の日本の若者にも個人差があり、日本人でさえ学習内容が分からないことも珍しくないといった批判的な理念をもとに日本事情を展開している。さらにサウクエンは、批判的理念に基づいた「Japan Literacy」という日本事情を展開した実践の結果を報告している。「Japan Literacy」とは、社会文化能力と社会言語能力の向上を目的とした日本事情教育を指す。サウクエンが設定したテーマは特に「日本人に会う」、「日本という国にいること」、「日本で移動する」といった身近なテーマである。サウクエンはこの「Japan Literacy」を基に、日本事情科目を展開した結果、学習者が求めているのは日本人並みの様々な知識を獲得するのではなく、自分のアイデンティティを失わず自分の生活を豊かにすることであると主張している。豊かにするというのは日本に関する事情をより深めて日本語をより使いたくなり、日本人とのネット

ワークもより広げたいくなるような生き方である。そして、こうしたフレームワークを日本語教育関係者が提供すべきであると指摘している。

一二三（2006）は、日本事情の目的を、国際的な視野に立った相互理解・相互共存の態度や能力を培うこととし、「留学生自身が能動的に日本人や日本文化を直接触れることを通して、抱いた問題や関心を基に、自分自身の問題意識を持ち、日本人との直接のコミュニケーションや、日本文化の直接体験によりその問題を掘り下げ、考えつつといった、立場に立った考え方と自分がそれまで無意識に持っていた自己の視点を認識し直し、新たな視点に立った思考の仕方を身につけること」としている（一二三 2006, pp. 33-34）。学習内容に関しては、受講者の疑問に基づいた内容に取り込むべきであり、単なる知識を与えるだけでなく、学習者が自分なりに考える力を育成することが大切なことであるとしている。この日本事情授業の実践から得られた結果は、留学生が母国と日本、または他国について考える力の育成の重要性を示しており、考える力の育成は日本語能力（会話・聴解）の育成にも繋がる。日本人学生側にとっては日本と他国について考える力の育成と共生言語としての日本語の意識化に繋がることが明らかにされた。この点から見て、日本事情授業で行われる相互交流から日本人学生側にも学習プロセスが生じているのであり、日本事情授業が日本人学生のための教科にもなっている点を指摘している。

3.3 日本事情教育における課題

横山（2017）は、2001年から2016年にかけて朝日大学における「日本語研修課程」の「日本事情科目」³⁸の実施を検討した。その結果、日本語を学習し始めた初級の学習者は様々な日本語テキストを用いることにより日本語を習得しようとするが、こういった段階で日本語能力が未熟な学習者に「何を教えるか」、「どのように教えるか」、「何を学ぶべきか」が日本事情の課題となっていると指摘している。さらに日本語テキ

³⁸ 「日本事情科目」とは本大学の留学生別科における「日本語研修課程」は、「文型・文法」、「口頭表現」、「読解」、「聴解」といった「日本語科目」と「日本の文化」、「日本の歴史」、「異文化理解」といった「日本事情科目」という二つのカテゴリーで科目が分けられている。横山は「日本事情科目」の実施を分析した。

ストと比較すると、日本事情の教科書は種類が少なく、教育内容・方法も教師に任されているため、授業者が学習内容等を選定し挑戦することが必要だとしている。

宇塚・岡（2014）は、岡山大学において1999年から2014年にかけて実施された、留学生を対象とする日本事情を検証した。学習活動は「買い物練習」や「ATMの使い方」といった生活体験型の学習項目が多く設けられ、受講者は15名程度である。また、毎学期末に受講者にアンケート調査を実施し、その結果を授業の改善に活かそうとしている³⁹。結果としては、受講希望者が増加しつつあるため人気が高い科目と位置付けられた。しかし、学習者のニーズや学習者数の増加といった現象に環境を合わせ、教育を改善・発展させることが必要であることと、地域との交流・連帯を強める必要性も課題であると主張している。

塩谷・小野塚（2015）は表現力を養うことを目的として、2009年から2011年までと、2013年から2014年までの期間、日本事情にディベート活動の試みを取り入れ、実施した内容を分析した結果を報告している。受講者は留学生のみであり、学部の1年生と2年生を対象に科目を設定した。科目は一学期に15回行い、日本の教育や住宅等をテーマとして取り入れた。この科目では、教材として用いたビデオに受講者の気づきを促す効果があった。しかし、全体的な活動の反省点を考慮すると、日本事情に重要なのはコンテンツを議論することではない。塩谷・小野塚は学習者の論理的思考の育成及びインタラクティブな活動を目指すために、教師側から具体的な枠組みの提示が必要であるという課題を挙げている。

3.4 インドネシアの日本語教育における日本事情の研究

現在、インドネシアで報告されている日本事情に関する先行研究は多くないが、本節ではDiner（2014）、高崎・都（2016）、Artarina（2020）を先行研究として検討する。この3つは、日本事情教育の実践報告に関する研究であり、インドネシアの高等教育及び日本語専攻科で実践した結果報告である。

³⁹ 受講者には各授業項目を「5.とても良い」から「1.とても悪い」の5段階で評価してもらった。このアンケートの結果は、ニューサイエンスへの見学を中止したり、学校への訪問は小学校訪問のみに絞るなど、授業の改善に活かそうとしている。

Diner (2014) は「エリンが挑戦シリーズ」を主教材として日本事情を行った。学習テーマとして、日本料理の体験（巻き寿司作り）、日本人の家、コンビニ、書道の体験、日本のレストラン、浴衣体験、電車の乗り方、高校生のアルバイトといった知識型と体験型の授業が設けられた。受講後、受講者に5問のアンケート調査を行い、その結果、受講生は日本文化への理解を高めることができ、文化に関わる語彙もより理解できていることがわかった。そのため、受講者も日本語で話す自信をより持つようになったとDinerは報告している。

高崎・都 (2016) は日本事情にアクティブラーニングを取り入れ、5つの注意点及び5つの原理に基づく学習活動を行なった。5つの注意点とは、参加交流型の授業、日本と自国を比較し、滞在環境に目を向けさせ、グループ活動と一斉授業を交互に行い、日本語での発言機会をより多く設けることである。一方、5つの原理とは、学習者の参加及びインターアクション、自国との比較、学習環境へのフォーカス、グループ活動の多様性、「講義型の授業」、及び日本語で意見を述べるチャンスである。学習テーマは、「自分の国について紹介する」、「日本語について学ぼう」、「日本の四季・行事」、「日本の都市」、「日本文化について話し合う」といった5つであり、授業は合計5回行われた。受講者からの意見としては、「わかりやすかった」、「理解できた」といった肯定的な声が最も多かった。このアクティブラーニングの試みは、受講者の日本文化に対する興味・関心を高め、学習への自信につなげることができる結果を出せたとのことである。高崎・都は、この方法をインドネシア人の日本語教師にも使用するよう奨励している。

Artarina (2020) は、学習者の動機付けを向上させるために、2015年から2017年までの日本事情を内省した結果、教材不足及び教師主体の授業が学習者の動機付け及び理解度が低い要因だとしている。反省点を考慮した結果、日本語でのロールプレイ及び学習者による発表を多く設け、日本の地図や日常的な社会生活を表すビデオ、教材の作成、復習のための課題を日本事情の授業に取り入れた。その結果、学習者の動機付けが向上したと報告している。

Artarina (2020)、Diner (2014) の研究結果を考慮すると、外国語教育における言語と文化の関連性を出発点とし、外国語教育に文化学習が必要であるという発想を持って

いることがわかった。しかし、学習内容としては、言語と直接的に関わらない学習内容が殆どであった。この点を考慮すると、日本事情教育の再考を行う必要があるだろう。

インドネシアの日本語教育における日本事情教育の課題は、日本語での参考文献や教材が少ないこと、個々の学習者にレベルの差がある点、日本文化を教えることが難しい等がある（高寄・都 2016）。つまり、日本事情教育を行うためには、教材や文献、教育人材に関わる課題があるのである。こういった課題はインドネシアだけでなく、ベトナムにも見られる（グエン他 2013 ; Tran, 2009）。マレーシアの課題を見てみると、日本の会社文化に対するステレオタイプを持っているという危険性が挙げられる（Yeehan et al., 2017）。タイでは、日本語学習者のニーズが把握されていないことが課題である（吉嶺 2018）。こういった課題はインドネシアの日本事情教育にも見られるため、共通の課題と言える。また、日本事情教育における様々な課題を解決するためには、日本語教師の育成を改善すること、及び文献や教材等を増やすことといった対策も必要であるが、日本語母語話者ではない日本語教師が担当できる日本事情科目の開発も必要である。

3.5 先行研究のまとめ及び研究課題の提示

3.5.1 先行研究のまとめ

第 1 節から第 4 節までで日本事情に関する先行研究を検討した結果、明らかになった点を以下にまとめる。

- ① 一般の日本語のテキストには、必ず日本事情に関わる要素がある
- ② 様々なテーマをめぐる討論は、学習者の肯定的な印象を引き出せる
- ③ 異文化に対する気付きを促すためには、ビデオの視聴を通しての学習が有効である
- ④ アンケートで学習者の意見を把握し、その結果を授業に取り入れることにより、さらなる授業改善につながる
- ⑤ 日本事情のテキストによって日本の社会や文化に対する執筆者の視点が異なるため、使用するテキストによっても日本に対する学習者のイメージが異なってくる

- ⑥ 授業の内容の全てが教師に委ねられるため、教師の主観の影響が大きい。
- ⑦ 日本事情の領域は様々な分野に及んでいるため、各専門家との協力が必要である
- ⑧ 学習者主体の授業が望ましいが、その主体性を引き出す方法は課題となっている
- ⑨ 学習者の増加や求められる科目数に応じ、学習環境に配慮する必要がある
- ⑩ 学習者ニーズが把握されていない
- ⑪ 教材や資料、文献などが不足しており、この点は他の東南アジア諸国にも見られる。
- ⑫ 初級レベルの日本語学習者に適切な日本事情はいかなるものかまだ不明である。

3.5.2 本研究における課題の提示

以上の点から本研究は以下のように課題を設定する。

- ① インドネシアにおける日本事情の現状を踏まえた場合、異文化接触場面に必要な科目はいかなるものか
- ② 現在のインドネシア人日本語学習者の日本事情学習のニーズは何か
- ③ 学習環境及び学習者のニーズを踏まえ、異文化接触場面に必要な日本事情をどのようにデザインすべきか

第4章 研究方法

本章では、本研究の課題を解決するために選定した研究方法、及び手順を論ずる。第1節では研究の手順を述べ、各課題を解決するためにそれぞれの研究方法を概説する。第2節では、課題①をこなすためのドキュメント分析を選定する背景及び手順や、本研究における分析対象となるデータを概説し、分析の手順を論ずる。第3節では、課題②を解決するためのニーズ分析の概念、及び本研究が行うニーズ分析の手順を概説し、結果を分析する方法を論ずる。第4節では、課題③を解説するために、異文化接触場面という概念及びJFL学習環境を配慮し、学習者が求める日本事情を概念化するために質的アプローチを用いて議論を行う。さらに、その結果をコースデザインの手続き上で具体化する方法を概説する。

4.1 研究の手順

次に、それぞれの研究課題を解決するために、日本事情教育における理論的な枠組みを構築する。まず、課題①異文化接触場面に必要な日本事情の科目とはいかなるものかを解明するためにドキュメント分析を行い、現状を考察する。ここでは、日本語専攻科を開設している大学のホームページにアクセスし、カリキュラムにおける日本事情を確認する。シラバスが公開されている場合は分析の対象とする。ここでの分析は、シラバスから確認された学習内容及び学習活動を国際交流基金が提示した日本事情のテーマを基に分類し、佐々木（2002）が述べた「他者との相互作用に介在する文化」「所産・知識としての文化」「他者との相互作用に介在する文化」、「個としての文化」という3つのカテゴリーに分ける。その結果を踏まえ、異文化接触に必要な日本事情にするためにはどのような展開が必要なのかを分析・考察する。

課題②インドネシ人日本語学習者の日本事情のニーズは何かを明らかにするために、理論的枠組みを基にアンケートの項目を作成し、そのアンケートを用いて予備調査を行う。この予備調査の結果は、本調査に反映する。調査の結果は Arikunto（2012）が述べた量的方法で分析し、「高」「中」「低」でカテゴリー化を行う。最後にデータを考察

し、インドネシア人日本語学習者の視点から求められる日本事情教育を提示する。このデータの信頼性を検証するために、アンケートの質問項目における選択肢から回答を選んだ理由に関する協力者の記述を得て、それを KH Coder⁴⁰で分析する⁴¹。

課題③では異文化接触場面に必要な日本事情をどのようにデザインすべきか、課題①及び課題②を総合的かつ質的に分析し、Graves (2000) が述べているコースデザインの方法を援用し、日本事情教育を具体化する。課題①及び課題②の結果のみでは、異文化接触場面に必要な日本事情教育を概念として捉えることは不十分だと考えられるため、必要な理論及び文献、実践報告等をさらに考慮し、異文化接触場面に必要な日本事情の概念の理論的枠組みを構築する。

4.2 ドキュメント分析

ドキュメント分析を選定した理由は、インドネシアの日本事情教育においては学習要領及び確実な教育の枠組みが存在していないため、日本事情が担当者によって学習内容や方法等が大幅に異なるという仮説を検証するためである。また、日本事情は、日本事情及び日本の社会・文化を専門としていないインドネシア人日本語教師に任せられているのが現状である。この点に関して、日本語教育機関の主な目的は日本語でのコミュニケーション力を養うことだとされているが、日本事情教育は文化的な学習内容に偏重しており、その学習内容がコミュニケーション力の育成をどのように担保しているのかは疑問視されている。そのため、日本事情教育がどのように日本語のコミュニケーション力の育成を担保しているのかという疑問を明らかにすることにより、学習内容が明確化され、日本語のコミュニケーション力育成に寄与するような日本事情教育が示せることが期待される。このような日本事情教育の枠組みを構築する手段として、ドキュメント分析が有効だと考える。

⁴⁰ KH Coder とはアンケートの自由記述・インタビュー記録・新聞記事等のテキスト型（文章型）、様々な社会調査データを統計的に分析するために開発されたソフトウェアである。

⁴¹ 本研究で用いられたアンケートでは、協力者に幾つかの選択を選ばせ、最初の選択には理由を書くことになっている。

4.3 ニーズ分析

4.3.1 ニーズ分析の概念

学習者のニーズ分析とは、学習者が学びたいこと、できるようになりたいことを探り出し、授業に活かすことである（阿濱^{あはま}他 2018）。この定義は学習者からの視点である一方、小池他（2003, p. 107）は「学習者が将来どのような目的や状況で外国語を使うようになるのかを予測し、それをもとにどのような言語能力を伸ばす必要があるのかを分析する」という教師の視点からの定義を提示している。日本事情教育の文脈において、日本事情の事象は個人によって変容する（橋本 1999）。このため、担当教師が自分の文化と言語のアナロジー⁴²を基にした授業を展開し（川上 1999）、学習者の視点を授業に取り入れていかに主体性を引き出すかが日本事情教育の課題（一二三 2006；吉嶺 2018）である。したがって、本研究におけるニーズ分析は、学習者からの視点である阿濱^{あはま}（2015）の定義を使用する。

4.3.2 ニーズ分析のデータ収集

細川（2000）は、担当者が行う教室活動を通して学習者の中にある様々なニーズを引き出すことが可能であると述べている。しかし、こうした方法は非公式であり、一部の学習者のニーズのみが把握されることが多いため、全員のニーズを表すことができるとは言い難い（若林 1999）。そのため、本研究では全員の学習者のニーズを把握するために、公式の方法であるアンケートを用いてニーズ分析に必要なデータを収集する。アンケートの項目は、本論の理論的枠組みをもとに作成する。なお、アンケートで本調査を行う前に予備調査を行うが、その結果は第6章に提示する。

⁴² 川上（1999）は「日本事情を教える」ことは「文化を教える」ことであるアナロジー、日本文化を教えることによって学習者を日本人に同化すべきアナロジー、日本語教師がそれぞれの「想像の日本語」を所有しているため、日本文化に関してもそれぞれの「想像の日本文化」を所有するというアナロジー、という3つのアナロジーを提示している。

4.3.3 データの分析及び方法

データの分析方法はデータの種類により左右されるが、アンケートから収集されたデータは量的なデータになるため、統計的分析を採用する。本調査が用いたアンケートの質問項目は、日本事情に関する事柄を順番に並べる質問が4問、記述式回答の質問が3問である。前者は対象者に価値のある事柄から順に選ばせ、5点から1点までのスコアがついているが、学習者は答えによって5つ以上のオプションを選択することもある。例えば、学習者が解答を3つのみ選択した場合、最初のオプションからスコアは順番に5点、4点、3点となる。一方、6つ（5つ以上）選択した場合、最後の答えは5つ目のオプションと同じスコアをもつ。前者は順序尺度の原理を基に、その質問項目が日本事情学習に関わる事柄のカテゴリーを設定して例を挙げることで、学習者は質問項目にあるカテゴリーを理解する。つまり、順序尺度の原理に基づいた質問項目は、学習内容等で各学習者の価値観を図り、その数値を統計的に分析した結果を基にして「高」「中」「低」と各質問項目の結果をカテゴリー化することができる。この「高」「中」「低」のカテゴリーは、次はニーズレベルと称する。なお、順序尺度の各質問項目は、学習者が最初に選んだ理由を記入する形となっている（添付資料を参照）。

カテゴリー化を行うために、Arikunto (2012)が提案している方法は以下のとおりである。Mean Ideal を (M_i)、Standard Deviation Ideal (S_{di}) とした時、

高 : $X \geq M_i + 1 S_{di}$

中 : $(M_i - 1 S_{di}) \leq X < (M_i + S_{di})$

低 : $X < M_i - 1 S_{di}$

となる。また、 M_i 及び S_{di} の数値は

$M_i = 1/2$ (最高の合計点 + 最低の合計点)

$S_{di} = 1/6$ (最高の合計点 - 最低の合計点)

となる。

アンケートの結果から、「高」のカテゴリーは学習者の視点から最も必要かつ優先すべき項目として解釈することはできるが、授業に活用することが可能かどうかを明らかにするために質的な分析・考察を行う。この課題②の結果は、課題③においてコースデザインで求められる教育を具体化するために必要なデータとなる。

4.4 本研究におけるコースデザイン

コースデザインは、先行研究によって手続き及び手順が異なるところもあるが、ニーズ分析、学習内容の選定、評価デザイン、教育の実践といった手順は共通している。本研究は、Graves（2000）が述べている手続きに基づいて日本事情のデザインを考察する。Gravesはコースデザインについて、ニーズ分析、目的及び目標の設定、学習内容の開発、評価のデザイン、科目の組織化、学習内容のコンセプト化といった手順で行うべきだとしている。しかし、状況によって異なる手順で行うことも可能である。本研究の場合は結果を基にし、異文化接触場面に必要な日本事情の理念を二つの研究課題が解明された後に、コースデザインを行う。その二つの課題は、課題①のドキュメント分析の結果から、求められる日本事情を解明することであり、二つ目は課題②の学習者の視点から求められる日本事情である。つまり、学習者にとって必要な学習内容、学習方法・学習活動、科目数、可能な学習リソースである。したがって、本研究ではコースデザインを行う際に、課題①及び課題②を総合的に分析する。しかし、課題①及び課題②の間には乖離等が存在する可能性があるため、課題③ではコースデザインに求められる項目をさらに分析・考察する必要がある。

第5章

インドネシアの日本語教育における必要な日本事情

本章では、研究課題①についての分析及び考察を概説する。第1節では、インドネシアにおける高等教育のカリキュラムに関する制度を述べた後、日本語教育のカリキュラムの特徴及び日本事情の位置付けを概説する。第2節では調査対象の日本語専攻科の日本事情のシラバスを提示し、学習内容について分析した結果を論ずる。第3節ではインドネシアにおける日本事情の内容と日本国内の日本事情の内容について、その相違点を概説する。第4節はJFL環境で異文化接触場面に必要な日本事情を解明するために、分析・考察の結果を論ずる。第5節は本章のまとめを述べる。

5.1 カリキュラムにおける日本事情の位置づけ

現在に至るまで高等教育の日本語教育に関する統一的なカリキュラムの制度は定められていないが、大学にはそれぞれの教育方針があり、日本語専攻科が通常それに合わせる。しかし、政策レベルでは、KKNI⁴³の制度があり、高等教育は最低限の学習成果⁴⁴を要求される。また、この制度によれば高等教育のカリキュラムは「宗教」「国民の教育権論」「国民統合のイデオロギー(Pancasila)」「インドネシア語」の4つの科目を開講しなければならない(Junaidi et al., 2020)ため、すべての日本語専攻科はこれらの4つの科目を2, 3単位で開講している。

インドネシアに開設されている高等教育機関の日本語専攻科の数について、現在のところ統計上の明確な数字はない。ただし、国際交流基金(2019)⁴⁵によると、高校の日本語教師養成を実施している日本語教育学科は11あるとされている。また、短期大学も含め、日本語教育を実施している大学は50ヶ所以上であると推測するものもある⁴⁶。

⁴³インドネシア国家職業資格制度(Kerangka Kualifikasi Nasional Indonesia)のことであり、高等教育に関しては2012年憲法12号において詳細が定められている。

⁴⁴高等教育の卒業生が身に付けなければならない最低限の姿勢、知識、技能として、KKNIには教育基準が定められている。高等教育機関はそれに沿ってカリキュラム開発を行うことになっている(Junaidi et al., 2020)。

⁴⁵国際交流基金は高校の日本語教師の養成を実施している専攻科(日本語学科)数のみを提示しているため、インドネシアの全国的な日本語専攻科数については不明である。

(<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/indonesia.html> 2021年11月28日閲覧)

⁴⁶岡山県インドネシアビジネスサポートデスクレポート Vol. 88より

本研究はインドネシアの教育文化省の検索サイト⁴⁷を利用し、4年制大学（S1）で日本語教育を実施している日本語専攻科を検索し、ホームページのカリキュラムをもとに、各大学日本語専攻科が日本事情を開設しているかどうかについて表 5.1 にまとめた⁴⁸。

表 5.1 日本語専攻科名における日本事情⁴⁹

教育機関名	日本語専攻科名	日本事情の開講	単位数	シラバス・カリキュラムのリンク
(1) インドネシア教育大学	日本語教育学科	1年後期	2	http://jepang.upi.edu/wp-content/uploads/2021/09/MODULE-NIHONJIJO.pdf
(2) ウダヤナ大学	日本文学学科	2年前期	2	https://drive.google.com/drive/u/0/folders/1YAONU6FTnA0BDHIEfR6vIsPx0CW5FCC
(3) ハサヌディン大学	日本文学学科	1年後期 2年前期	4	https://docs.google.com/document/d/1pyGxkp9mLddsrhKnsAZOzPjnIbqd9NO/edit https://japan.unhas.ac.id/media/lessonplan-40292aa1-03e3-4a8b-b1e2-7bb7768cdf43.pdf
(4) ガジャマダ大学	日本文学学科	2年後期	4	https://sastrajepang.fib.ugm.ac.id/mata-kuliah/
(5) アイルランガ大学	日本文学学科	2年後期	2	http://sasjep.fib.unair.ac.id/2017/06/08/bagan-kurikulum/
(6) インドネシアコンピューター大学	日本文学学科	1年後期	2	https://www.unikom.ac.id/kurikulum
(7) パジャジャラン大学	日本文学学科	1年後期	3	http://jepang.fib.unpad.ac.id/kurikulum/
(8) ムハマディア・ハムカ大学	日本語教育学科	1年後期	2	https://fkip.uhamka.ac.id/pendidikan-bahasa-jepang/

(https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/653948_5668303_misc.pdf 2021年11月30日閲覧)

⁴⁷ インドネシアの教育文化省の公式的な検索サイト (<https://pddikti.kemdikbud.go.id>) であり、高等教育機関名、学科名、教師名等の検索が可能である。日本語専攻科名を検索する際には「Jepang (日本)」「Pendidikan Bahasa Jepang (日本語教育)」「Sastra Jepang (日本文学)」「Budaya Jepang (日本文化)」「Studi Jepang (日本研究)」のキーワードで検索した。(検索は2021年11月28日)

⁴⁸ 検索の結果は合計 34 の日本語専攻科だったが、カリキュラムをホームページで公開していない日本語専攻科が多いため、本論文で提示するのはカリキュラムをホームページで確認できる日本語専攻科のみである。カリキュラムにはインドネシア語及び英語で記載されているため、日本事情はインドネシア語で「Nihonjijo」「Kejepangan」または英語で「Japanology」と記載されることもあった。また、(1)(2)(3)の日本語専攻科は日本事情のシラバスを公開している。(6)(9)はシラバスを公開していないが、科目担当者より本論文でシラバスを利用する許可を得たため、(1)(2)(3)(6)(9)のシラバスを本章の分析対象とする。

⁴⁹ (1)(2)(3)はシラバスがホームページで確認できるため、日本事情のシラバスのリンクであるが、その他のリンクはカリキュラムの公開にとどまる。

(9) バンドン外国語 大学	日本文学学科	1 年前期	2	http://nihongo.stba1.id/index.php/kurikulum/
(10) アンダラス大 学	日本文学学科	2 年後期	2	http://sastrajepang.fib.unand.ac.id/kurikulum_2018/
(11) ブラウィジャ ヤ大学	日本文学学科	1 年後期	2	http://sastrajepang.fib.ub.ac.id/?page_id=3443&lang=en
	日本語教育学科	無	無	http://pendidikanjepang.fib.ub.ac.id/?page_id=357
(12) ディポネゴロ 大学	日本語文化学 科	無	無	http://s1bkj.fib.undip.ac.id/en/kurikulum/
(13) インドネシア 大学	日本文学学科	無	無	https://fib.ui.ac.id/akademik/program-sarjana-s1/program-studi-jepang/sebaran-mata-kuliah/
(14) ジャカルタ 国立大学	日本語教育学科	無	無	https://fbs.unj.ac.id/?page_id=141

表 5.1 に示すように、15 の日本語専攻科のうち（ブラウィジャヤ大学は二つの専攻科を開設している）、11 の日本語専攻科は日本事情を開講していることから、日本語教育において、各大学日本語専攻科では日本事情の開講が必要であると捉えていることが分かる。卒業するためには、それぞれの大学によって取得しなければならない単位数は異なるが、4 年制大学日本語専攻科を卒業するためには最低 146 単位必要である。多くの日本語専攻科は日本事情が必修科目として設定されているため、最低限の 146 単位のうち日本事情 2 単位を取得しなければならない。

日本事情の開講時期に関しては、学習者の日本語能力が初中級レベルである 1 年生の時期に開講されていることが多い。そこから、日本事情は初級の学習者に適当だと判断されている傾向がうかがえる。当然、これに関しては「日本事情」とは何かという捉え方にも関わっている。カリキュラムにおける日本事情の設置は各日本語専攻のカリキュラム開発のチーム⁵⁰により決定されたが、科目の内容までは枠組みは設けられていない。

第 1 章で述べたように、日本事情は国際交流基金にも指針がなく、自由度も高いため、教師の主観や教育観等に大きく影響される。そのため、担当教師によって内容が異なってくる。しかし、本節で述べたように、インドネシアの 4 年制大学日本語専攻科におけ

⁵⁰政府が決まった制度により 4、5 年ごとに日本語専攻科といった大学で教育を実施している学科はカリキュラムを検討しなければならない(Junaidi et al., 2020)。日本語専攻科の場合は専攻科の日本語教師がチームを形成し、全体的な学習成果を評価したり有識者との相談等を行うことにより、カリキュラムを評価する。この活動はカリキュラムの改善や改革のきっかけとなることもある。

る日本事情は日本語能力が初中級レベルの学習者を対象とし、2 単位程度の必修科目として位置づけられていることが分かった。また、(12) ブラウイジャヤ大学は「日本文学学科」と「日本語教育学科」という二つの日本語専攻科を開設しており、日本文学学科では日本事情が設置されているが、日本語教育学科では設置されていない。これはこの教育機関のケースのみであり、全体的には日本事情を開設するか否かについて、「日本文学学科」や「日本語教育学科」のような専門領域による差は見られない。

5.2 シラバスから見たインドネシアの日本事情

本節では、インドネシアの4年制大学日本語専攻科に設置された日本事情について、その授業の目的・目標、扱われるテーマ、学習活動、教材及び評価の点から分析を行う。前節で述べたように、多くの日本語専攻科は日本語能力が初中級レベルの学習者のために日本事情を設置しており、単位数も多くの場合には二つである。その中で唯一、ハサヌディン大学は日本事情を二つ設けており、他大学と異なる対応が見られる。各日本語専攻科の日本事情の学習内容は以下の表 5.2 のとおりである。

5.2 インドネシアにおける日本語専攻科の日本事情学習

週	インドネシア教育大学 (ア)	バンドン外国語大学 (イ)	インドネシアコンピューター大学 (ウ)	ウダヤナ大学 (エ)	ハサヌディン大学	
					I (オ1)	II (オ2)
1	イントロダクション	日本史	日本の地理	日本の自然、日本の島々、日本の天候	イントロダクション	イントロダクション
2	地理、自然、天候、都道府県、山河	時代の区分及びその所産	日本史	都道府県、各州の特徴	日本という国の歴史や展開、哲学的な国是の紹介	日本史と日本文化の基礎 (I)
3	食、日本料理	日本の漢字の歴史、日常における漢字の使用	住宅及び日本人の習慣	日本における信徒、仏教、クリスチャンの歴史	地理、文化、日本社会の習慣、	日本史と日本文化の基礎 (II)
4	衣服	日本の地理及び天候	交通及び電気通信	1月から6月の祭りまたその特徴	鎖国の歴史、侍、日本社会	日本社会におけるアニメ、J-Pop(I)
5	住宅	日本の政治	食生活及び民族服	7月から12月の祭りまたその特徴	物作りの特徴、生産のグローバル化	日本社会におけるアニメ、J-Pop(II)
6	祭り、伝統	温泉、旅館、お風呂	日本語及び日常的な言い回し	衣類、季節による衣類への影響、世界のファ	ソフトパワーとしての J-Pop	文化の反映としての映画 (I)

				ッションにおける日本	とグローバル化	
7	教育	葬式、柔道、パチンコ	日本の教育	日本社会の食様式、伝統的な飲食類、飲食店	日本社会の生活様式	文化の反映としての映画 (II)
8	中間試験					
9	スポーツ	日本社会の伝統：お正月、お盆	政治	住宅類、住宅の中、住宅を借りるシステム	日本の教育	モラル、教育のシステムから日本社会の礼儀 (I)
10	政府	日本社会の伝統：ひな祭り、鯉のぼり、	経済、産業、技術及び作物	公共交通機関	パンデミックの状況における日本	モラル、教育のシステムから日本社会の礼儀 (II)
11	経済	日本社会の伝統：七夕、節分	楽器及び伝統文化	伝統スポーツ：相撲、柔道、空手、剣道、弓道、	日本舞踊	帝国の日本と政治のシステム (I)
12	産業	日本社会の伝統：七五三、成人式	スポーツ	モダンスポーツ：サッカー、野球	労働論理	帝国の日本と政治のシステム (II)
13	交通機関	日本社会の伝統：歌舞伎、能	日本文学	カラオケ、パチンコの歴史と展開	日本の特徴	日本のモノ作り (I)
14	公害と環境	食文化	宗教と信仰	生花、茶道、書道歴史と展開	日本の政治と経済のシステム	日本のモノ作り (II)
15	宗教・信仰	日本社会における芸とインドネシアとの相違	生活様式	映画、ドラマ歴史と展開	日本社会の思考様	日本とインドネシアの異文化の紹介
16	期末試験					
教材	(ア)：『たのしく読める日本の暮らし12か月』『日本生活事情』『現代日本事情』『Kamus Istilah Masyarakat dan Kebudayaan Jepang』『日本事情入門』 (イ)：『たのしく読める日本の暮らし12か月』『日本文化の見つけ方』ビデオ、文化に関する記事等 (ウ)：『All about Japan』 (エ)：『日本事情入門』『楽しく読める日本の暮らし12ヶ月』『Foklor Jepang : dilihat dari kacamata orang Indonesia』 (オ1)：『日本事情入門』『pictorial encyclopedia of Japanese life and events』『pictorial encyclopedia of Japanese culture』 (オ2)：『日本事情入門』『pictorial encyclopedia of Japanese life and events』『pictorial encyclopedia of Japanese culture』					
授業方法	(ア)：講義、ディスカッション、セミナー、オンライン学習 (イ)：講義、テキストから学習、ディスカッション、発表と質疑応答 (ウ)：講義、ディスカッション、発表と質疑応答 (エ)：講義、ビデオ視聴、小グループのディスカッション、課題、発表と質疑応答 (オ1)：講義、ディスカッション (オ2)：ディスカッション、動画視聴、					

日本事情の目的・目標に関して、これらのシラバスでは、インドネシア語での「mampu / dapat memahami ~ (〇〇を理解する)」といった記述が目立っている。そして、理解する対象は「日本文化」「日本社会」「日本の伝統」「日本の天候」等といっ

た学習内容を指すことが大きな共通点となっている。しかし、インドネシア教育大学のシラバスは他とは異なり、シラバスは英語で記載されており、目的の記述はないが、その代わりに「learning outcomes（学習成果）」が記載されている。

授業時間は、1単位 45～50 分で、2 単位の場合 1 コマは 90 分～100 分程度であり、中間試験や期末試験を含め、16 回の授業で科目が行われる。単位数及び授業時間には大きな差異は見られないが、ハサヌディン大学は日本事情を二つ設けており、二つとも一人の日本語教師が担当している。日本事情の開講時期に関してはバンドン外国語大学が1年前期、インドネシア教育大学とインドネシアコンピューター大学、ハサヌディン大学（日本事情 I）は1年後期に開講している。2年前期に行うのはハサヌディン大学（日本事情 II）のみであり、2年後期に開講するのはウダヤナ大学のみとなる（開講時期に関しては表 5.1 を参照のこと）。

利用される教材に関して、各日本語専攻科はそれぞれの教材を利用しているが、アブリコットが1992年に出版した『たのしく読める日本の暮らし12か月』はインドネシア教育大学、バンドン外国語大学、ウダヤナ大学で用いられている。『たのしく読める日本の暮らし12か月』の他に、アルクが1995年に出版した『日本事情入門』であり、インドネシア教育大学、ウダヤナ大学とハサヌディン大学で利用されている。出版された時期から教材を比較すると、ハサヌディン大学で利用されている『Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture』⁵¹は1987年に出版されており、他のテキストと比較した結果、最も古いテキストである。最新のテキストはインドネシアコンピューター大学の『All About Japan』であり、担当者が日本での生活した経験を基に執筆し、Andi Offsetにより2013年に出版された。

⁵¹ 利用されているテキストに関して、担当教師が作成したシラバスに表出したのはテキストの題名のみであるため、執筆者、出版年、出版社等の情報が不揃いである。このテキストは日本国内からのテキストを指すなら、Gakken,Sにより執筆され、おそらく1987年にJapan Pubnsが出版した『Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture : The Soul and Heritage of Japan』のことであろう（表 5.1 に記載されているテキストの題名は全て各担当者が作成したシラバスと同様）。ウダヤナ大学に利用されているテキストに関しても、『Foklor Jepang : dilihat dari kacamata orang Indonesia』ではなく、おそらくDanandjajaにより執筆され、Pustaka Utama Grafitiが1997年に出版した『Foklor Jepang : dilihat dari kacamata Indonesia』であろう。

各シラバスに記述されている「日本事情」の学習活動は、教師による講義及びディスカッションが主であり、他の学習活動と組み合わせて行われている。このような傾向は、ほとんどの大学の「日本事情」に共通している。ウダヤナ大学のように学習内容について知識情報伝達、ディスカッション、課題の遂行といったパターンを繰り返し、毎回授業の展開が行われるのが殆どである。また、中間試験及び期末試験を行う点も各大学の日本事情に共通する。しかし、それぞれの評価方法をシラバスから確認すると、ウダヤナ大学では学習者にテーマについてレポートを作成させて発表させ、教師はそのレポート及び発表に対する評価を行うために、ルーブリック評価を用いている。バンドン外国語大学も筆記試験ではない評価方法として発表及び質疑応答を行なっているが、評価方法については記載がない。インドネシアコンピューター大学の場合、発表と質疑応答は行われるが、この活動は評価との関連性が記載されていない。

日本事情の学習内容に関しては、表 5.2 から分かるように、それぞれの大学が学習内容を独自に設定した結果、各シラバスでは非常に多様な内容を扱っている。イントロダクションと中間試験及び期末試験を除き、国際交流基金（2010）が提示した日本事情のカテゴリーで全てのシラバスに記載されている学習内容を分類すると、政治、経済、歴史、教育、宗教等に関わる「社会・人文科学」の学習内容は 27.88%である。茶道、花道、伝統芸能、柔道等に関わる「伝統・芸能」の学習内容は 19.68%であり、衣食住、仕事等に関わる「生活」の学習内容は 11.48%である。他のカテゴリーは 5%に達していないことがわかった。シラバスからは担当教師がそのように様々な学習テーマを選定する背景や理由は不明だが、様々なテーマに関する知識や情報を獲得することが担当教師の日本事情の理念であろう。

5.3 シラバスにおける日本事情の課題

前節では、シラバスに記載された日本事情科目の内容について分析を行った。それをもとに、本節では日本事情科目の課題について分析を行う。日本国内とインドネシア国内の学習環境の相違は日本事情の学習内容への影響を与えることが大きい。日本国内の場合、日常的に用いられる言語は日本語のため、日本人学生と多国籍留学生が様々なテーマについてディスカッションをするというようなインタラクティブな学習活動が多く

行われるだけでなく、学習者が住む地域の文化にも目を向けることができる。例えば島崎 (2016) や二谷 (2017) のように、地域の祭りに参加する体験を取り入れた日本事情授業は、学習者を自分の周りの文化に触れさせ、体験から異文化に関する様々な気づきを促そうとする。このように日本国内で実施する日本事情科目の場合、日本語や日本文化に触れる機会が豊富にあるため、異文化理解教育や異文化コミュニケーション教育の要素が濃い傾向が見られる。前節で述べたように、インドネシア教育大学やバンドン外国語大学では、日本事情以外に異文化理解あるいは異文化コミュニケーションという科目名の授業を開講している。そのため、異文化理解あるいは異文化コミュニケーションの教育の概念が日本事情教育の理念となっているのではなく、それぞれの科目の概念として捉えられている。さらに、インドネシア人日本語教師の日本事情教育観が「所産・知識としての文化」(佐々木 2002) 学習であることから、日本事情の主な目的は日本に関わる様々な知識を獲得するということになる。

次に、使用されているテキストに関しては、『日本事情入門』『たのしく読める日本のくらし 12 か月』『Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture : The Soul and Heritage of Japan』のように、20 年前に出版されたテキストが多く用いられていることがわかった。また、学習内容の選定の割合が最も高い「社会・人文科学」に関して、歴史に関わる情報・知識は今でもあまり変わらないであろうが、政治、経済、教育等の事情は変わりつつある点を考慮しなければならない。古いテキストが以前用いられる理由は様々であるが、日本事情の教材不足は解決すべき課題と高寄・都 (2016) に指摘された。実際、新しい教材を入手するための努力は行われているようである。例えば、最新のテキストを入手するには費用はかかるが、インターネットを通して購入することも可能である。また、日本国内の会社でのインターンシップや日本の大学と協定を結んでいる日本語専攻科も少なくない。そのため、10 年前よりも来日する機会が多くなったため、来日している学生を通して日本語テキストを注文したりする方法もある。したがって、教材の古さや教材不足という課題を解決することは不可能ではない。しかし、日本事情テキストに関してより注目すべきなのは、テキストにはそれぞれの視点があり、用いられるテキストによっては日本に対するイメージも変容してくることである(京 2001)。また、研究背景で述べたように、多くの日本事情のテキストは東京や大阪といった大都市を中心に

しているため、現実の日本での生活を表せていない側面もある（澤田 2001；膽吹 2013）と指摘されている。テキストの使用は必要であるが、久保田（2008）が指摘しているように、日本事情を学習者が批判的に考え、それを学び、理解するという文化学習の理念をもとに、科目を展開する必要がある。

5.4 考察

本節では日本事情を担当するインドネシア人日本語教師が展開する科目についてシラバスの分析・考察を行う。日本国内とインドネシアの違いについては、まず、学習環境の相違がある。日本国内の日本事情科目では、日本人学生と留学生の合同授業を行うことは決して珍しくない。しかし、学習環境や学習対象の点で日本国内と大きく異なるインドネシアでは、日本国内と同じような日本人学生とインドネシア人学生の合同授業は全く現実的ではない。次に、日本事情の変化に関して、日本国内とインドネシアでは大きく異なる。60年代から現在に至るまで、日本国内の場合は様々な日本事情の開発が行われることにより、様々な変遷が見られたため、変動的だと言える。しかし、インドネシアでは実践の報告や研究が少数のため、日本事情の変遷を見ることが非常に困難である。

インドネシアの4年制大学日本語専攻科における日本事情の共通する現状として、日本事情シラバスの目的に記述された「〇〇を理解する」といった知識獲得の重視である。日本国内の場合だと、学習内容が経済や政治といった日本語教育以外の分野に関わる場合、日本事情は日本語教師以外の教授者により担当されることもあり（宮城 1993）、各専門家との共同検討が必要であるとの指摘もある（西井 2002）。しかし、インドネシアでは、シラバスでの「〇〇を理解する」、ここでの理解する対象が経済や政治等の日本語教育外の分野に関わる場合、担当者がその分野の専門家ではない日本語教師であるため、2単位で100分程度の一回の授業で、どういった理解をどの程度を達成できるのかという点に疑義を有する。この点を考慮すると、JFL環境の日本語教育における日本事情教育の理念を捉え直す必要がある。

日本語専攻科の目的は日本語能力を習得することだとすれば、習得するプロセス及び日本語でのコミュニケーションに関わる日本事情の学習内容をより優先すべきであろう。

つまり、日本とインドネシアの文化的な違いを考慮すると、日本事情を異文化接触に必要なものとして科目の理念の中に選定することが必要となる。こういった日本事情を展開することにより、経済、政治、教育等の言語や文化以外の様々な分野に関わる日本事情の学習内容は特に必要ではなくなる。特に担当者が経済、政治等の専門家ではない日本語教師の場合、担当の負担が減ることにもつながる。また、異文化接触場面に必要なものを身に付けることが日本事情の理念となるとすれば、教師自身が現在まで経験してきた日本人との異文化接触の体験をある程度授業に活かせる可能性がある。

インドネシアの日本語専攻科において、異文化接触場面に必要な日本事情を展開するのであれば、松島（2004）が指摘したように、異文化理解及び異文化コミュニケーション教育の理念に支えられる日本事情となるため、中上級レベルの学習者を対象とする方が適切である。JFL 学習環境であることを考慮すると、宮崎（2000）が述べたように、学習者の学習環境に住む日本人とのネットワークの形成及び現地の日系企業のリストやその情報も日本事情の領域に入っている。また、日本語専攻科の卒業生はインドネシアで日本語を用いる日系企業、観光業等での勤務に就くのが殆どであるため、日本国内の日本事情よりも、インドネシアにある日本事情の方が学習者に身近である。

5.5 まとめ

インドネシアの日本語専攻科における日本事情は、次の2点を特徴としていると言える。一つは、ほとんどの日本事情は学習者に日本に関する様々な事柄を教えることを目的とする「所産・知識としての文化」に重点をおいた教育観のもとにある。もう一つは、ほとんどの日本事情は初中級レベルの学習者向けに設計されていることである。その一方で、日本事情は非常に自由度が高いため、学習内容であっても科目の位置づけであっても、比較的自由によりよいものに変えることができるのではないかと考える。そこで、以上の点に関して改善策を二つ提案する。一つ目は担当教師の主観や教育観にも関わることだが、現在のように日本事情を継続させる場合、まず学習内容を選定する背景及び理由と日本語専攻学習者の日本語習得プロセスとの繋がりを担当教師が明らかにする必要がある。本研究は第三者の視点でシラバスの内容を検討したが、学習内容選定の背景及び理由にせよ、日本語習得プロセスとの関連性にせよ、いずれも明確ではなかった。二

つ目は日本事情教育の理念を捉え直すことである。日本事情を担当する教師は日本語教師であるため、日本語や日本語教育に関わる分野は言わば担当教師の専門である。そのため、日本事情を担当するとすれば、教師自身の専門に近い学習内容を検討し、さらに学習者の日本事情のニーズを把握し、科目にニーズを取り入れて展開することが望ましい。そうすると、教師が身につけた日本語や日本語教育に関わる知見がより活かせ、教師の視点からだけでなく、学習者の視点から望ましい日本事情の展開の可能性が高まる。

二つ目の解決策に関して、宮崎（2000）が述べたように、JFL環境に住んでいる日本人のネットワーク形成や日系企業等の情報もJFL環境における日本事情のため、授業を展開する上で重要な部分となる可能性がある。現在のインドネシアの日本事情科目は、教師がJFL学習環境にある日本事情であるということを科目のシラバスに取り入れず、日本国内の学習環境で実施する日本事情に参照点を求めているように考えられる。日本事情科目を受講した日本語専攻科の学生が、卒業後インドネシアの日系企業や日本人学校等の日本の機関に勤務し、日本人と日常的に接触するという点を踏まえる必要がある。こうした日系企業や日本の機関は、異文化理解を目的とする日本事情科目を開発する上で非常に重要な学習リソースとなる可能性がある。

第6章

インドネシア人日本語学習者の日本事情ニーズ

本章は前章で述べた第二の解決策を踏まえ、学習者が求める日本事情の学習ニーズを量的な分析方法で解明する。まず第1節では、日本事情における学習者のニーズの位置付けについて概説する。第2節では、学習者が求める日本事情についての予備調査の結果を報告する。第3節では、本調査及び調査協力の機関と学習者の概要を述べ、第4節ではアンケート調査の結果を基にインドネシア人学習者が求める日本事情の学習内容を報告する。第5節では、アンケート調査の結果を基に、学習者が求める学習活動について分析する。第6節では、アンケート調査の結果を基に、学習者が求める日本事情の科目数を分析する。第7節では、アンケート調査の結果を基に学習者が日本事情に関する情報を獲得する手段について述べる。第8節では考察を行い、最後に第9節で本章のまとめを述べる。

6.1 日本事情における学習者のニーズの位置づけ

日本事情教育において、学習者のニーズを把握する重要性はこれまでも議論されてきた。札野（1993）は、学習者のニーズを検討していない科目は学習に学習者の関心を引くことができず、学習者が積極的に学習活動に参加しようとしなかったと述べ、ニーズと学習態度の相関関係を明らかにしている。そのため、領域が非常に広い日本事情の学習内容を選定する際は、教師のみならず学習者の視点も大切である。長谷川（1996）は、教師の視点にのみ基づき学習内容を選定すると、学習者が本当に学習したいことが学習できない状況で、学習活動が終わってしまう可能性があるとしている。小川（1996）は、二つの対極する日本事情の進め方を紹介している。一つは学習者のニーズに合わせ、学習者自身が教材やテーマを選択する進め方である学習者主体型の授業である。もう一つは、日本人による「文化の認識」という概念をベースに、日本人並みに日本文化を理解することが正しいという前提を持つ日本事情の教育方法論である。このうち前者は、学習者主体の授業を展開するために学習者ニーズを把握することが極めて重要なことであるとされる（徳井 1996b）。

日本事情教育において学習者主体の授業が最も望ましいというのは、文化に客観的実体がなく、個人によって文化の事象⁵²に対する認識が異なる（小川 1996）ためである。その観点からは、日本事情は教えられるというより学習者によって発見されるものであり、物の見方を学ぶ場となっているのである（伊藤 1998）。したがって、文化教育においての主役は学習者自身であり、教師の役割はその文化を発見するプロセスを支援するファシリテーターの役割を担わなければならない。

学習者が文化教育における主役であれば、前節で述べたように、学習者のニーズを把握することは欠かせないことである。また、学習者のニーズを把握するための方法は様々であるが、細川（2000）は学習者のニーズを把握する方法の一つとして、担当者が教室活動を通して、学習者の中にある様々なニーズを引き出す方法を提案している。しかし、学習者のニーズをこのように把握する方法は非公式のものであるため、一部の学習者のニーズのみが把握されることが多く、全員のニーズを表しているとは言い難い（若林 1999）。そのため、学習者全員のニーズを把握するには、アンケートや面接といった方法をとることが望ましい。しかし、学習者のニーズは非常に多様だと考えられ、日本事情が全てのニーズに応えることは不可能である。そのため、先ずは小川（2013）が述べたように、学習者が最も議論したい内容を把握し、関心のあるテーマを取り上げ、教師と学習者、及び学習者同士の協働により、知的好奇心を刺激し活発な授業を展開する科目を目指すことが必要である。つまり、学習者のニーズ分析を行った上で、最も高いニーズを学習内容として選定することにより、学習者主体の授業となり、より活発な授業開発も期待できるのである。

6.2 本調査に繋がる予備調査

日本事情教育に学習者のニーズ分析が必要なのは、橋本（1999）が述べたように、教師はもとより、学習者も日本事情に対する事象⁵³を持っているためである。しかし、担当教師は自分の文化のアナロジーを基にして日本事情を展開している（川上 1999）

⁵² 小川（1996）は文化が曖昧のため、客観的な実体が存在しないとしている。そのため、文化に関わる現象は見る視点によって、事象（表に現れる現象）に対する認識は視点によって異なる。

⁵³ ここでは事象が日本事情に対する認識を指す。

ため、現在のように学習者のニーズ分析は行われていない（若林 1999）。したがって、学習者個人も日本事情の事象を深めることなく、教師が持つ日本事情の事象に影響を受けてしまう恐れがある。また、これまでの先行研究を検討した結果、担当教師は学習者のニーズ調査を行っていないため、学習者が望む日本事情と教師が展開する日本事情の科目において、求められる学習内容に関するギャップが生じている可能性がある。

日本事情教育において、学習者のニーズを把握する必要性は多くの先行研究で主張されている（細川 2000；宮本・松岡 1999；水田 1998；佐藤 1998；徳井 1996；小川 1996；岡崎 1999；長谷川 1996；札野 1993；戸田 1992）。しかし、授業のすべてを学習者が望むとおりに行わなければならないという意味ではない。例を挙げると、若林（1999）はオーストラリア人日本語学習者の学習ニーズを分析し、学習者は漢字学習及び宿題に反対していることを明らかにしている。しかし、日本語学習において漢字学習及び宿題は必要であり、学習者のモチベーションにも関わる。そのため、教師と学習者が共に考え話し合い、楽しめる漢字学習及び宿題はどのようなものなのかを探り、解決策を考える必要性が出てくる場合もある。したがって、ニーズ分析は科目の内容及び方向性を検討するために大切なインプットである。

若林（1999）が指摘したように、授業中に観察してニーズを引き出すといった非公式的な方法では、学習者全員のニーズを把握することは不可能であるため、本研究では公式的な方法であるアンケートを用いることで、ニーズ分析に必要なデータを学習者から収集することとする。アンケートでデータを収集するのは経済的にも時間的にもコストが低く、且つ大人数からのデータを収集することが可能であるという利点がある（Mathers et al., 2008）。ニーズ分析のためにデータを収集する場合、Likert スケールといった評定尺度を使用することが通常である。しかし、こういった評定尺度は、たとえば一つのカテゴリーの文化を複数の選択肢に分けて問う場合、対象者が一つ以上の選択肢に同じ数値を選択する可能性があるというデメリットもある。特に選択肢が複数ある一つのカテゴリーの中で、各人が最も重要・最優先すべき項目は何かを判断することは

難しい。そのため本研究では、順位も原理とする比例尺度⁵⁴の仕組みを基に、ニーズ分析のためにアンケート項目を整理した。例えば、国際交流基金（2010）で日本事情の学習内容として提示された「対人関係」、「生活」、「社会システム」、「習慣・慣習」、「伝統・芸能など」、「社会・人文科学」「自然環境」等の項目について、学習者が最も必要だと思う順に項目を並べるよう指示する。そうすると、日本事情の学習内容の中で、学習者が最も必要だと思う項目から順に並ぶこととなる。また、学習者が最初の順位から最後の順位まで5点から1点のスコアがついているため、量的なデータとして扱える。

また、アンケートで対象者から主観的な情報を収集するため、日本事情学習のニーズ、学習活動のニーズ、日本事情の科目数に関するニーズ、日本事情のリソースといった4つの質問項目を設定した。日本事情学習のニーズは、前述した国際交流基金（2010）の日本事情のカテゴリーを基に作成するのみならず、従来と異なる日本事情教育の枠組みを構築するために、現在まで取り入れていない学習項目についての質問項目も設けた。この質問項目の選択肢としては、「コミュニケーションスタイル」、「マナー」、「対人関係の構築」、「専門的項目」、「日本での生活」、「その他」を設定した。学習活動の項目には教師による「講義型の授業」、学習者による「発表・質疑応答」、「マルチメディアの活用」、「レポートの作成」、「その他」といった4つの選択肢を設けた。未体験の学習活動としては、「日本人の招待」⁵⁵、「日系企業等への訪問」⁵⁶、「交流

⁵⁴ 統計学では名義尺度、順序尺度、間隔尺度、比例尺度という4つ変数の尺度のうち、比率尺度は変数のカテゴリー化及び順位を表し、全ての演算（+・-・×・÷）が行える（栗原 2015）。本研究では「高」「中」「底」というニーズレベルというカテゴリー化を行うために全ての演算が必要であり、各選択肢の合計点も対象者が順に書いた答えに合わせることで得られたため、比率尺度が最も適切だとした。

⁵⁵ 「日本人の招待」とは、日本人を教室に招待して、日本事情に関わる事柄について学習者と話し合うことを指す。国際交流基金（2010）は、こういった学習方法は日本事情を理解するために有効だとしている。しかし、日本人を招待することが難しい場合、担当教師以外にも、日本に長期的に滞在した経験がある人、あるいは日本に関わる事柄に関する知識を持っている人も招待の対象になると考えられる。

⁵⁶ 「日系企業等への訪問」とは、日系企業や日本人学校等の日本文化的なルールや雰囲気等をある程度設定している場所を指す。こういった場所は、現地の文化と同化したところがあるかもしれないことから、完全に日本文化的な雰囲気等が味わえる場所だとは言えない。しかし、インドネシアの文化と日本の文化が同化したところでもあるため、こういった場所を観察することにより異文化感受性を育成することにもつながる。

57)、「その他」といった選択肢を設けた。最後に、科目数に関するニーズは、「1科目」、「2科目」、「3~4科目」、「5~6科目」、「7~8科目」という選択肢を設定した。

予備調査は、西ジャワ州にあるインドネシアコンピューター大学の日本語学科で2019年2月26日から3月5日まで行い、1年生から4年生までの計108名の日本語学習者を対象者とした。調査の結果、学習内容のカテゴリーでは「対人関係」、「コミュニケーションスタイル」、「マナー」といった学習項目のカテゴリーに対するニーズが高く、学習活動・メディア活用のカテゴリーでは「マルチメディアの活用」、教師による「講義型の授業」、「日本人の招待」が高かった。科目数に関しては、二つ必要であるというニーズがもっとも高かった。これらの予備調査の結果から、学習者が望んでいる学習内容、学習方法及び科目数の間には、学習者と教師の間にギャップが存在することが示唆された。

このように、現在まではインドネシア人日本語教師が展開してきた日本事情と学習者が求める日本事情の授業との間にギャップが存在した状況で、日本事情教育が行われてきたと言える。この結果を考察した上で、より確実なニーズ分析の結果に至るためには、対象者数を増やすこととアンケートの質問項目を改善することが本調査を行う前に必要である。また、対象者数に関して、予備調査で対象となった日本語専攻科は一つのみであり、対象者数も100名程度であったため、本調査では日本語専攻科の数を4つとし、さらに300名程度に調査対象者を拡充する。アンケート項目の改善に関しては、予備調査のアンケートでは日本事情を受講した学習者とまだ受講していない学習者が持つ日本や日本人、日本社会に対するイメージを比較するために、そのイメージを問う質問項目を設けた（巻末資料のアンケートの予備調査用の質問 VI を参照）。しかし、結果としては「日本人は真面目」、「日本人は時間を守る」等といった肯定的なコメントが日本事情の受講の有無を問わず目立っている。つまり、日本人や日本に対するイメージは、日本事情の受講とは無関係だと言える。そのため、本調査用のアンケート項目では

⁵⁷「交流」は日本人との交流あるいは日本や日本文化に興味を持つコミュニティと日本事情に関わる事柄について話し合う交流活動のことを指す。

予備調査用のアンケートにおける質問 VI を削除し、教室外における日本事情と接触するリソースについての質問項目を設けた（アンケートの予備調査用の質問 VI、VII、VIII を参照）。この質問項目を設定した理由は、学習者が教室外でどういった日本事情に関するリソースと接触しているかを把握することにより、日本事情学習をより促す方法を調べるためである。このように、予備調査の結果を分析することにより、本調査用のアンケートを改善し、対象者数（教育機関と学習者）を増やした。結果に関しては予備調査の対象者数は 108 名であったため、量的な側面からはある程度の人数を確保できていると判断し、対象者数を増やしたとしても、妥当性が示されると推測した。この推測は本調査で検証する。

6.3 本調査の概要

6.3.1 協力教育機関

本調査は二つ目の課題「現在のインドネシア人日本語学習者の日本事情学習のニーズは何か」を解明することを目的とし、2020年3月中旬から4月にかけて、インドネシアの高等教育機関レベルの日本語専攻科に在籍しているインドネシア人日本語学習者を対象にアンケート調査を行った。アンケートは当初、紙媒体のアンケート用紙を配布し対面で調査を行う予定であったが、調査時ちょうど感染拡大し始めた新型コロナウイルス感染症の防止対策のために、調査対象であった4つの大学ではキャンパスでの授業が休講となり、オンライン授業の実施を決定した。その影響で、対面で行う紙媒体を用いたアンケート調査は不可能となり、急遽オンラインアンケートに切り替えることとした。そこで、複数あるオンラインアンケートサイトの中から、インドネシア語での質問記述に便利という点で、語彙入力にエンターや太字、斜体、下線等の機能が付いている Survey Planet を採用することにした。このオンラインアンケートの調査に協力してくれた日本語学習者数及び高等教育機関名は、以下の表 6.1 のとおりである。

表 6.1 対象の高等教育機関名と対象者数

高等教育機関名	日本語専攻科名	調査対象者数
YAPARI-ABA バンドン外国語大学	日本語学科	89 名
セマラン国立大学	日本語教育学科	76 名
インドネシア教育大学	日本語教育学科	42 名
INVADA 外国語大学	日本語学科	15 名
合計		222 名

表 6.1 は、本研究のニーズ分析を行うための対象者数であるが、実際、各大学の全体的な日本語学習者とは大幅に異なる。表 6.1 によると、INVADA 外国語大学の協力数が最少である。アンケート方法に関して、オンラインアンケートの調査は、対象者がスマートフォン等の様々な端末を用いて答えを入力することが可能であるため、アンケートの対象者を得やすいという強みがある。しかし、各大学のインドネシア人日本語教師の協力を得て、教室内で学習者に協力してもらう方が信頼性はより高いと考えられる。今回はオンラインアンケートで調査を行ったため、目標の 300 名には達していないが、本調査に協力してくれた学生が在籍する日本語専攻科は規模が大きいところから小さいところまであり、また学生もすべての学年を含んでいることから、偏りのない全面的な調査が行えたと言える。

6.3.2 調査対象者の概要

対象者は学部の 1 年生から 4 年生までの全学年を含んでおり、割合は以下の図 6.1 のとおりである。

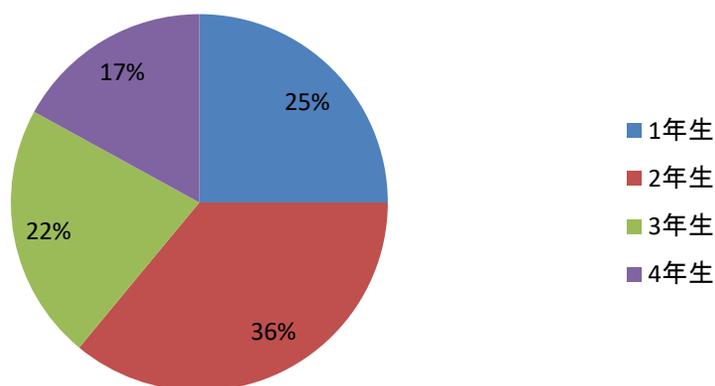


図 6.1 調査対象者の学年別割合

調査の対象者数を見ると、2年生が全体の36%と最多である一方、4年生が17%で最少である。4年生は卒業論文を執筆する時期であり、また日本語教育学科の場合、教育実習の報告書を執筆する時期でもあるため、調査協力の人数に影響したのではないかと考えられる。また、協力してくれた日本語専攻科は1年目の前期か後期に日本事情の科目を設けていることから、1年生の一部は日本事情を受講している時期でもあると考えられる。

6.4 調査結果の提示

本節での本調査の結果の提示のし方は、日本事情の学習内容と学習活動に関わる質問項目の場合⁵⁸、まず分布を棒グラフで提示し、その分布についての解釈を行う。分布の解釈後、学習者のニーズを「高」「中」「低」のレベルで分け、表で提示する。本調査の結果は表 6.2 から表 6.5 にまとめており、各表は「選択肢」、「平均」、「ニーズレベル」という三つの欄から成り立つ。「選択肢」の欄はアンケートの質問項目に設定された「選択肢」を指す。「平均」の欄に関しては、対象者が質問項目に書いた選択肢に合わせた5点から1点までの点数がついているため、その各選択肢の平均値を指す。

⁵⁸ 学習内容や学習活動に関するアンケートの質問項目は I から IV までである。（本調査用のアンケート項目を参照）

この平均値は、各選択肢の合計値を有効な答えの合計値⁵⁹に分けることで得られた数字である。「ニーズレベル」の欄は、選択肢のニーズの段階を指す。このニーズの段階は、「高」「中」「低」のカテゴリーに分けられる。「高」は学習者のニーズが高いという意味であることから、学習者の視点から優先すべき項目だと解釈できる。「中」は学習者のニーズとして高くないが、低いとも言えない段階であり、「中」のニーズは時間的に余裕があれば、日本事情の授業に取り入れることも考えられる項目を指す。「低」レベルは学習者のニーズが低いという意味であり、学習者の視点からは日本事情の授業に取り入れることは不要であると解釈できる。

各選択肢を「高」「中」「低」に分類するために基準が必要であるが、各質問項目によって分布が異なるため、基準を各分布に合わせる必要がある。この基準を決めるために、4.3.3で解説したようにMi値とSdi値を調べるのが不可欠である。表では各選択肢の合計点を提示していないが、「平均」の欄を見ると平均値が明確であるため、その平均値に「N」をかけると、選択肢の合計点になる。繰り返しになるが、Mi値とSdi値の分析は、以下の方法で行う。

$$Mi = 1/2 \text{ (最高の合計点 + 最低の合計点)}$$

$$Sdi = 1/6 \text{ (最高の合計点 - 最低の合計点)}$$

Mi値とSdi値が得られた後に、各選択肢を「高」「中」「低」のニーズレベルにカテゴリー化をするために、以下の数式を用いる。

$$\text{高} : X \geq Mi + 1 Sdi$$

$$\text{中} : (Mi - 1 Sdi) \leq X < (Mi + Sdi)$$

$$\text{低} : X < Mi - 1 Sdi$$

⁵⁹ 選択肢の合計値は対象者が一つの選択肢を選んだ点数の合計である一方、有効な回答の合計値は対象者が222名であるとしても、場合によっては222に至っていないこともある。つまり、有効な回答の合計値は、各質問項目の結果を統計的に分析するために得られた有効な答えの合計点である。表中では「N」で表すこととする。

6.5 日本事情項目による学習者のニーズ

文化学習におけるコンテンツは様々あるが、本調査は国際交流基金（2010）が述べている日本事情の学習内容のカテゴリーに基づき、アンケート項目を作成した。それは以下の二つの理由による。一つは、国際交流基金（2010）⁶⁰が提示しているカテゴリーが「対人関係」から「自然環境」まで日本事情の学習内容をほぼ網羅していると考えられること、もう一つは、インドネシアで日本事情を担当するインドネシア人日本語教師が選定した学習内容のすべてがこれに含まれるからである。そのため、アンケート項目はこのカテゴリーを基に作成した。この質問項目の結果については、以下の図 6.2 のように分布をまとめた。

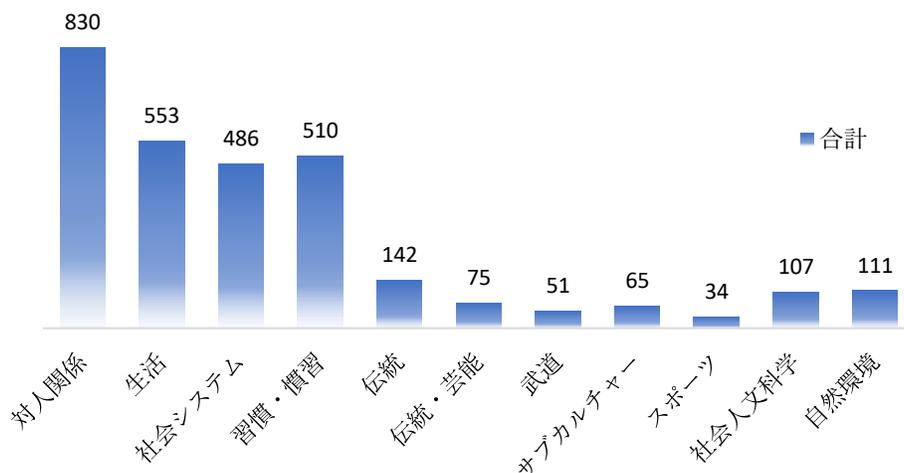


図 6.2 学習項目によるニーズの分布

図 6.2 に示す日本事情学習ニーズの分布を見れば、「対人関係」が最も高く、「生活」、「習慣・慣習」も合計値が 500 を超えている。インドネシア人日本語教師が日本事情の授業に多く取り入れる「社会人文科学」及び「伝統」の分布は小さいことが見て取れる。前節で述べたように、こういった分布を表す棒グラフを基にし、ニーズレベルを表で提示するためのデータとなる。ニーズレベルの基準を決定する方法は 4.3.3 及び

⁶⁰ 国際交流基金が述べた日本事情のカテゴリーの詳細は、節 2.2 を参照

6.4 で既に解説したが、基準を統計的に決定する例は、図 6.2 の分布を基に、以下のよう
に M_i 値と S_{di} 値を調べる⁶¹。

$$\begin{aligned} M_i &= 1/2 \text{ (最高の合計点 + 最低の合計点)} \\ &= 1/2 (830+34) \\ &= 432 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} S_{di} &= 1/6 \text{ (最高の合計点 - 最低の合計点)} \\ &= 1/6(830-34) \\ &= 132.67 \end{aligned}$$

以上、 M_i 値と S_{di} 値を得られたが、この数値を用いて以下のようにニーズレベルの基
準を決める。

$$\begin{aligned} \text{高} &= X \geq M_i + 1 S_{di} \\ &= X \geq 432 + 132.67 \\ &= X \geq 564.67 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{中} &= (M_i - 1 S_{di}) \leq X < (M_i + S_{di}) \\ &= (432 - 132.67) \leq X < (432 + 132.67) \\ &= 299.33 < X < 564.67 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{低} &= X < M_i - 1 S_{di} \\ &= X < 432 - 132.67 \\ &= X < 299.33 \end{aligned}$$

上記の結果のうち「高」の基準を見ると、合計値が 567.67 を超えた場合、ニーズレ
ベルが高いと解釈できることがわかる。そうすると、図 6.2 では「対人関係」のみニー
ズレベルが高いということになる。つまり、学習者にとって最も優先すべき学習項目は
「対人関係」に関わる学習内容である。「中」のニーズレベルでは「生活」、「社会シ
ステム」、「習慣・慣習」であるため、時間的に余裕があれば、これらの内容を授業に
取り入れることも考えられる。また、「低」に入った学習項目はニーズとして低いと考
えられるため、授業に取り入れるべきではないという解釈が可能となる。

⁶¹ 分布に対する統計的な分析のプロセスを提示する解説は、図 6.2 のみである。他の分布では結果のみ提
示するが、分析方法は同様である。

ニーズのデータの解釈を提示しやすくするため、表 6.2 のように、分布を表でまとめる⁶²。しかし、表では「平均」の欄で分布の合計を提示するため、各選択肢及び基準を含めた合計を有効な回答数（N）で割ることにより、平均値が得られる。結果は以下の表 6.2 のとおりである。

表 6.2 学習項目のニーズレベル

選択肢	平均	ニーズレベル
対人関係	3.74	高
生活	2.49	中
社会システム	2.19	中
習慣・慣習	2.30	中
伝統	0.64	低
伝統・芸能	0.34	低
武道	0.23	低
サブカルチャー	0.29	低
スポーツ	0.15	低
社会人文科学	0.48	低
自然環境	0.50	低
基準	高= $X \geq 564.67 = X \geq 2.54$ 中= $299.33 < X < 564.67 = 1.35 < X < 2.54$ 低= $X < 299.33 = X < 1.35$	
N : 222	Mi:432	Sdi:132.67

表 6.2 のデータに対する解釈は図 6.2 と同様であるため、ここでは解釈を行わないが、これ以降は選択肢のニーズレベルの分布を表で提示した後に解釈を行う。この選択肢に関わる対象者のコメントは、以下のように KH Coder で共起率⁶³を分析した。

⁶² 棒グラフは分布を提示するためには適切であるが、ニーズレベルを提示することは表の方が適切であるため、棒グラフで提示した分布はニーズレベルとして表でまとめる。

⁶³ 共起率とは、主軸キーワードを含む文章、あるいはその周辺に同時かつ頻繁に出現する他の単語の使用率を指す。

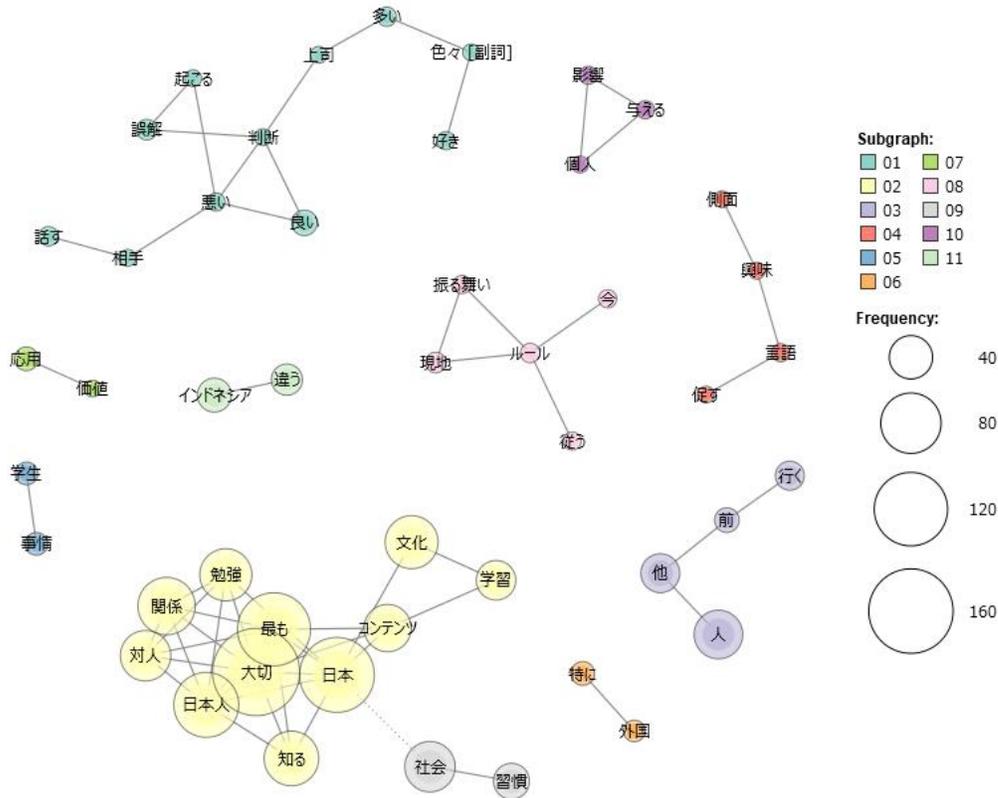


図 6.3 学習項目によるニーズに関わる共起率

図 6.3 は優先すべき学習項目（選択肢）に対する対象者のコメントから作成された共起関係の図であるが、図は KH Coder からそのまま転記した。対象者は最も必要な選択肢のみに選ぶ理由を記述しなければならないため、「高」の学習内容のニーズレベルに関わるコメントは共起語⁶⁴の中心となることが多い。そのため、図 6.3 のように、「対人関係」に関わる円の大きさが最も大きく、共起率も最も高いことがわかった⁶⁵。図 6.3 からは「対人関係」に関わる「対人」「関係」「大切」「最も」「日本」「日本人」という語彙の共起率が高い。「大切」と「最も」の共起率が高いのはアンケートの質問項目の影響⁶⁶によるとも考えられるが、「対人」「関係」「勉強」「知る」「日本人」

⁶⁴ 共起語とは、一つの事柄について共に多く用いられるキーワードとなった語彙を指す。

⁶⁵ 共起率について、円が大きければ大きいほど頻度がそれなりに多くなり、線が太ければ太ほど関係もそれなりに近いと解釈できる。

⁶⁶ 「〇〇中から、最も大切なのはなんですか。」「△△が最も大切です。」のように、質問項目にある単語が繰り返して回答に用いられる。

等との関連線を分析すると、多くの学習者は日本人との「対人関係」に関わることを学習することが最も大切な学習項目だと考えていることが示唆された。これらの共起する語彙を一つ一つ関連づけると、「日本人との対人関係が最も大切」、「対人関係を勉強することが最も大切」等のコメントが想像でき、実際にそういったコメントが多数あった。そのため、図 6.3 から「対人関係」の選択肢に関わる共起語を分析すると、インドネシア人日本語学習者にとっての「対人関係」の学習内容の重要性が伝わる。

国際交流基金が提示している日本事情のカテゴリーをもとにした質問項目の結果から、最も大切な日本事情の学習内容は日本人との「対人関係」に関わる学習内容だということが明確になった。しかし、本研究の目的は異文化接触場面に必要な日本事情教育を解明することであるため、従来の日本事情学習内容に関わるアンケートの質問項目だけでなく、異文化接触場面に关わる学習内容に関する質問項目も必要である。また、領域が非常に広い日本事情の学習内容の中には、従来の日本事情にはあまり取り入れられていない学習内容が多くある。ここでは通常あまり取り入れられていない日本事情の学習内容として、「コミュニケーションスタイル」、「マナー」、「対人関係の構築」の選択肢以外に、(学習者の)「専攻・専門に関する項目」、「日本での生活」、「その他」の選択肢である。結果として、分布は以下の図 6.4 のとおりである。

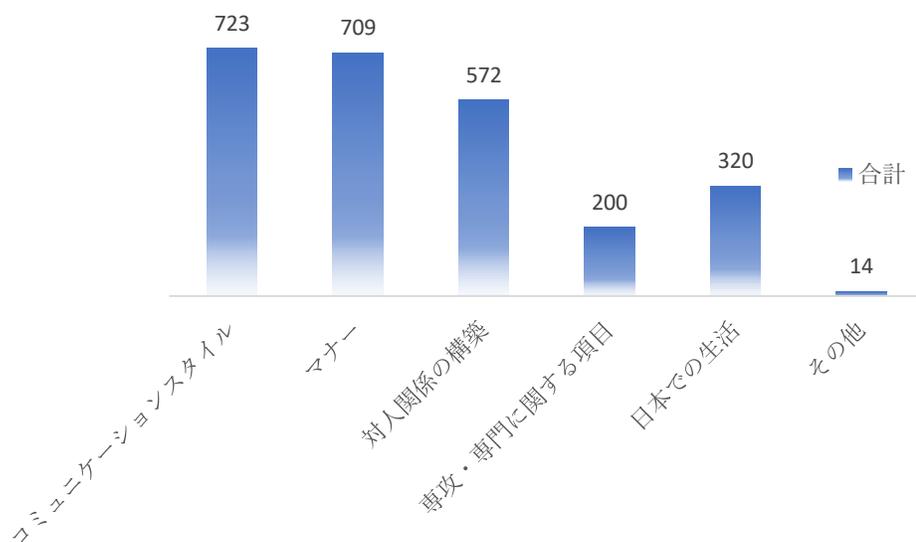


図 6.4 通常あまり学習されていない日本事情の学習項目へのニーズの分布

図 6.4 では、500 を超えた選択肢は「コミュニケーションスタイル」、「マナー」、「対人関係の構築」である。図 6.2 と比較すると、「その他」以外に棒と棒の高さの違いがそれほど遠く離れていないため、分布は1つの選択肢に中心しているのではなく、他の選択肢にもより散布されていることがわかる。しかし、こういった平均的な分布をしている場合でも、各選択肢の結果をニーズレベルで分類することが可能である。図 6.4 のデータをニーズレベルで分類すると、以下の表 6.3 のとおり、まとめられる。

表 6.3 通常あまり取り入れていない学習項目へのニーズ

選択肢	平均	ニーズレベル
コミュニケーションスタイル	3.26	高
マナー	3.19	高
対人関係の構築	2.58	高
専攻・専門に関する項目	0.90	低
日本での生活	1.44	中
その他	0.06	低
基準	高= $X \geq 486.67 = X \geq 2.19$ 中= $250.33 < X < 486.67 = 1.13 < X < 2.19$ 低= $X < 250.33 = X < 1.13$	
N:222	Mi:368.5	Sdi:118.67

表 6.3 を見ると、通常あまり取り入れられていない学習項目からも、「対人関係」に関わる学習内容のニーズが最も高いことがわかった。つまり、表 6.3 からは「対人関係の構築」、「コミュニケーションスタイル」、「マナー」といった日本人と関わる際に必要な学習項目が最も必要な学習内容だということになる。表 6.3 と表 6.2 に提示された分析の結果からは、インドネシア人日本語学習者にとって最も必要な学習内容は、「対人関係」に関わる学習内容にほかならないことがわかった。この質問項目に対する対人関係に関わる共起語は、図 6.5 で提示するとおりである。

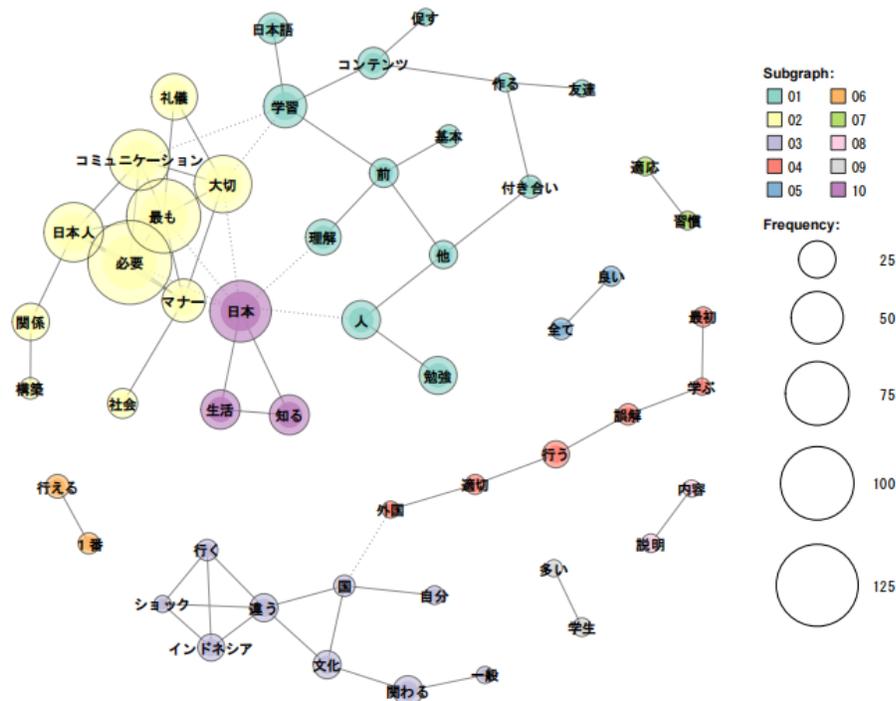


図 6.5 通常あまり取り入れられていない学習内容における共起率

図 6.5 を見ると、「コミュニケーションスタイル」、「マナー」、「対人関係の構築」に関わるコメントであるため、これらのキーワードの共起率が最も高く、円のサイズも最も大きいことがわかった。無論、「最も」と「必要」の円の大きさは図 6.3 のように、質問項目の記述の影響によるとも考えられるが、「コミュニケーションスタイル」、「マナー」、「対人関係の構築」といった学習項目のニーズが高い。そのため、共起語から見ても、それらは必要な学習項目と解釈することが可能である。例えば、黄色のキーワードの一つ一つを関連づけると、「マナーが日本人とのコミュニケーションを行う時に必要」「礼儀が大切」等のコメントが考えられる。実際にも、そういったコメントが多数あった。この結果を考慮すると、国際交流基金（2010）が述べた名前・敬称、上下関係、親疎関係、内外関係等の「対人関係」と、表 6.3 からわかった「コミュニケーションスタイル」、「マナー」、「対人関係の構築」は、最も求められる学習内容として重複している。そのため、本節以降では、日本事情教育においてニーズが最も高い学習内容として、これらの学習内容を「対人関係に関わる学習内容」と称する。

6.6 学習者が求める学習活動

本節では、学習活動について従来の学習活動と通常あまり行われない学習活動の二つに分ける。こういった質問項目を設ける理由は、従来と異なる日本事情教育の枠組みを構築するために必要であると考えられるからである。従来の日本事情教育に対しても、学習者がどういった学習活動を必要としているのかを分析し、新しく構築する日本事情教育の概念にそれらのある程度取り入れることも考えられる。したがって、学習者のニーズを踏まえた日本事情教育の構築は、従来の日本事情から必要とされる項目と、従来取り入れられていない項目から成り立つ。必要とされる従来の学習活動のニーズについては、以下の図 6.6 で分布を示す。

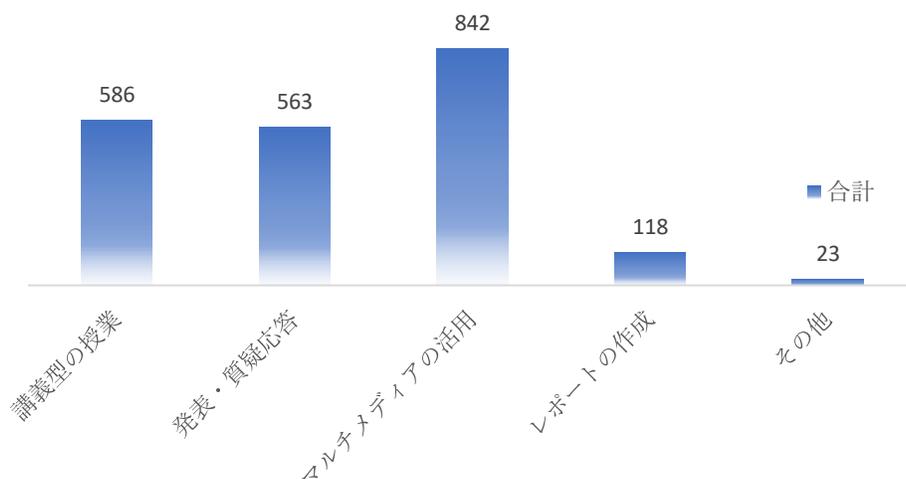


図 6.6 従来の学習活動におけるニーズの分布

図 6.6 から、学習活動として学習者のニーズが最も高いのは「マルチメディアの活用」であることがわかった。教師による「講義型の授業」と学習者による「発表・質疑応答」は、その次に高いと言える。つまり、分布はこの三つの選択肢に集中していることがわかった。「レポートの作成」と「その他」はニーズが低い。分布を表す図 6.6 の合計値を用いて、表 6.4 のとおり従来の学習活動をニーズレベルに分けることができる。

表 6.4 従来の学習活動のニーズ

選択肢	平均	ニーズレベル
講義型の授業	2.64	高
発表・質疑応答	2.54	中
マルチメディアの活用	3.79	高
レポートの作成	0.53	低
その他	0.10	低
基準	高= $X \geq 569 = X \geq 2.61$ 中= $296 < X < 569 = 1.36 < X < 2.61$ 低= $X < 296 = X < 1.36$	
N:218	Mi:432.5	Sdi:136.5

従来の学習活動では、「マルチメディアの活用」のニーズが最も高かった。「マルチメディアの活用」は、学習者あるいは教師がパソコン等を利用して学習を行うことを指す。また、動画等を見せることで情報の伝達を促し、コミュニケーション能力の養成、異文化理解、学習者主体の教育に効果がある（鄭 2002）。そのため、授業を開発する際に、日本事情のテーマに合わせ使用頻度を増やすことも検討できるだろう。また、必要な場合、LL 教室で日本事情の学習を行うことも可能である。教師による「講義型の授業」へのニーズも依然として高く、マルチメディアで学習しにくい場合は、「講義型の授業」で学習を行うことも可能だと考えられる。本研究では、結果が「高」の選択肢が学習者にとって最も優先すべき項目だと解釈されるため、授業の開発を行う際に、「マルチメディアの活用」の頻度を増やすことが重要であるが、マルチメディアで学習しにくい項目がある場合は、教師による「講義型の授業」も検討すべきだということになる。

ドキュメントの分析の結果を見ると、学習者による「発表・質疑応答」の学習活動を行う日本語専攻科は6つのうち3つあるが、教師による「講義型の授業」が殆どである。学習者による「発表・質疑応答」の学習活動は、担当教師が学習者を幾つかのグループに分け、まず講義やテキスト等を通して学習した内容をもとにディスカッションを行い、その内容をグループでまとめた後、各グループが一つのテーマについて全員の前で発表する、といったものである。その後、その発表に対する質疑応答の時間も設けら

というキーワードは、実際のコメントからは「飽きない」という肯定の意味を持つキーワードである。こういったキーワードの線を分析すると、「マルチメディアを使って学習すると、飽きない」という理由に解釈できる。実際のコメントからは「飽きる」ではなく「飽きない」という語が全体的に使われている。原因としては、KH Coder が否定形を肯定型に変換する機能を持っているため、図 6.7 では「飽きない」は「飽きる」で表現されているのである。また、他の「高」のニーズレベルは教師による「講義型の授業」であるため、共起語は「先生」と太い線で繋がっている「説明」「聞く」「学生」といったキーワードで表した。実際のコメントからは、「先生の説明がわかりやすい」といった理由とともに教師による「講義型の授業」を選択したケースが多かった。

この分析の結果からは、新たな日本事情授業を開発する際に従来の学習活動に加えて「マルチメディアの活用」や教師による「講義型の授業」が優先すべき項目であるという解釈が可能である。このように、新たな日本事情教育の枠組みを構築する場合、従来の学習活動の他に、現在の日本事情授業に取り入れられていない学習活動もともに検討すべきである。理論的枠組み及びドキュメント分析の結果からは、通常取り入れられていない学習活動は「日本人の招待」、「日系企業等への訪問」、「交流」、「プロジェクトワーク」、「ディベート」という学習活動であることがわかった。これらの学習活動をアンケート項目に応用し、調査を行った結果を図 6.8 に示す。

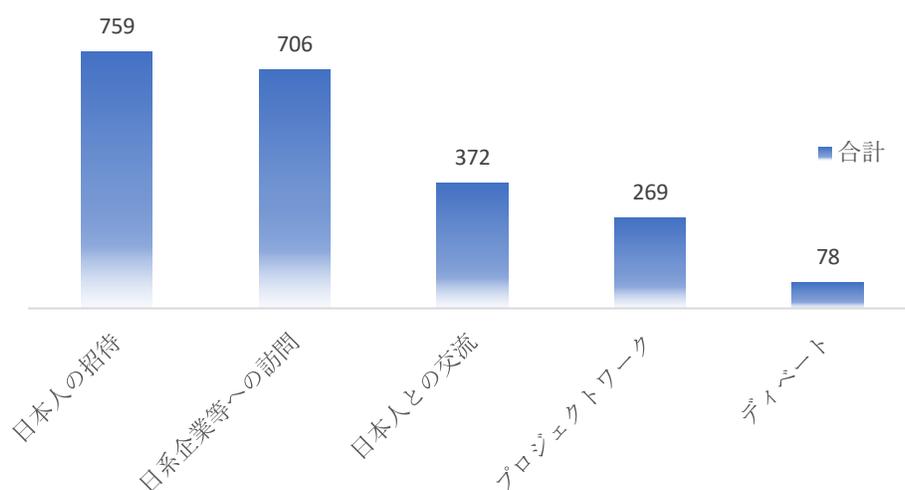


図 6.8 検討すべき学習活動のニーズの分布

ドキュメント分析の結果からは、教室外での学習活動が設けられていないことがわかった。また、これらの学習活動は現状では設けられていないため、これらを取り入れた場合、インドネシアにおける日本事情では新たな学習活動となる。これらの学習活動をアンケートの質問項目として取り入れた結果、図 6.8 からは「日本人の招待」と「日系企業等への訪問」は 500 を超え、分布の中心となっている。これに対して、プロジェクトワークやディベートといった他の学習活動へのニーズは低い。統計的に分析した結果、上記の図 6.8 の分布は表 6.5 に示すニーズレベルに分けることができる。

表 6.5 通常取り入れていない学習活動のニーズ

選択肢	平均	ニーズレベル
日本人の招待	3.49	高
日系企業等への訪問	3.25	高
交流	1.71	中
プロジェクトワーク	1.23	低
ディベート	0.36	低
基準	高= $X \geq 532=X \geq 2.45$ 中= $305 < X < 532=1.40 < X < 2.45$ 低= $X < 305=X < 1.40$	
N:217	Mi:418.5	Sdi:113.5

表 6.5 から、「高」のニーズレベルに入ったのは「日本人の招待」と「日系企業等への訪問」であることがわかった。そのため、この結果からは「日本人の招待」と「日系企業等への訪問」は日本事情科目のデザインを行う際に、取り入れる学習活動として最も優先すべき学習活動であると解釈できる。また、表 6.5 を見ると、「中」に入った「交流」は可能かつ時間的に余裕があれば、授業に取り入れることも考えるべきであろう。この三つの学習活動を日本事情授業に取り入れることにより、従来と異なる日本事情の授業の開発につながる。他の学習活動は「低」のニーズレベルに入ったため、授業に取り入れることは不要である。この結果に関わる共起語を、以下の図 6.9 に示す。

「日本」と繋がっているため、共起関係⁶⁷が少数あると解釈できる。そのため、「日系企業への訪問が最も大切」、「訪問で日本文化が直接見られる」といった実際のコメントが見られたため、この選択肢のキーワードとなった。

6.7 必要な日本事情の科目数

ドキュメント分析及び予備調査の結果でわかったように、日本事情は4年間の在学期間に1科目（一学期）のみ設けられ、殆どが、履修後に2～3単位取得することが可能である。以下、図6.2は学習者が望む科目数を表している。

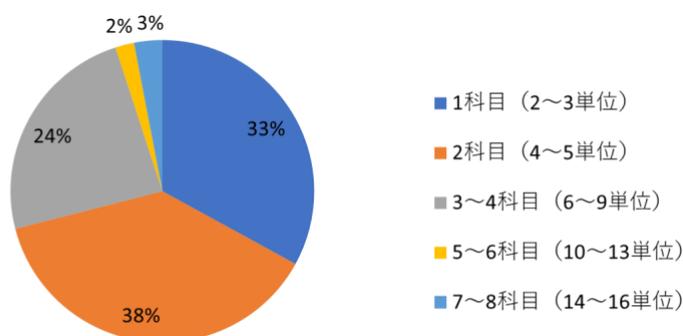


図 6.2 インドネシア人日本語学習者が望む日本事情の科目数

以上の図6.2を見ると、インドネシア人日本語学習者のうち67%は現状より多くの日本事情科目数を望んでいることがわかった。現状では、日本事情の科目数は4年間で1科目（2,3単位）のみ設けられ、通年の授業とはなっていない。また、カリキュラムに注目して「読解」や「聴解」といった日本語科目と比較すると、日本事情の科目数は非常に少ないため、現状の一学期のみ受講する日本事情は、十分に学習者のニーズや日本の社会文化学習の目的を満たせるのかを検討する必要がある。このように、日本事情の科目数が増えることを望んでいる日本語学習者は多いため、各大学のカリキュラム改革を行う際、本調査の結果は一つの参考となると考えられる。

⁶⁷ ここでの共起関係とは「日本人の招待」という選択肢と同じキーワードである。そのため、「日本企業等への訪問」という選択肢を選定する理由に用いられる場合は、この選択肢のキーワードともなるのではなく、頻度により多く用いられる「日本人の招待」との共起関係があるということを、KH Coderによって分析する。

6.8 日本事情に関する情報を獲得する手段

下記の図 6.3 は、インドネシア人日本語学習者が日本事情の授業（大学の日本語教師）以外からも、日本事情に関する情報を入手しているか否かを尋ねた結果である。そして、日本事情に関する情報を入手している学習者に対して、その情報を入手する手段について尋ねた結果が図 6.4 である。

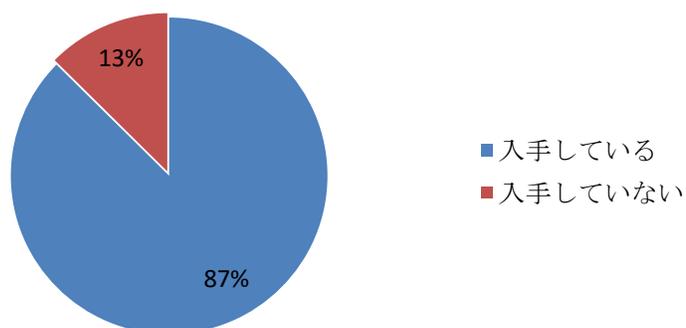


図 6.3 授業外で日本事情に関する情報入手の有無

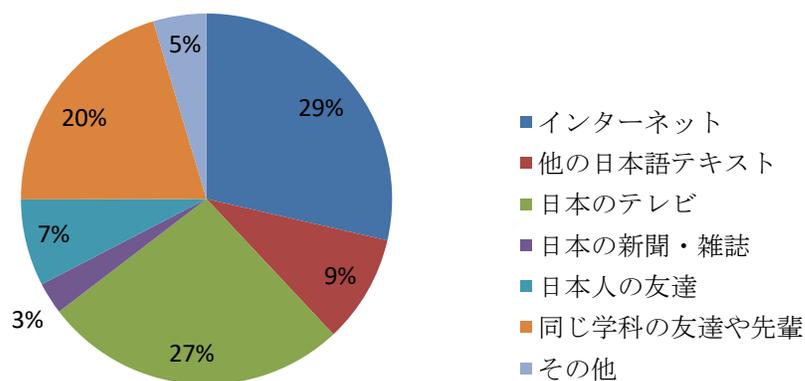


図 6.4 授業以外で日本事情リソースに接触する手段

学習者は授業以外に、インターネット、日本のテレビ番組、同じ学科の友達や先輩等から日本事情に関わる情報を入手していることがわかった。現在はインターネットの普及が進歩しており、スマートフォンを持っていない人はいないと言えるほどであるた

め、日本の社会や文化に関わる情報をより容易に入手できる。日本語学習者の場合も、日本事情に関する情報を入手する際に、スマートフォンやパソコン等が大いに役立っている。また、インターネットが繋がれば、日本語のニュースやドラマ、アニメ等を 유튜브 で視聴でき、日本のテレビ番組も契約により視聴でき、さらにはインドネシア語の字幕がついている番組も少ないものの、存在している。

6.9 考察

学習者が望む日本事情の内容は、第5章で明らかにしたように、インドネシア人日本語教師が担当した日本事情の学習内容と大きく乖離していることがわかった。学習内容として最も多く選定される政治、経済、歴史、教育、宗教等に関わる「社会人文科学」は、学習者はそれほど求めていない。つまり、教師によって最も多く選定される「社会人文科学」は、学習者の視点からは学習ニーズが低く、学習ニーズが最も高い「対人関係」は学習内容として選定されていないのである。これは第5章で述べたように、日本事情とは何かという捉え方に関わっているのであろう。他者（日本人）と関わるために学習する項目は、日本事情よりも高学年に設置される「異文化理解」や「異文化コミュニケーション」という科目で扱われるため、低学年の日本事情では不要だと判断されている。この現象は、第5章でシラバス分析の対象となったインドネシア教育大学、バンドン外国語大学、ウダヤナ大学、インドネシアコンピューター大学のカリキュラムに見られた。この点は、松島（2004）が述べたように、他者との関わり方を扱う日本事情は中上級のレベルに設置されることが望ましいため、こういった発想は日本事情を担当するインドネシア人日本語教師及び各専攻科のカリキュラム開発のチームが持っていると考えられる。しかし、「対人関係」に関する学習を日本事情に入れる場合、ソーシャルスキル⁶⁸を育成することにも関わる（田中 2010）。三代（2009）が述べたように、ソーシャルスキルを教えることで、学習者のコミュニケーション能力を向上させ、異文化適応力の養成にも繋がるのである。

⁶⁸ 石川（2015, p. 26-1）によれば、『ソーシャル』は、『対人的なこと』あるいは『人間関係に関すること』を意味し、『スキル』は知識や経験に裏打ちされた『技術』『技能』を意味する」と定義している。領域は身辺自立や挨拶といった基本的スキルから、問題解決のためのスキルや友情関係等幅広く及んでいる。

本調査でわかったように、「対人関係」に関わる学習ニーズが高いことは、見城他(2015)⁶⁹が明らかにした「日本の現代文化」の学習ニーズが最も高い中国人日本語学習者と異なる。この相違は、中国人日本語学習者が「日本の現代文化」への興味が高いためだとされる。一方、本研究では「対人関係」への学習ニーズが最も高い背景に、「大切」、「最も」、「日本人」、「関係」等の学習者が述べた理由との高い共起率が関係している。つまり、インドネシア人日本語学習者は、中国人日本語学習者のように興味を重視して学習内容を選ぶのではなく、日本人との関わり方が重要な学習内容だと捉えており、この重要性は学習内容を選ぶ基準とされることが示唆された。他方、見城他(2015)で分類された「日本の現代文化」の大部分は、本研究のカテゴリーでは「サブカルチャー」に相当するが、ニーズは低レベルであった。したがって、同じ日本語学習者だとしても、学習内容を選ぶ基準によって、日本事情の学習ニーズも異なってくる。

学習方法や学習活動のニーズに関しては、「マルチメディアの活用」が最も高く、教師による「講義型の授業」は学習者による「発表・質疑応答」を上回った。しかし、「マルチメディアの活用」と同様に、「講義型の授業」へのニーズが高いとしても、この方法はいわば教師主体の授業に陥りやすい学習方法である。第1章で述べたように、日本事情に対する事象は個人によってそれぞれ異なる。そのため、伊藤(1998)が指摘したように、日本事情は教えられるものではなく発見されるものであり、授業は物の見方を学ぶ場となっている。したがって、教師による「講義型の授業」にすべきではなく、教師は学習者がその日本事情の発見を支援する役割を果たすべきである。

学習活動に関しては、現状では授業にあまり取り入れられていない「日本人の招待」が最も高いことがわかった。日本人を招待することが困難な場合、国際交流基金(2010)は日本に滞在した経験があり、日本のことを詳しく知っている人や日本人と接触の経験が豊富な人を招待することも考えられるとしている。しかし、こういった活動は細川(2003)が述べたように、教室に日本人を招待する際、その日本人を個人として認識し、

⁶⁹ 本研究と同様にアンケートによるニーズ分析が行われたが、結果として最も高い三つは「日本の現代文化」「日本の伝統文化」「日本人の考え方、行動、習慣」であった。この「日本の現代文化」はアニメ、ドラマ、映画、ファッション等を指す。一方、マナーや日本人との対人コミュニケーション等の項目は「日本人の考え方、行動、習慣」のカテゴリーに入っている。

文化に対するその人の考え方も、言わば個人の考え方であると認識することにより、文化に対する概念を一般化することを控え、そのように文化や社会を認識する重要性を学習者に伝える必要がある。次に、日本人学校や日系企業といった「日系企業等への訪問」のニーズが高いことがわかった。日系企業や日本人学校といった日本人が主体となる機関は、日本的な文化やルールがある程度支配的であり、インドネシアで日本文化を観察することが可能な場所の典型である。こういった場所は宮崎（2000）が述べたように、JFL 環境であるインドネシアで日本文化に触れることができる場所であるため、こういった場所を訪問する活動を検討する必要がある。こういった施設や機関等を訪問する学習活動は、于塚・岡（2014）で述べられているように日本国内の場合でも行われ、実際に触れ合う体験を行わせることにより、異文化に対する気づきを促そうとする方法である。また、日本事情の学習リソースとなる可能性として、87%の学習者が教室外で日本語に接触し、そこから日本事情に関する情報を獲得している可能性が示唆される。図 6.4 に示されたように、インターネットや日本のテレビ等を通して、日本語と接触しているのである。この点は、日本事情の学習を促すために検討する必要がある。ただし、Yee-han et al.（2017）が述べたように、こういったメディアは日本文化を学習するために利用できる側面があるとしても、ステレオタイプを形成させる危険性がある。そのため、久保田（2008）が指摘しているように、ステレオタイプの形成から保護するためには、文化を批判的に考える必要がある。第 5 章で分析対象となった五つの大学のシラバスを考慮すると、日本事情で文化に対する批判的な思考を養うことを一つの目標としたのは、インドネシア教育大学とウダヤナ大学のみである。しかし、その目標と行われている学習活動、評価方法との関連性を確認するのは、シラバス分析のみでは難しい。

日本事情の科目数に関して、多くの専攻科は日本事情に関する科目を 1 科目のみ設けているが、学習者の視点からは科目数が不足していることがわかった。ハサヌディン大学は二つの日本事情の科目を開講しているが、これは珍しいケースである。日本事情の領域は非常に広いため、一つの科目では学べることはそう多くないであろう。日本国内を見てみると、「日本事情 B」まで開講している福岡教育大学や大阪府立大学等のように、科目が一つのみでは不十分だと考える教育機関が多くある。インドネシア国内で学習者のニーズを考慮した場合、カリキュラムを改革する際には、日本事情の開講科目数

を増やす検討も行う必要がある。当然このような検討は、カリキュラム開発のチームはもとより、担当教師の負担も倍増するが、学習者のニーズに応え、ニーズに沿って日本事情で学んだことを学習者が将来活かすためには欠かせない第一歩であると言える。

6.10 まとめ

ニーズ分析の結果から、インドネシア人日本語学習者が求める「対人関係に関わる学習内容」が最も高いニーズであり、日本事情の現状の内容と異なることがわかった。日本事情における「対人関係に関わる学習内容」の必要性は細川（2002）も主張しているが、細川の主張は日本国内の学習環境を前提になされている。しかし、JFL 環境であるインドネシアにおいても、「対人関係に関わる学習内容」は学習者の視点から最も必要な学習内容であることが明確となった。「対人関係に関わる学習内容」は異文化接触場面での実用性につながる学習項目である。そのため、学習者のニーズを踏まえた異文化接触に必要な日本事情とは、日本人との関わり方に関する日本事情学習でなければならない。

多くのインドネシア人日本語教師の日本事情に対する捉え方を考察すると、上記で述べた「対人関係に関わる学習内容」を日本事情に取り入れる場合、「異文化理解」、「異文化コミュニケーション」の授業と重複すると判断される可能性がある。一方、日本国内の日本事情では、日本の文化や社会、日本という国に関わる情報・知識の領域を理解する科目だけでなく、異文化に対する姿勢を養うことや異文化適応に必要なことを学習する科目等も散見される。無論、日本国内においても、異文化コミュニケーションや異文化理解教育も行われている。そのため、この例を考慮すると、日本語専攻科の主な目的が日本語でのコミュニケーション能力を養うことであるならば、異文化接触に必要な日本事情の概念は他の授業と重複すると捉えられるべきではない。むしろ、日本事情も異文化理解と異文化コミュニケーションと同様に、日本語を習得するプロセスを促す授業であることを意識する必要がある。JFL 環境であるインドネシアでも、日本語専攻科の日本語学習者の多くが卒業後日本人と関わりながら日本語を用いる職務に就くことを考えると、インドネシアでも日本人との異文化接触を想定した学習は必要ではないかと考える。

第7章

JFL 環境における異文化接触場面に必要な日本事情のコースデザイン

本章では第5章と第6章の結果を踏まえ、異文化接触に必要な日本事情の枠組みを構築し、コースデザインの形として具体化する。第1節では、第5章と第6章の結果を再検討し、異文化接触場面に必要な日本事情の枠組みを概説する。本研究では Graves (2000) が提示したコースデザインの手続きを基に日本事情教育の枠組みを開発するため、第2節ではこの手続きについて述べる。また、この手続きを基に、本節から第6節までコースデザインの開発における各プロセスを概説する。第3節では、第5章と第6章を基に日本事情教育の目的・目標を設定する。第4節では、日本事情の学習内容を開発するプロセスを解説する。第5節では、設定した目的・目標を測定するために必要な評価方法を概説する。第6節では、選定した学習内容を組織化することによりシラバスを開発し、授業の内容のコンセプトを概説する。第7節では、教師が行うべき役割を分析する。第8節では、インドネシアの事情と学習者のニーズを基にした日本事情のコースデザインの考察を行う。最後に第9節で本章のまとめを述べる。

7.1 ドキュメント分析及びニーズ分析を踏まえた日本事情教育の枠組み

本節ではドキュメント分析及びニーズ分析を踏まえ、求められる日本事情教育の概念を解説する。第5章では、インドネシア人日本語教師が行っている日本事情の授業が日本に関わる様々な事柄の知識を取り扱うことが殆どであることがわかった。しかし、指摘したようにそういった学習内容が実際の生活にどのように役に立つのかという点が不明である。日本事情教育には指針もなく、何を優先的に学習すべきか未だに明らかとなっていないため、教師による主観的な日本事情の事象を基に授業が行われている。この点は、各シラバスの学習内容から明らかとなった。研究背景で述べたように、多くの日本語専攻科は国際交流基金が開発した JF スタンドアードを基に日本語教育を実施しているため、日本語学習項目には相違は見られない。例えば、日本語能力の N5 レベルではどういった漢字や表現を学習すべきか、読解では能力どの程度まで達成すべきかといった基準が既に明確となっている。そのため、専攻科によって用いられるテキストや学

習方法が異なってくるとしても、内容及び狙いから見れば、大幅な相違は見られない。この点は、教育の指針がなく、領域も非常に広い日本事情と異なる点であり、各担当教師が個人の日本事情の事象を基に教育を行っている原因とつながるであろう。

既に指摘したように、現在インドネシア人日本語教師が担当する日本事情の授業は、学習内容が実際の生活にどのように役に立つのかという点が解明されないまま、様々な知識を学習者に教え込もうとしている。また、学習時間及び担当教師の専門性との関係上、学習できるのは表面的なところのみにとどまってしまう可能性もある。そのため、この課題を解決するために、本研究では第二の解決策として、インドネシア人日本語教師である担当者が日本事情教育の理念を捉え直し、自分自身の専門性に関わる日本事情の学習内容を授業に取り入れることを提案した。

日本事情の学習内容に関する学習者のニーズ分析を行ったところ、学習者は「対人関係に関わる学習内容」を望んでいることがわかった。対人関係というのは、日本人との対人関係のことを指す。この結果をドキュメント分析の結果で述べた第二の解決策と繋げると、多くのインドネシア人日本語教師は日本人との関係を持ち、日本人との異文化接触場面における相互作用の経験を学習者よりも豊富に持っている。学習者は対人関係に関わる学習内容を求めているため、教師の経験により学習者のニーズにある程度応えられる。授業の開発の際、学習者のニーズに加えて教師の専門性に関わる学習内容を学習内容に取り入れることを提案したが、このようにデザインされた授業は、日本史、日本政治、経済といった様々な事柄を取り入れている現在の日本事情よりも、教師の経験がより活かせる。そして、日本人との対人関係の構築は日本語を介して行われるため、担当する日本語教師は自身の専門分野と日本語教育という二つの点で関連していることとなる。したがって、学習者のニーズを基にして日本事情を展開することは、教師の専門性を活かし、異文化接触に必要な日本事情の枠組みを構築するための第一歩となる。学習内容に関しては、ドキュメント分析とニーズ分析の結果は同様の見解を表している。

学習活動に関しては、従来の学習活動の視点では「マルチメディアの活用」と「講義型の授業」のニーズは最も高いことがわかった。こうした学習者のニーズに応えるために「マルチメディアの活用」を増やすことが考えられるが、教師主体である「講義型の授業」で授業を行うと、教師の主観が学習者による日本事情の発見に影響を与えてしま

う可能性がある。第4章で述べたように、教師は自分自身が日本文化の想像に基づいて授業を設計するため、学習者は日本事情に対して自分の視点による発見ができなくなってしまう。そのため、学習者主体の授業は学習者が自分で日本事情を発見するために、最も適切なアプローチである。しかし、ニーズ分析で述べたように、対象者が「講義型の授業」を選んだ背景には、「先生の説明がわかりやすい」といったコメントが多くみられたため、講義型の授業にも強みがあると言える。そのため、学習者にとって内容が理解しにくい理論的な側面がある場合は、「講義型の授業」が適している。したがって、従来の学習活動では学習主体の授業型で授業を行い、マルチメディアの活用や必要性に合わせて教師による講義型の授業を行うことも考えられる。

第6章で提示したように、従来の日本事情で行われたことがない学習活動に関するアンケート項目の結果、「日本人の招待」及び「日系企業等への訪問」がニーズとして最も高い学習活動であった。そのため、従来と異なる日本事情の授業を開発する際には、これらの活動を授業に入れることを検討すべきである。従来の日本事情では教室外の学習活動が設定されたことなく、シラバスを分析する限り、日本事情は教室内での学習に限られている。しかし、教室外での学習活動を設けると、より社会とつながる学習となり（澤邊他 2019）、言語的反応も鋭く、伝達能力も優れている（金栄一 1991）ため、教室外の学習活動を授業に取り入れると、非常に意味をもつ。そのため、日系企業や日本人学校等に訪問して日本事情学習活動を行うことは一つの教室外の活動となる。

以上、「対人関係に関わる学習内容」を主な日本事情の内容とし、それを学習者主体の授業のアプローチで学習することを提案した。活動としては、マルチメディアを用いる学習活動及び必要性に合わせて教師による「講義型の授業」を行うことが望ましいということがわかった。しかし、科目の目的設定、及び評価方法の選定は教師が行うべき項目であるため、コースデザインを通してこの点を検討すべきである。本章では、以上の点が明らかになった。

7.2 Graves (2000) を基にした日本事情のコースデザイン開発

コースデザインの手順は先行研究によって若干異なるが、本研究では Graves (2000) が述べている手続きを基に日本事情コースデザインを行う。Graves は、ニーズ分析、目

的及び目標の設定、学習内容の開発、評価のデザイン、科目の組織化、学習内容のコンセプト化という手順を述べている。また、コンテキストの定義及びビリーフ⁷⁰も関係していると指摘している。本研究でのコンテキストは、インドネシア人日本語学習者の日本事情教育であり、クラスの人数は20名から30名程度、学習環境はインドネシアというJFL環境、学習期間は一学期と特定することができる。また、日本事情で扱う領域は非常に広いため、学習内容としては日本人と対人関係を構築する際に役に立つことを重視するというビリーフがある。Gravesが述べているコースデザインの手順とコンテキスト及びビリーフとの関連性は、次の図7.3のとおりである。

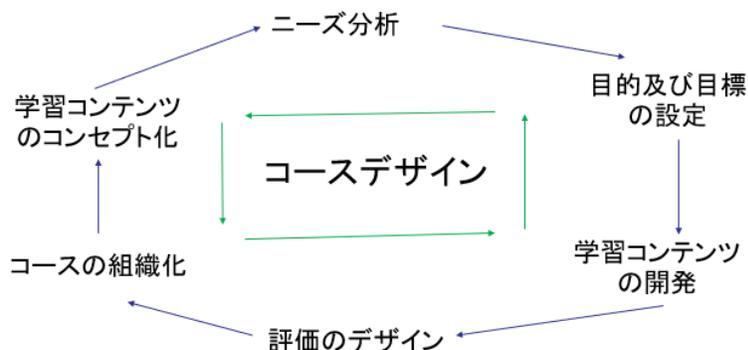


図 7.1 コースデザインの手続き及び手順 (Graves, 2000 : p.3 筆者訳)

7.1 節で述べたように、ニーズ分析の結果から、インドネシア人日本語学習者は「対人関係に関わる学習内容」を望んでいるため、これを主な学習内容とする必要がある。この学習内容を日本事情の授業に取り入れるとしたら、従来と異なる日本事情のコースデザインの開発につながる。第5章で行ったニーズ分析の結果は、インドネシアにおける日本事情が抱えている課題の第二の解決策を行う最初の足場となると考えられる。

⁷⁰ ここではビリーフとは学習に対する先入観及び信念のことを指す。

7.3 ニーズ分析の結果を基にした科目の目的及び目標の設定

第二のコースデザインの手順として、Graves (2000) は目的及び目標の設定を提示している。「目的」は一学期の終了後に習得する能力あるいは成果のことであり、「目標」はその目的を達成するための段階である (Graves, 2000)。ドキュメント分析の結果とニーズ分析の結果を総括的に見ると、担当教師は様々な知識重視から、対人関係重視に日本事情の教育理念を変える必要がある。ドキュメント分析では、担当教師が記述した授業の目的として「〇〇を理解する」が目立ったが、対人関係重視型では実際の生活によりつながりがあるため、「〇〇を理解する」という目的は設定すべきではない。日本国内では、現在多くの日本事情の実践が「〇〇を理解する」という目的で行われる授業よりも、三浦 (2003) や一三三 (2006) が述べたように、異文化に関わる様々な事柄に気づかせることにより異文化対処の姿勢を養うという実践が目立っている。そのため、異文化接触場面における対人関係を学習する際に、知識的な側面は無論必要であるが、実際の個人と個人の対人関係はケースバイケースである。授業の目的は、理論的な側面と実際の対人関係の側面を合わせることであり設定されなければならない。

日本国内の場合、第2章及び第4章で述べたように、多国籍の留学生が日本人学生とディスカッションやプロジェクトワークといったインタラクティブな学習活動を行うことにより、受講者自身でお互いが異なることに気づく。相違の気づきから学習者がその差異を認め、相手を尊重することが日本事情学習の成果となるため、そういった教育は異文化接触場面に必要な日本事情とも言える。知識重視の理念を捉え直す方法として、日本国内での日本事情の学習方法を参考にすることも考えられるが、インドネシアでの学習環境という背景を無視して実施するという意味ではない。これは、インドネシアでは日本人学生との合同授業が困難であるためである。学習者同士でインタラクティブな学習活動を実施できるとしても、学習環境や状況に相違があるため、日本国内で実施される日本事情と同様の成果が得られるとは限らない。そのため、異文化に気づき、異文化の背景を持つ相手を尊敬しようとする姿勢を養うためには、他のアプローチや学習方法を開発する必要がある。

本研究は、授業の目的及び目標を設定するために、達成可能な学習成果及びその学習成果を達成するための学習活動を検討する。達成可能な学習成果が明確になった場合、

授業の目的及び目標を設定することが可能になるのではないかと考える。学習者のニーズを踏まえて、本研究は以下の節のとおり達成可能な学習成果、及び実施可能な学習活動の見解を述べる。

7.3.1 学習者のニーズを踏まえた可能な学習成果

日本国内で異文化接触場面に必要な日本事情の実践を具体化する場合、異文化に対する姿勢を養うことを授業の目的とすることが考えられる。異文化という用語は文化がそれぞれ異なるという意味でもあり、世界には様々な文化があり、共通点があってもそれぞれ相違点もあることを意識しなければならない。つまり、文化は多様であり、人は個人によって特性が異なるという見方をしなければ、ステレオタイプや偏見、過剰一般化等に陥りやすくなるだけでなく、異文化背景をもつ相手と円滑なコミュニケーションを行うことも困難となり、その相手との対人関係の構築にも悪影響を与える危険性がある。そのため、異文化の背景をもつ相手とコミュニケーションを行う際、この相違点を理解しようとする姿勢を養うことは、異文化理解教育にほかならない（福島 2018）。こういった多様な見方が異文化理解に必要であることは、多くの先行研究で指摘されている（川上 1999；酒井 2014；河野 2000；^{まがわ}牲川 2002）。

異文化理解の定義は様々あるが、異文化に対する姿勢を養うというコンテキストで考えると、研究背景で述べたように、鈴木（2016）はお互いに異なる文化を知り敬意を払わなければならないとしている。そのため、インドネシア国内の日本事情教育においても、異文化背景を持つ相手を尊敬しようとする姿勢を養う学習方法の開発が必要である。人は自文化に肯定的な姿勢を持つのに対して、異文化には否定的な側面がある（木谷、2009）ため、外国語教育ではこういった否定的な側面を取り除く必要がある。したがって、ステレオタイプや偏見など異文化に対する否定的な姿勢を取り除く有効性がある批判的思考（Byram et al., 2002；Annencova & Domysheva, 2020）を基に、日本事情に関わる事柄を批判的に分析する学習活動を行うことも1つの学習方法として考えられる。

批判的分析の方法についての詳細は次節で述べるが、本節ではその批判的な分析の学習活動を行うことによりどういった成果をもたらすのかという点に関して、いくつかの

先行研究の見解を述べる。例えば、Bennet (2004) は、批判的思考は異文化への気づきを促すために必要なものであり、異文化に対する批判的思考がないことは、母国の文化中心主義の一つの兆候だとしている。なお、小玉 (2018) は、批判的思考は異文化適応のために必要だとしている。この点を踏まえて、日本国内で実践されている日本事情教育と比較すると、日本国内では異文化に対する気づきのきっかけを促すために、日本人学生と多国籍留学生が合同授業においてインタラクティブな学習活動を行っているのに対して、JFL 環境であるインドネシアの場合は、学習者が求める学習内容を学習者自身が批判的に分析する活動をすることで達成が可能だと考えられている。

批判的思考力は異文化接触に必要な他の姿勢にも関わっている。例えば、Pourghaz et al. (2017) は、批判的思考力と寛容性⁷¹には相関関係があるとしており、多文化教育の分野においてこの相関関係があることが検証された (Aslan & Aybek, 2020)。そのため、批判的思考力を養う日本事情は、異文化に対する寛容性を養うことに繋がる。UNESCO (2005) はこの寛容性を、文化の多様性や様々な表現の仕方等を許容し他者を尊敬する姿勢であり、人間として同様の権利や基本的な自由を各人が持つことを意識する姿勢であり、母国の文化に基づく価値観を持つことを尊敬する姿勢だと定義している。

異文化に対し多様な見方をすることは異文化に対する柔軟な姿勢とつながったということ、酒井 (2014) が指摘している。酒井は、自分の見方や考え方を批判的にとらえるためには、自分の見方及び考え方にも理由付けや表現する学習活動の展開が必要だとしている。つまり、こういった多様な見方は批判的思考とも相関関係があるのである。無論、文化背景が同様であるとしても、第2章で述べたように、相手を個人として見る際には、個人は個性を持つということ、複数の個人からなる社会といった領域を考える際には、社会は多様であることに気づくべきである。そのため、日本事情教育で養う姿勢は、こういった相違点を認識して尊敬することにより、異文化背景を持つ相手に対し寛容性や柔軟性、文化に対する見方を養う教育につながる。

⁷¹ 寛容性とは、異にするものに対する寛容な姿勢である。

異文化に対する寛容性を持つことと、異文化に対する感受性をもつことに相関関係があることは、Tuncel & Parker (2018) によって明らかにされている。また、鈴木・斎藤 (2016) は、寛容性は感受性のみならず、柔軟性とも相関関係があるとしている。柔軟性は、異なるものに対し柔軟に対応する姿勢を指す (細川 2000)。柔軟性を育成するためには、人同士には異なるところがあることを認識することが最初の一步であるとされる。異文化に対する柔軟性を持つと、世界中のどこでも暮らすことができる「強固で柔軟な自己アイデンティティ⁷²」を有する人材として活躍できる (細川 2003)。

7.3.2 ニーズを踏まえた学習成果に必要な学習活動

前節で述べたように、批判的な分析を行うことにより、異文化接触場面における相互作用を行うために必要な姿勢を養える可能性を述べたが、ここでは批判的な分析を行うために考えられる方法を述べる。批判的分析は、哲学者、教育哲学者、教育心理学者、教育学者、成人教育の専門家等により定義や展開がなされているが、本研究では異文化接触場面に対する思考力及び姿勢を育成することを重視する。そのため、本研究における批判的思考の捉え方は、物事を自分の視点からのみで捉えることではない。しかし、学習者は他の視点からも考え、根拠をもって物事について納得できる推論を探る (Willingham, 2007)。Willingham (2007) は推論 (Reasoning)、判断及び決定 (Making judgment and decision)、問題解決 (Problem solving) と、批判的思考のタイプを 3 つに分けている。そして、Willingham も批判的思考の特徴として、有効性 (Effectiveness)、新規性 (Novelty)、自己方向 (Self-direction) の 3 つを述べている。有効性は、一面のみの視点から物事を見ること、自分の考案を支持しない新根拠を確認しないこと、合理性よりもパッションを基に推論を行うこと、根拠なしに意見を述べる、といった様々な落とし穴を回避することにある。新規性は、類似した問題・課題を類似した方法で解決するのではなく、新たな方法で挑戦し解決しようとすることである。最後に、自己方向とは、批判的に考えることにより自分の方向を見つけることであるため、

⁷² 「強固で柔軟な自己アイデンティティ」とは、自分のアイデンティティを持ちながら、異文化環境に解き込もうとする姿勢を指す。

教師によって特定の方向に指導されるものは、批判的思考だとは言えない (Willingham, 2007 p. 11)。

批判的思考の手順は、解釈 (Interpretation)、分析 (Analysis)、評価 (Evaluation)、推論 (Inference)、解説 (Explanation)、自己制御 (Self-regulation) であると Facione (2020) は述べている。解釈は状況、データ、出来事、判断、仕来り、ビリーフ、手続き、クライテリア⁷³を理解して表現することであり、分析は意見、情報、理由、判断、ビリーフ等を表現する。そのため、解釈は物事についての記述・発言、問い、説明等との関連性を確認する活動となる。評価は他者の知覚、経験、状態、判断、ビリーフ、意見、質問等を支持する推論及び関連性の信用性を評価する活動である。推論は発言・記述、原理、証拠、判断、ビリーフ、意見、概念、解説、質問、データ等から、適正性及び関連性がある結論及び推測・仮説や推定を行うことである。解説は納得できる論証を果たすために、根拠、概念、方法、批評、コンテキストへの配慮に基づいた推論を示すことである。最後に自己制御は、個人が意識的かつ認知的な活動、その活動の要素及び結果の推論、モニタリングを行い、特に分析に応用することである。また、自分の推論に問いかけ、確認、検証あるいは推論を行い、その結果を修正することである。さらに、批判的思考を起動するためには、以下の表 7.3 のような問いかけが必要であると Facione は指摘している。

表 7.3 批判的分析のガイドライン

解釈	これはどういう意味？ なにが起きている？ これはどのように理解すればいい？ これを特徴づけ、カテゴリー化、分類を行う最良の方法は何？ このコンテキストの中に、それを言う・する意図・背景は何か？ これを理解するために何が必要か？ (体験、感情、記述等)
分析	それを主張した理由を聞かせて！ あなたの結論は何ですか？何を主張しているのですか？ どうしてそのように思う？ 賛否の理由は何か？ その結論に納得するために、どのような推測を行うべきか？ その主張・結論の根拠は何か？
推論	これまでに知っていることを考えると、どのような結論が言えるのか？

⁷³クライテリアとは現象や事柄等を判断するための基準を指す。

	<p>これまでに知っていることを考えると、何を除外できるのか。 この根拠はどのような意味か？ この結論に納得できる・できない場合は、何が変わるのか？ この質問に答えるためには、どのような情報を補足すべきか？ これに納得することは、自分にとって今後何を意味するのか？ そのような方法で行うと、どのような結果が得られるのか？ まだ試していない方法は何か？ 他の選択を考慮し、到達点を見よう！ 回避すべき求められない結果はあるのか？</p>
評価	<p>この結論の信頼性は低いのか？ どうして他者はこの結論に納得すると思うのか？ この理由は本当に強いのか？ 自分の視点を持つよね？ 結論に自信を持つために、どのような推論がなされているのか？</p>
解説	<p>観察・分析から何を発見したのか？ どのように分析が行われたのかを聞かせて！ どのようにその解釈に到達したのか？ もう一度推論を聞かせて！ どうしてそのように思うのか？ この判断・結論がなされるまで、どのように説明できるのか？</p>
自己制御	<p>この点において、自分の立場がまだ漠然としているとしたら、もっと確実にできるのか。 方法は最良の方法なのか、その方法に基づき、プロセスは正確に行われたのか。 結論としてコンフリクトしている二つを調整できるのか？ 根拠は本当に最良なのか？ 納得する前に、欠けていることがなかったのか？ 様々な定義があるため、複雑だ！ 最終の判断を行う前に、確実な根拠にあたるのか？</p>

(Facione, 2020 p. 8 筆者訳)

表 7.3 の内容を考慮すると、例えば「日本人は曖昧だ」といったイメージを学習者が批判的に考えるためには、上表の質問を基に分析を行っていくことが必要である。分析の結果を学習者に書かせ、教師はそれを確認し、アドバイス等を行うことで、批判的思考を主な学習活動とする日本事情となる。分析の結果を他の学習者と共有し合い、その結果をさらに内省することにより、メタ認知的活動が行われる。これは細川 (2003, p. 7) が「教室空間の外と内で様々なインターアクションを行い (教室外インタビューと教室内ディスカッション)、その結果を他者に語り、また他者からコメントをもらって原稿を書き直すことで自己の内省を高めていく」と述べたように、メタ認知だけでなく、自己内省の向上にもつながる。この点を踏まえると、インドネシアでは日本国内のように

日本人学生との合同授業を行うことは困難であるが、学習内容を批判的に分析することにより、異文化に対する肯定的な姿勢を養うことは可能である。

7.3.3 学習成果と活動を踏まえた目的及び目標の設定

学習内容を批判的に分析することにより、批判的思考力を養うだけでなく、異文化接触場面における相互作用に必要な姿勢を養えることが明確となった。そのため、異文化接触場面に必要な日本事情科目の目的及び方法は、以下のように設定することが可能である。

「目的」

日本事情に対する批判的思考を養うことにより、感受性を高め、より柔軟かつ寛容な態度を持ち、異文化接触場面において肯定的かつ能動的に振る舞おうとする姿勢を持てるようになる。

「目標」

- ① 異文化接触場面に関わる日本事情を批判的に分析することにより、柔軟かつ寛容な態度を持ち、異文化接触場面において能動的に振る舞おうとする姿勢を持てるようになる。
- ② 日本事情に関する事柄について、自他の視点から考えられるようになる。
- ③ 日本事情を批判的に考えることにより、異文化に対するステレオタイプの見方が取り除けるようになる。

7.4 学習コンテンツの開発

学習内容の開発に関しては、学習者の姿勢・態度、ニーズの適切さ、経験及び背景といった学習者への配慮、問題発見・分析・解決及び方略とスキルの発展といった学習者への配慮が必要である。また、異文化接触場面に関わることを中心とした学習概念の提供、及び批判的な社会への認識といった社会的コンテキストへの配慮、状況に合わせたタスク、多様なロール及びグルーピング、多様な活動及びその目的といった活動・タスクタイプへの配慮、最後に教材の特殊性かつ多様性への配慮も行うべきである (Graves, 2000 p. 156)。本研究では、学習者への配慮として、学習者が授業前にその日のテーマ

について何を知っているのか、授業で学習活動を行った後にそれがどのように変わったのか、そういったプロセスを教師が観察し支援すべきだという見解を述べた。無論、学習者のニーズに合わせた学習内容も、学習者への配慮の一つである。また、他の学習への配慮は、学習者が在留日本人とよく接触するインドネシア人にインタビューを行うことにより、問題を発見しその問題を批判的に分析することで、学習者なりの方略及び解決策を開発するチャンスを与える学習とすることである。社会的コンテクストへの配慮は、実際の日本人との対人関係が主な学習内容であるため、学習者の環境において、日本人との対人関係をどのように構築するかという点を批判的に分析することである。活動・タスクタイプへの配慮は、本研究では教室内と教室外の活動に分けられている。教室内の場合は、学習者が対人関係に関わる理論的な側面を学習し、それを基にインドネシアで日本人との接触経験がある人にインタビューする項目を作成するといった活動が可能である。そのインタビューの結果を分析し、その分析結果を学習者同士で共有し合う活動、自己内省等も実施できる。教室外の場合は、インドネシアにおいて日本人と日本語で対人関係を構築・保持している人へのインタビュー、日本企業等への訪問、教室外で行える宿題及び課題等を設ける、といった活動である。最後に、教材の特殊性は、実用性との繋がりを意味している。つまり、インドネシアで日本人に接触する人にインタビューを行ったり、日本的なルールを設定した日系企業等へ訪問したりすることは、特殊性への配慮である。教材は、例えば「対人関係」、「マナー」等に関わるコンテンツに関して教室内で理論的な側面を学習するために用いることが考えられる。しかし、実際に実用性と関連付けて分析を行うためには、インドネシアで日本人とよく関わる人にインタビューを行う活動とも関わっている。この点は、特殊性及び多様性だけでなく、活動・タスクタイプへの配慮にもなっている。

7.5 評価デザイン

7.5.1 学習記録開発

ここでの評価は、科目の目的及び目標に対する評価を指す。前節では、批判的思考力と異文化接触場面に必要とされる様々な姿勢の関連性を述べた。現状では、一つの評価方法で全ての姿勢を測定することが可能なツールは未だ開発されていないため、主な学

習活動で養う批判的思考力を評価の対象とすることも可能だと考えられる。また、異文化接触場面に必要な姿勢に関しては、異文化理解や異文化コミュニケーション教育に多く応用されている、Bennet (1993, 2004) が開発した異文化感受性発達モデル⁷⁴で評価することも可能である。

批判的思考力を評価する方法として様々なものが考えられるが、加藤 (2009) は自己評価及び学習者同士の相互評価を行ったことを報告している。ただし、日本事情科目における主な評価者は担当教師であるため、学習者の知覚や考え等は教師が評価をし、相互評価はディスカッションといった学習者同士が行うパフォーマンスを対象として評価を行う、ということも可能である。

ドキュメント分析の結果と学習者のニーズ分析の結果を総括的に検討した結果、日本事情科目に求められるのは、様々な事柄に関する知識を学習者が獲得することではないことがわかった。しかし、前節で述べたように、本研究の結果を基に開発した日本事情科目では、批判的思考力、多様な見方、寛容性、柔軟性、感受性といった異文化に対する姿勢・能力を育成することとなる。毎回の授業で、学習者が求めている内容を学習するプロセスにおいて、学習者の知覚や異文化に対する考えが変わることが期待される。そのため、教師は学習者が一回の授業を受講する前と後の相違を確認する必要がある。この活動を行うためには、自由記述の振り返りシートといったツールが必要となるが、これは形成的な評価のツールとして扱えるという側面もある。国際交流基金 (2006) は、図 7.1 のように「振り返りシート」の活用を勧めている。しかし、全ての姿勢を一つのシートで評価することは不可能であるため、全ての能力・姿勢を評価する方法の開発が求められる。ただし、これに関しては開発と試行錯誤の繰り返しが必要であるため、ある程度の時間が必要である。そのため、現在のようにそういった評価のツールが未開発の場合は、その能力・姿勢の中で教師にとって最も評価しやすい対象となった評価項目は何かを検討する必要がある。教育が行われる前後で学習者の姿勢がどのように変化したかを尺度といった測定法を用いることで、教育の有効性を評価することが可能である。

⁷⁴ 異文化感受性発達モデルとは、英語では *Developmental Model of Intercultural Sensitivity (DMIS)* と称され、六つの段階で自文化中心主義と文化相対主義を区別することが可能な尺度である。

本研究の結果に基づいた科目の展開では、異文化接触場面における現象について、学習者が自分の視点で批判的に分析を行うことが主な学習活動となっているため、この活動を評価の対象とすることとなる。

図 7.2 授業の振り返りシート A

図 7.2 の振り返りシートは、授業の前後で学習者が持っている日本事情のイメージを確認することのみ可能であるため、学習者の批判的思考の論理性が見られない側面もある。そのため、図 7.2 のシートのように、担当教師が確認したいことを書かせる振り返りシートの形式を開発することが必要である。本研究に基にした授業の開発は学習者が日本事情の学習内容について考える論理性を確認し、毎回の受講の前後で授業のテーマについてのイメージを確認する形成的評価のツールとして、次の図 7.3 に示すように振り返りシートを開発できると考えられる。

「日本事情」学習記録
今まで〇〇についてどう思いますか。
自分で自他の視点で分析した後に、どう思いますか。
どうしてそのように思いますか。
他者と共有し合って、どのような内省点がありますか。
今回の学習結果はどのように活用できると思いますか。
教師のコメント

図 7.3 授業の振り返りシート B

図 7.2 と図 7.3 の振り返りシートは、学習者が自己評価を行う側面があるため、学習者が行った自己評価を教師がさらに評価するというのは、まさにメタ評価に相当する（細川 1999）。こういったメタ評価を行うと、学習プロセスと結果がより明確に見える。日本事情の授業で行う学習活動は、日本事情に関わる物事を批判的に分析するものであるため、批判的な記述をする欄が重要である。また、その批判的思考から結論を引き出せる工夫も必要である。例えば、対人関係や他者との付き合いに関して、脇田（2000, p. 33）は「xx人や日本人と構えるのではなく、一人の人間としてつきあうことが大切」だといった学習者の声が複数あることを述べている。したがって、批判的思考を養うには、学習者が自他の視点で日本事情に関わる物事の分析を深く行えた成果として、結論から姿勢の変化に関わる記述が見えるように、学習活動とつなぎ合わせる学習記録や振り返りシートの形式を開発する工夫も必要となる。例えば、本研究の背景でも示したように、「日本人は曖昧だ」と感じたインドネシア人のケースが多数あった。学習者がこれを批判的に分析した結果、「自分達のはっきり言うように、日本人がはっきり言わないのは文化的な価値観に基づいているかもしれない。日本人同士なら通じるかもしれないが、自分が日本人の言うことが曖昧だと感じるなら、もう一度確かめてもいいかもしれない」という意見が出たとする。これも担当教師がフィードバック等を与えた

成果であり、学習者が自分の視点で考えたり自分の価値に基づいて判断したりするのではなく、相手の視点からも考えてみることにより、異文化をより客観的に捉える習慣を身につけていくことが期待できる。

7.5.2 ルーブリック開発

以上のように、批判的思考を養う学習活動は日本事情に関わる事柄を批判的に分析する活動であり、それを測るための評価が当然必要となる。これに関して Ventura et al.(2017) は、ライティングタスク (writing tasks)、シミュレーションタスク (simulation tasks)、コンセプトマップタスク (concept map tasks) という3つの方法を挙げている。ライティングタスクはその名のとおり、学習者が記述式で物事に対する視点、推論、結論、問題解決等を書く課題である。次に、シミュレーションタスクは、現象や問題を分析して解決するためにシミュレーションを行う課題である。最後に、コンセプトマップタスクは、一つのコンセプトや物事等を幾つかの要素に分け、各要素の繋がりを分析していくことにより問題を解決する方法である。本研究の結果に基づいた日本事情教育は、インドネシアでは初の試みとなるため、他の方法よりライティングタスクが推奨される。また、ライティングタスクにおける批判的思考のルーブリックは、以下のように4つの観点が欠かせないことを Ventura et al.は述べている。

- ①明確な視点をもって理由や推論を述べる。
- ②物事を他の視点から分析する。
- ③その視点の長所及び短所を確認する。
- ④その視点に最良である理由や証拠等をつける。

(Ventura et al., 2017 p.32 筆者訳)

上記の観点はルーブリックを作成する際に最低限必要となる要素であり、さらに観点を展開し、批判的思考力を評価するためのルーブリックは複数存在する。例えば Washington State University (2006) は、以下の表 7.4 のように、批判的思考を評価するためのルーブリックを開発している。

表 7.4 批判的分析のルーブリック

観点	レーティングスケル					
	初歩		進歩途上		上達	
課題認識・整理	問題・課題・テーマをまとめようとせず、問題・課題の認識・識別ができていない。		多方面を通して、問題・課題の整理・まとめが不適切である。ニュアンスや重要なポイントが欠けている、または軽く扱われている。		挑戦と創造、問題の側面等を明確に識別・認識することができる。課題を分析するために、その関連性を認識している。	
	1	2	3	4	5	6
コンテキスト及び知覚の認識	自己中心的、または集団中心的に問題や課題に取り組んでいる。他のコンテキストと関連付けられていない（文化、政治、歴史等）。 分析は絶対性に基づいており、自分のバイアスに基づいていない。 コンテキストや表面的な仮定、及び根底にある倫理的意味を認識していない、或いは表面的な部分のみ認識している。		方法は限られているが、コンテキスト及び知覚を探索していることを提示している。 分析にはいくつかの外部検証が含まれているが、主に確立された根拠に依存している。 物事に関する知覚を多く提示しており、含意に配慮していることを提示している。		聴衆の評価も含み、問題を明確な範囲・コンテキストで分析している。他の不可欠なコンテキストにも考慮している。 コンテキストにバイアスが含まれているとしても、分析には観点のバイアス、その複雑性および価値を認識することができる。 コンテキストの影響を識別し、知覚に疑問をもち、問題における論理的な側面に対処している。	
	1	2	3	4	5	6
自分の視点、仮説または立場の提示	独自性が欠けている配慮を基に、立場や仮説を提示している。 単一の視野やリソースを基にした議論を展開しており、自分の立場と問題との位置づけができていない。 自分の考えや意見、仮説が明らかではない。		自分の立場は他者の考えを取り入れる側面はあるかもしれないが、他者の意見を認め、否定したり統合したり拡張することも含める。 辻褄が合わない立場や仮説を提示している。 他の見解に触れず自分の立場を正当化している、或いは表面的なところにとどまっている。 自身の立場は明瞭になされているが、矛盾しているところもある。		知識を構築したり、疑問を投げかけたり、客観的な分析と直感を統合したりすることにより、自分の立場を提示している。 問題に対する自分の立場を適切に特定し、経験からサポートを引き出し、割り当てられた情報源からは入手できない情報を提示している。 異なる見解または解釈を予測したり統合したりすることにより、自分の見解または仮説を明確に提示し、正当化している。 自身の立場または仮説は、明確な展開を通して洗練され、統合的な思考を示している。	
	1	2	3	4	5	6
支持するデータと根拠を分析する	データの根拠、リソースを評価するスキルがない。 疑問を持たずに同じ情報をくりかえし、或いは理		必要な情報を得るため、情報を検索・選定・評価するスキルを持っている。 根拠の使用及び選択は条件を満たしている。		検索や根拠の選択・情報源を評価するスキルがある。また、情報源の独自性を識別できる。 証拠とその情報源の適切性を試す。その正確性、関連	
	1	2	3	4	5	6

	<p>由もなく根拠を否定している。</p> <p>原因と相関関係を収縮させ、証拠とアイデアを不順に提示している</p> <p>データ/証拠または情報源は、単調或いは不適切、またはテーマに関係しないものである。</p>	<p>意見から現実を見分け、補足情報が適切ではなくても、根拠によるバイアスを認識できている。</p> <p>情報提供に欠陥があるかもしれないが、関連性と因果関係を識別できる。</p> <p>提供したデータ・根拠、または情報源は適切である。</p>	<p>性、および完全性に疑問を投げかけている。</p> <p>現実はどうのように形作られたかの理解を示しているが、意見を確かめられないところがある。選択バイアス⁷⁵を含み、バイアスを認識できる。</p> <p>相関関係は、それぞれの考えからの因果関係とは異なる。議論の順序は、それぞれの考えの明確な相識化、重要性と影響を反映している。</p> <p>評価の適切性や課題の割り当て、自分の関心を満たすために、情報の必要性が明確に定義されたり統合されたりしている。</p>			
	1	2	3	4	5	6
他の視点からの思考及び立場	<p>単一の視点しか持っておらず、他の視点から考えることができていない。</p> <p>疑問をあまり持たずに、単一の考え或いは限られた考えのみを応用している。他の考えがあっても、統合されていない。</p> <p>取り入れられた考えは、絶対的性或いは納得ができそうなもののみである。それぞれの考えを試したり対処したりすることを控えている。</p> <p>他の視点を持っているように見える、或いはそれを誤って提示している。</p> <p>視点の統合はほとんどなく、他の視点をとる根拠もほとんどない。反省や自己評価の証拠はない。</p>	<p>分析を満たすために他の視点と関連付け始める。</p> <p>大雑把ではあるものの、他の視点や考え等を統合・比較している。情報は限られた方法でも統合・検証された。</p> <p>挑戦的な考えを暫定的に、または葛藤を誇張する方法で関与させる。別の見解を軽率に逃している。</p> <p>他の視点の分析は思慮が深く、大幅に適切である。</p> <p>他の視点を分析することは概ね的確にできている。自己評価を行った根拠が見える。</p> <p>様々な方法で知識を認識したり、統合したりする。内省及び自己評価の証拠がいくつかある。</p>	<p>分析を適切にするために、外部の情報から引き出された他の視点と補足としての多様な視点と対処している。</p> <p>視点は様々な情報源から完全に統合された。あらゆる類推が効果的に用いられる。</p> <p>自分や他の考えが複雑なプロセスの判断・正当化を通して統合される。他人の意見を尊重しながら、自分の意見を明確に正当化する。</p> <p>他の立場を分析することは適切で、敬意を表している。</p> <p>様々な懲戒および認識論的な方法の知識を統合させる。キャリアと市民の義務に関連づける。反省と自己評価の根拠が見える。</p>			
	1	2	3	4	5	6
結論、含意、結果の評価	<p>結論、含意、結果について識別できていない。</p> <p>また、結論は単純なまと</p>		<p>結論として、単一の分野・問題を越えた証拠を検討した結果を提供している。他者や他</p>		<p>結論、含意、および結果について、拡張し議論している。コンテキスト、仮定、デ</p>	

⁷⁵ 選択バイアスとは全体の様子を反映していない偏りのことを指す

	めにすぎないものである。 結論は絶対的または外部の有識者に頼るところが大きい。	の情報に影響を与える可能性があることを示している。 結論を相対的なものとして提示し、結果のみに関連させている。 含意には、結論のための漠然とした言及が含まれている場合がある。	一タ、および証拠を考慮している。自己主張のバランスが取れている。 結論は、コンテキスト内で利用可能な最良の証拠として認定されるものである。結果は配慮に基づき、統合的である。結果は適切に展開されたものであり、曖昧性に配慮している。			
	1	2	3	4	5	6
コミュニケーションの有効性	漠然とした表現が散見している。 文法、構文、他の錯誤は読み手の気を散らしている、または同じものが繰り返されている。校正が不足していることが伝わり、不確定または適切ではない。 分析は焦点が定まっておらず、組織化も不十分であり、合理的な関連付けも欠けている。形式が確定されておらず一貫性もないため、読み手の気を散らしている。 適切に用いられている情報源や引用は、僅かしかない。		全体的には表現が読み手の気を散らさない。 アспектやボイスに困難な側面もあるとしても、読み手の気を散らす程度のものでなく、繰り返されているものもない。 基本的な構成が見え、各展開は考えやアイデアと関連している。時には一貫性がなくても、形式は適切に用いられている。 多くの参考文献や情報源を引用し、それらを的確に用いている。		コミュニケーションのアイデアを表現するために、言語は的確かつ有効に用いられている。時には微妙かつ雄弁な場合もある。 読み手にとって適切なスタイルが選定されおり、誤用が最小限である。 構成は明瞭で、各アイデアの展開から、表現力を高めていることがわかる。表現における他の構成との誤用がわずかである。 様々な文献を引用し、それらが適切に用いられている。法律や経済、社会等のコンテキストと関連付けたことの理解を表している	
	1	2	3	4	5	6

(Washington State University, 2006 筆者訳)

以上、毎回の授業で行える形成的評価について述べたが、総括的評価としては、日本事情で学んだことを具体化して再表現させるタスクを設けることが考えられる。本研究で選定する学習内容は「対人関係」に関わる学習内容であり、日本事情学習が行われるJFL環境であるインドネシアでは、その学習内容と背景をつなぎ合わせる学習記録やエッセイの形式を開発する必要がある。例えば、「自分が日系企業に勤務する場合、日本人とどのように対人関係を築くか」というテーマを設定し、批判的分析の原理に従うルールを設ける。このエッセイの評価では、批判的な分析のルーブリックだけでなく、学習者の異文化に対する姿勢を測定する必要も出てくる。これは、異文化に対する肯定的な姿勢を養う試みを行ったとしても、全ての学習者が異文化接触場面を肯定的かつ能動

的に行おうとする姿勢を身に着けられるとは限らないためである。例えば、異文化コミュニケーション教育を受講した学生は、受講していない学生より感受性が高い（Tuncel & Parker, 2018）。また沼田（2011）は、異文化理解を積極的に行おうとする受講者、異文化理解が十分にできていない受講者、異文化理解をすることに対して抵抗感を持つ受講者に分かれたという実践の結果を報告している。この現象からは、実践の結果を総合的に評価するために、学習成果として学習者の姿勢を段階的にカテゴリー化する必要があると言える。この点において、例えばBennet（1993）は、異文化に対する感受性を測定するために、6つの段階から成り立つ異文化感受性発達モデル（Developmental Model of Intercultural Sensitivity/DMIS）を開発した。表7.7に示すこのモデルは、多くの異文化教育の実践で使用されており、本研究に基づいた科目にも応用できると考えられる。

表 7.7 Bennet（1993）の異文化感受性発達モデル

段階	カテゴリー	特徴
第1 否定（denial）	自文化中心主義	異文化に気づかない、興味がない、相違を認知できない
第2 防護（defense）		異文化の存在をステレオタイプの・否定的に認知している
第3 最小化（minimization）		相違点よりも共通点に注目し、相手に同化を期待している
第4 受容（acceptance）	文化相対主義	異文化についての一般的認識を持つが、全て好意的であるとは限らない
第5 適応（adaptation）		発言や行動が社会文化的に的確であり、視点の転換が可能である
第6 統合（integration）		異なった文化の世界観に自由に入出入りできる段階

（Bennet, 2004 pp. 1-8 筆者訳）

異文化に対する批判的思考力及び肯定的な姿勢は、一学期間で養うことが可能であるのかという点に疑問を持つが、科目の狙いとしては、一学期終了後に学習者が表7.7の第4段階である受容の姿勢を持っていることを最低限とする。なお、第4段階を達成し

ていない学習者がいたら、授業は完全に失敗したという意味ではなく、それを学習者の背景や他の要因等とつなぎ合わせて分析を行うことにより、内省し改善策を考えた上で次の実践に応用できるという側面がある。

7.6 学習内容の組織化及び授業のコンセプト化

科目の組織化は、目的及び目標と一連の学習内容、学習方法、学習者のニーズ、教授法及び教材等、ビリーフ、担当者の経験、コンテクストに関わっている（Graves, 2000）。これらを構成化した結果は、シラバスの開発につながる。本研究では、学習者のニーズを基に日本事情の学習内容を限定し、日本語能力を養う日本語専攻科の目的との関連性を考慮してコンテンツを選定する。Graves はトピック、テーマベースのワールドトリップ等に基づいて学習内容を選定した例を挙げており、無論教師の個人的な判断で学習内容を決めたところもあった。

学習内容のコンセプト化は、Graves(2000)が述べたように、コースデザインにおいて最初の段階である。そのため、本研究では学習者が自分のニーズに合った日本事情の学習内容を学習し、更にインドネシアでの異文化接触場面に関わる日本事情に目を向けることにより、卒業後に関わるかもしれないインドネシアにある日本事情を自分の視点で発見できるきっかけが得られる。科目の受講後には、学習者が自ら異文化に対する物事を批判的に分析し、ステレオタイプの異文化を捉えずに、より肯定的かつ積極的に接触を行おうとする姿勢を持つことを狙いとしている。教材は、テキストといった理論的な教材をリソースとして用いることと、インドネシアで日本人とよく接触する人にインタビューするといった人的リソースを活用することである。そのため、この学習を円滑に行うためには、日本人とよく接触するインドネシア人協力者が必要である。協力者を募集する活動としては、インドネシアで日本人や日本語、日本に関わる職に就いた専攻科の卒業生に協力を依頼することが最も現実的な方法である。インドネシアでは、日本語専攻科に在籍している教師と卒業生同士との関係をお互い保持し合うために、各日本語専攻科には卒業生会といったコミュニティが設けられているため、そこから募集を行うこともできる。より確実な方法として、教師が直接卒業生に依頼を申し出ることにより、協力可能な人数をより速やかかつ的確に把握することが可能であろう。協力が得ら

れることにより、学習者が理論的な側面だけでなく、インドネシアの異文化接触場面がどのようなものなのかを分析するチャンスも得られる。本研究の学習内容のコンセプト化は、表 7.6 及び表 7.7 のとおりである。

表 7.6 学習・学習者へのフォーカス

異文化に対する姿勢の養成	異文化接触場面における問題の分析力	学習方略
偏りなく、異文化接触場面において肯定的かつ能動的に振る舞おうとする姿勢	自分の視点で問題を発見して分析することにより、問題発見・解決力を養う	インドネシアの異文化接触場面において日本人と関わる人にインタビューし、その結果を批判的に分析して学習者同士で共有しあう。更にその結果を内省する。

表 7.7 社会文化的コンテクストへのフォーカス

実際の対人関係の発見	キャリアとの繋がり	学習方略
対人関係における理論的な側面を理解するだけでなく、学習内容をインドネシアでの異文化接触場面とつなぎ合わせて分析することにより、実際の日本人との対人関係を発見して理解する。	日本語、日本人、日本に関わる職に就いた人にインタビューした結果を批判的に分析することにより、ステレオタイプをなくし、インドネシアで日本語を使うキャリアのイメージを形成する。	インドネシアの異文化接触場面において日本人と関わる人にインタビューし、その結果を批判的に分析して学習者同士で共有しあう。更にその結果を内省する。

上記の学習コンセプトを具体化するためには、シラバス作成を行う必要がある。シラバスは教育機関によって形式が異なってくるが、科目の目的・目標、毎回の学習内容と活動または評価方法、教材等の情報を提供することが一般的である。Nunan (1988) が述べたように、シラバスデザインを行う際は、学習内容の選定及びそのグレーディング⁷⁶を行うことが基本であるため、選定及び順序の構成を表現するのはシラバスだと言えよう。科目の目的及び学習内容の選定として、表 7.8 のような例が挙げられる。なお、

⁷⁶ 難易度を基準にして学習内容の順を決めることである。

多くの日本語専攻科が設定しているように、90分（2単位）授業を想定したものである。

表 7.8 シラバスの例

科目名	日本事情
科目の目的及び目標	<p>「目的」</p> <p>日本事情に対する批判的思考を養うことにより、感受性を高め、より柔軟かつ寛容な態度を持ち、異文化接触場面において肯定的かつ能動的に振る舞おうとする姿勢を持てるようになる。</p> <p>「目標」</p> <p>① 異文化接触場面に関わる日本事情を批判的に分析することにより、柔軟かつ寛容な態度を持ち、異文化接触場面において能動的に振る舞おうとする姿勢を持てるようになる。</p> <p>② 日本事情に関する事柄について、自他の視点から考えられるようになる。</p> <p>③ 日本事情を批判的に考えることにより、異文化に対するステレオタイプの見方が取り除けるようになる。</p>
科目の区分	日本語学科必修
担当教員	〇〇 (メールアドレス)
開講学期	2021 前期
科目名	日本事情
科目の区分	日本語学科必修
開講学期	2021 前期
アサインメント	学習記録 (15%)、受講態度 (15%)、レポート (25%)、エッセイ (35%)、

週	テーマ
1	<p>イントロダクション</p> <p>教師による講義 (70分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 一学期間を通しての目的及び目標、学習活動、課題、評価等、学習記録の記入方法、授業のルール等を学習者に説明する 日本事情の基本概念について説明を行い、異文化接触場면을重視する理由を述べる <p>学習者との質疑応答及び授業のまとめ (20分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業や評価、日本事情等についての質疑応答を行う
2	<p>コミュニケーションスタイルの概念</p> <p>教師による講義 (30分)</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習者に授業前の学習記録を記入してもらう

	<ul style="list-style-type: none"> ● コミュニケーションの基本概念についての説明を行う ● 動画を用いて日本人のコミュニケーションスタイルについての説明を行う <p>課題 (50) 分</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 5 分程度のビデオを見せた後に、学習者をいくつかのグループに分け、動画を見た際の気づきについて話し合う。 ● 話し合った結果について、代表者が発表する <p>授業のまとめ (10 分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 授業のまとめと来週の授業の概要についての説明を行う ● 学習者は授業後の学習記録を記入・提出する
4	<p>コミュニケーションスタイルの観察① (LL 教室)</p> <p>教師によるウォーミングアップ及び課題についての説明 (10 分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学習者に授業前の学習記録を記入してもらう ● 学習者がどのような課題を行うか説明する。 <p>課題の実施 (70 分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 動画を通して日本人の会話を観察し、コミュニケーションスタイルに関わる気づきを書く ● 結果をディスカッションで他の学習者と共有する <p>授業のまとめ (10 分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 授業のまとめと来週の授業の概要についての説明を行う ● 学習者は授業後の学習記録を記入して提出する
5	<p>コミュニケーションスタイルの観察① (LL 教室)</p> <p>教師によるウォーミングアップ及び課題についての説明 (10 分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学習者は授業前の学習記録を記入する ● 学習者がどのような課題を行うかを説明する。 <p>課題の実施 (70 分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 動画を通して日本人の会話を観察し、コミュニケーションスタイルに関わる気づきを書く ● 結果をディスカッションで他の学習者と共有する <p>授業のまとめ (10 分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 授業のまとめと来週の授業の概要についての説明を行う ● 学習者は授業後の学習記録を記入して提出する
6	<p>マナーについての概念とインタビューの準備</p> <p>教師による講義 (40 分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学習者は授業前の学習記録を記入する ● マナーについての基本概念の説明を行う (主に職場におけるマナー) <p>課題の実施 (40 分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 職場で日本人と関わる人にインタビューするための質問項目を作成する <p>授業のまとめ (10 分)</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ● 授業のまとめと来週の授業の概要についての説明を行う ● 学習者は授業後の学習記録を記入して提出する
7	<p>批判的分析 教師による講義（40分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学習者は授業前の学習記録を記入する ● 批判的分析についての基本概念の説明を行う <p>課題の実施（40）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 先週のインタビューの質問項目を考え直し改善する（インタビューは教室外で行うため、授業外の課題となる） <p>授業のまとめ（10分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 授業のまとめと来週の授業の概要についての説明を行う ● 学習者は授業後の学習記録を記入して提出する
8	<p>職場におけるマナー（名前、敬称、挨拶等） 教師によるウォーミングアップ及び課題についての説明（15分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学習者は授業前の学習記録を記入する <p>活動の実施（65分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● インタビューを批判的分析した結果を授業のテーマ（名前、敬称、挨拶等）に関連づけて、学習者同士で共有し合う <p>授業のまとめ（10分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 授業のまとめと来週の授業の概要についての説明を行う ● 学習者は授業後の学習記録を記入して提出する
9	<p>ビジターセッション（日本長期滞在の経験者または日本をよく知っている人とディスカッションを行う） 教師によるウォーミングアップ及び課題についての説明（10分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学習者は授業前の学習記録を記入する <p>活動の実施（70分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 日本長期滞在の経験者または日本をよく知っている人とディスカッションを行う <p>授業のまとめ（10分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 授業のまとめと来週の授業の概要についての説明を行う ● 学習者は授業後の学習記録を記入して提出する
10	<p>対人関係についての概念の説明とインタビューの準備 教師による講義（40分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学習者は授業前の学習記録を記入する ● 対人関係についての基本概念の説明を行う <p>課題の実施（40分）</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ● 職場で日本人と関わる人にインタビューするための質問項目を作成する（インタビューの実施は教室外） <p>授業のまとめ（10分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 授業のまとめと来週の授業の概要についての説明を行う ● 学習者は授業後の学習記録を記入して提出する
1 1	<p>上下関係 教師によるウォーミングアップ及び課題についての説明（15分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学習者は授業前の学習記録を記入する <p>活動の実施（65分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● インタビューを批判的分析した結果を授業のテーマ（上下関係）に関連づけて、学習者同士で共有し合う <p>授業のまとめ（10分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 授業のまとめと来週の授業の概要についての説明を行う ● 学習者は授業後の学習記録を記入して提出する
1 2	<p>内外関係 教師によるウォーミングアップ及び課題についての説明（15分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学習者は授業前の学習記録を記入する <p>活動の実施（65分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● インタビューを批判的分析した結果を授業のテーマ（内外関係）に関連づけて、学習者同士で共有し合う <p>授業のまとめ（10分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 授業のまとめと来週の授業の概要についての説明を行う ● 学習者は授業後の学習記録を記入して提出する
1 3	<p>親疎関係 教師によるウォーミングアップ及び課題についての説明（15分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 学習者は授業前の学習記録を記入する <p>活動の実施（65分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● インタビューを批判的分析した結果を授業のテーマ（親疎関係）に関連づけて、学習者同士で共有し合う <p>授業のまとめ（10分）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 授業のまとめと来週の授業の概要についての説明を行う ● 学習者は授業後の学習記録を記入して提出する
1 4	<p>日本的文化環境の訪問セッション 訪問から気づきに関するレポートを作成することを教室外の課題とする。</p>
1 5	<p>期末試験、エッセイ</p>

7.7 日本事情における担当教師の役割

第4章では、学習者が自分の観点で日本事情を発見すべきだという理論的な理念が得られた。これを踏まえた上で、日本事情教育における教師の役割を再検討したい。また、教室における授業形式は学習者主体のものが求められるが、教師から学習者に日本事情に関わる知識を移転する学習方法は、学習者主体の授業とは言い難い。日本事情の授業を学習者主体的アプローチで行う場合、島崎（2016, p. 183）は、教師は「ファシリテーターや水先案内人としての役割を担い、学習者は自分自身で調べたり、問題解決をすることを通して学ぶ」としている。さらに、大橋・Gehertz（2014, pp. 2-3）は「①タスク目標を設定する、②学習者のレベルに合わせて学習活動を設定する、③教室外の世界に関する情報を提供する、④現実社会でコミュニケーションに必要な言語の確認をする、⑤モニターのフィードバックをする」と、教師の役割をより詳しく解説している。つまり、教師は「教える」、「支援する」に加え、「共生する」ための場を作るために、学習者が自分の日本事情を発見するプロセスにおいてファシリテーターあるいはカウンセラー、コンサルタントの役割を果たすべきであるとされる。また、この学習者主体の授業は、全てを学習者に任せるという意味ではない。細川（1999, p. 58）は、「クラスとして何か一つの目標を設定し、その目標を達成するために、どうしたら良いかを参加者全員で十分に議論し、その活動のあとで、それにふさわしい仕事が、それなりの評価を受けると教師の行うべき役割を解説している。これを考慮すると、教師には専門性が求められることがわかる。細川（2003）はその教師の専門性を次のように述べている。

- ① 思考と表現を活性化する教室活動をどのように設計できるか。
- ② 設計した教室活動空間をどのように組織化できるか。
- ③ 組織化された教室空間での学習者の活動をどのように支援できるか。

細川（2003, p. 8）

細川は、こういった教師の専門性を獲得するために実践を行い、その実践結果を研究という形で分析し、次の実践で活かすことが必要だと述べている。つまり、教師の専門性を獲得するためには、実践を重ねて試行錯誤することが必要だということである。教師が学習者を支援する役割を果たし学習者主体の授業を促すためには、まず学習者が既

に日本事情の事象を持っているという理念を踏まえ、その事象を引き出すことが必要である。ここでの日本事情の事象は日本、日本人、日本社会、日本文化に関わる現象に対するイメージや思ったこと等である。この点において、教師が学習者にいかにして意見を言わせるかが大切なことであり（ケリ 2005）、例えば国際交流基金（2010）が提案したように、「ふりかえり」シートを作成し、学習者が日本事情に関わる一つの事柄について「今まで思っていた」欄と「気づいた・違っていた」欄を作成する。そうすると、教師は学習者が授業前及び授業後に自分自身が持っていた認識の相違点を確認することができ、学習者が何を発見したのか、いかにフィードバックをすれば良いかといった点も見えてくる。以上のような活動により、学習者の日本事情に対する思考を引き出すことが可能となる。

前述のように、教師は文化を固定概念として教えるのではなく、学習者が文化を学習する際に、ファシリテーター、カウンセラー、コンサルタントまたはアドバイザーとしての役割を果たすべきである。例えば、日本人とよく接触する人にインタビューする際に、インタビュー項目を設けるとする。こういった場合、個々の学習者がこれまで日本人や日本人との対人関係に関することを思い返し、思ったことやイメージ等を「振り返り」のシートに書き出し、教師はそれを確認することが可能である。まだ明確になっていないところは、学習者にアドバイスを与える必要がある。例えば、学習者が知りたい情報をインタビューの対象者からより引き出すために、個々の学習者にアドバイスを与える。学習者はインタビューの結果を踏まえてシートに対人関係や日本人等のテーマに関する新しい気づきを書き出し、教師はそれを確認し学習者にフィードバックを与える。国際交流基金（2010）は、学習者が日本事情についてどのように考えているかを表す記述に、学習の動機や関心がより広げられるようなコメントやフィードバックを書くことが大切だとしている。日本語で書いた場合、高寄・都（2016）のように日本語のチェックを行わないのが原理である。最も大切なのは、学習者に自分の気づきや発見等を振り返る動機付けを与えることにより、学習者が自分の成長や変化を理解し、新たな発見を見つけようとする姿勢を養うことである。こういった日本事情教育を目指すのであれば、教師からのコメントやフィードバックは不可欠である。

文化背景が同様の場合でも、他者を個人として見れば、必ず相違点が存在するということを学習者は理解しなければならない。さらに、異文化というコンテクストに入ると、自分自身にとって当たり前だと思っていたことが当たり前ではなく、むしろ世界的に見ると特徴的・個性的な側面を自身が持っていることを認識する。そして、それが世界中の人々にもそれぞれ当てはまることであり、「違うことが当たり前」だという意識をもつことで、異文化に対する姿勢がより肯定的になると考えられる。

教師が母語話者であるか非母語話者であるかは問題ではなく、学習者が他の視点から自他の文化の関連性を見るための補助ができること、「他者性」への好奇心や関心を刺激できること、自分自身や母国の文化を他の視点から見る好奇心を刺激することが可能な教師が必要である (Byram 他 2002)。また、本研究はインドネシアの日本事情教育を対象としているため、教室内の日本事情と教室外の日本事情の架け橋を見つけ、学習環境にあわせた教材を開発することが可能な教師が必要となる。

7.8 考察

Graves (2000)は、ニーズ分析から学習のコンセプト化までのコースデザイン開発の手順を提示しており、可能な手順から始めることもできるとしている。本研究はそれを基にニーズ分析を最初の手順としているため、求められる学習内容が明確となることは不可欠である。学習内容が学習者のニーズを基にしているとしても、日本事情のコースデザインを開発する際には教師の教育理念が関わっている。例えば、目的及び目標の設定を行う際に、従来と同様に教師が知識重視の教育理念を持っているとすれば、教育の目的、学習活動や評価のデザイン等はそれに左右される。本研究の教育理念は知識重視ではなく、異文化接触場面に必要な姿勢の育成を重視するため、目的及び目標となる学習成果は、異文化に対する学習者の姿勢がより肯定的に変化することである。そのため、これらの目的に沿った学習コンテンツの開発、評価デザイン等が必要である。しかし、学習者が日本事情を発見するプロセスにおいて教師がそれを支援するといった役割が明確となるのであれば、教師の主観の影響は減少するため、従来の日本事情と異なることとなる。したがって、学習者のニーズを基に日本事情のコースデザインを開発する際、

学習者の視点を取り入れられるのは学習項目及び学習活動のみに限られており、学習コンテンツや教材開発、シラバス開発等は教師が行うことなのである。

教師は教育理念を知識重視から対人関係に必要な姿勢の育成重視に捉え直した場合、学習者が学習を行う際に実際の日本人との対人関係を分析する活動が必要である。これに関しては宮崎（2000）が述べたように、現地在留日本人とのネットワーク形成も日本事情であるため、これとの架け橋が必要となる。インドネシアにも日系企業等での勤務の関係で日本語を用いながら在留日本人との対人関係を構築している専攻科の卒業生等が多いため、こうした人的リソースを通して実際の対人関係を学習することが可能となる。日本国内の場合だと、日本人との対人関係を学習者自身が実際に構築することは可能であろうが、これが困難なインドネシアの学習環境では、教育的介入が不可欠である。また、対人関係に関わる気づきを促すためには、批判的分析を行うことが主な手段となる。この日本事情の概念を基に授業を開発することにより、大橋・Gehertz（2014）が指摘した教室外の世界に関する情報を提供する必要性を満たすことが可能である。

7.9 まとめ

本研究では、学習者のニーズを基に Graves（2000）が提示した手順でコースデザイン開発を行なった。まず、ニーズ分析により領域が非常に広い日本事情の学習内容を対人関係に関わる学習内容に限定した。また、学習内容の限定により教師の主観が低減できることを検証できた。しかし、全ての面において学習者の視点を基にすることは不可能である。また、これも理念と関わるが、その目的を果たすために行なった学習活動の検討の結果として、批判的な分析の学習活動を行う必要性があることが明確となった。学習活動に関しては、期待される学習の成果を十分に達成できるのかという点も測定しなければならない。そのため、適切な評価方法として、主観的な評価方法のツールが必要であることが確認できた。それらが明確となったときに、シラバスデザイン及び学習内容の組織化が可能となるのだが、このようにコースデザインの開発を行う際に教師の理念の影響が払拭し難いことは否めない。本研究は、知識重視から対人関係に必要な姿勢の育成重視という日本事情の教育理念を捉え直す試みを行なうことにより、社会とよりつながり、実際の生活での活用性がある日本事情教育の枠組みを構築した。

第8章 結論及び今後の課題

8.1 結論

教師から学習者に知識を移転させるという日本事情教育は、80年代後半に日本語教育にコミュニカティブアプローチが普及した影響を受け、その後多国籍留学生のニーズが注目され始めた。それ以来、日本事情はインタラクティブな学習活動を行うことにより、異文化を意識させることを目的とした日本人学生と多国籍留学生が受講する合同授業型の実践のきっかけとなり、現在でもこのような活動が開発されている。日本事情学習では、細川（1999）が日本人との対人関係の構築・保持に関する学習の重要性を主張しており、佐々木（2002）も「他者との相互作用に介在する文化」の学習概念を提示した。こういった日本事情の学習概念は、日本人の個人と個人とのコミュニケーションを行うことを通して学習が可能（森山 2011）であるが、JFL環境であるインドネシアではこの概念を基にした授業を行うことが困難である。

日本事情の分野では、教育の指針、及び学習内容に関わるコンセンサスに未だに至っていないため、研究や実践報告が少数であるインドネシアではどういった日本事情を学習すべきかが不明である。そのため、川上（1999）が述べたように、多くの担当教師が自分自身の想像の日本文化を基に授業を行っているということがドキュメント分析の結果から窺えた。各担当教師がそれぞれの日本事情の学習を設定しているが、実際の生活にその内容がどのように役に立つのかは不明である。そのため、この課題の解決策として、日本事情教育の理念について、これまでの様々な知識の獲得重視から、対人関係に必要な姿勢の育成重視に移行することを提案した。学習者もそれを求めていることから、そのニーズを主な学習内容とし授業を開発すれば、従来と異なる日本事情教育の概念を構築することが可能となる。この点は、90年代以降に日本国内における日本事情教育の変遷をもたらした多国籍留学生のニーズへの注目と同様に、日本事情教育を見直すきっかけとなり得る。

インドネシア人学習者が授業に対して「対人関係に関わる学習内容」を求めていることから、理論的な側面だけを学習するのでは不十分である。学習成果が実際の生活に役

に立つためには、日本人と実際の対人関係を授業に取り入れる必要がある。しかし、JFL 環境では学習者が直接日本人と接触する機会が限られている。しかしながら、学習者の環境にある在留日本人とのネットワーク形成も日本事情であるため、その日本人とのネットワークを繋いだ人を学習するための人的リソースとすれば、実際の日本人との対人関係の学習が可能となる。日本語専攻科の多くの卒業生は、インドネシアでの日系企業等で日本語を媒介とし、在留日本人と対人関係を構築しているため、彼らを人的リソースとして活用することが考えられる。また、授業を担当するインドネシア人日本語教師も、異文化接触場面において日本語による相互作用を行い、日本人との対人関係を構築した経験を必ず持っている。そのため、様々な知識を獲得することを重視している従来の日本事情教育よりも、教師自身が自らの経験を授業に活かせる可能性がある。その人的リソースから得られた情報を学習者が批判的に分析することにより、ステレオタイプの形成を減少させられる可能性があるのである。

結論としては、インドネシアの学習環境及び学習者のニーズを踏まえた異文化接触場面に必要な日本事情は、その場面における日本人との対人関係に必要な姿勢を養う日本事情教育であると言える。この教育の概念は、インドネシアにある人的リソースの活用を通して実際の日本人との対人関係を学習することを可能とするため、日本国内の学習環境を背景とした対人関係を重視する日本事情教育の概念とは異なるものである。

8.2 今後の課題

佐々木 (2002) が提示した「他者との相互作用に介在する文化」の概念では、コミュニケーションスタイル、自己と他者との価値観や認識、行動様式の差異が重視されている。日本とインドネシアの相違について、それらを一般的に分析することは可能だが、個人差もある。また、対人関係のコンテキストの中では、結局は個人と個人の関係であるため、異文化接触における自分と相手の個人の相違を意識させる日本事情教育の開発、さらに言えば、インドネシア人日本語教師が担当可能な教育方法の開発が必要である。

参考文献

- Agius, E. & Ambrosewicz, J. (2003) *Towards a Culture of Tolerance and Peace*. International Bureau for Children's Rights
- Anderson, G. (1994) *A Proactive Model for Training Needs Analysis*. *Journal of European Industrial Training*. 18(3), 23-28
- Annenkova, A.V. & Domysheva, S.A. (2020) *Developing Critical Thinking Skills for Overcoming Stereotypes in Intercultural Communication*. *The European Proceedings of Social and Behavioural Sciences*. 1028-1038
- Arikunto, S. (2012) *Prosedur Penelitian Suatu Pendekatan Praktek*. Jakarta: Rineka Cipta
- Artarina, M. (2020) *Upaya Peningkatan Motivasi Mahasiswa Dalam Mata Kuliah Nihonjijo*. *Jurnal Sastra Studi Ilmiah Sastra*. 10 (1), 51 -55
- Asian Languages Professional Learning Project (2005) *Getting Started with Intercultural Language Learning*. Australia <https://www.asiaeducation.edu.au/docs/default-source/professional-learning-pdfs/gettingstartedwithintercultural.pdf?sfvrsn=2>
(2019年12月5日閲覧)
- Beebe, S.A., Beebe, S.J., & Redmond, M.V. (2010) *Interpersonal Communication: Relating to Others*. (6th Ed). Allyn & Bacon.
- Bennet, J.M. (1993) *Toward Ethnorelativism: A Developmental Model of Intercultural Sensitivity*. In R. M. Paige (Ed.), *Education for the Intercultural Experience*. Yarmouth, ME: Intercultural Press. 21-71
- _____ (1998) *Intercultural communication: A current perspective*. In M.J. Bennett (Ed.), *Basic concepts of intercultural communication: Selected readings*. Boston, MA: Intercultural Press. 1-34.
- _____ (2004) *Becoming interculturally competent*. In J.S. Wurzel (Ed.) *Toward multiculturalism: A reader in multicultural education*. Newton, MA: Intercultural Resource Corporation.
https://www.idrinstitute.org/wp-content/uploads/2018/02/becoming_ic_competent.pdf (2020年6月14日閲覧)
- Bhawuk, D.P.S. (2017) *Culture-Specific and Culture-General Training*. *The international encyclopedia of intercultural communication*, 1-18

- Bloom, L.Z., Coburn, K., & Pearlman, J. (1975) *the New Assertive Woman*. New York : Delacorte Press
- Bonwell, C. C., & Eison, J. A. (1991). *Active learning: Creating excitement in the classroom*. ASHE-ERIC Higher Education Report No. 1. Washington, D.C.: The. George Washington University.
- Bowen, G. A. (2009) *Document Analysis as a Qualitative Research Method*. *Qualitative Research Journal*, 9, 27-40
- Brooks, N. (1975) The analysis of foreign and familiar cultures. *In R.C. Lafayette (ed.) The analysis of foreign language teaching*. Skokie, Illinois: National Textbook Company, 19-31
- Byram, M. (1997) *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Bristol, PA: Multilingual Matters Ltd.
- Byram, M., Gribkova, B., & Starkey, H. (2002) *Developing the Intercultural Dimension in Language Teaching: a Practical introduction for Teachers* .
<https://discovery.ucl.ac.uk/id/eprint/1562524/> (2021年5月3日閲覧)
- Casmir, F.L. (1993) *Third-Culture Building: A Paradigm Shift for International and Intercultural Communication*. *Annals of the International Communication Association*, 16:1, 407-428,
- Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for languages : Learning, Teaching, Assessment*. <https://rm.coe.int/16802fc1bf> (2021年4月3日閲覧)
- Dema, O. & Moeller, A. (2012) *Teaching Culture in the 21st Century Language Classroom*. Selected Papers from The 2012 Central States Conference on Teaching of Foreign Language, 75-91
- Diner, L. (2014) *Pembelajaran Budaya Jepang Melalui DVD Erin ga Chousen*.
<https://media.neliti.com/media/publications/91000-ID-pembelajaran-budaya-jepangmelalui-media.pdf> (2021年4月3日閲覧)
- Eagle, S. & Carter, J. (1998) Iceberg and Island : Metaphors and Models in intercultural communication. 『異文化コミュニケーション研究』 10, 97-118
- Evans, D. (2000) *Stern (1992) outlines proposals for a 'cultural syllabus' to be incorporated into second/foreign language education. What, in your view, should be the main aims*

of a 'cultural syllabus' in EFL/ESL programmes and how might these be best achieved?<https://www.birmingham.ac.uk/Documents/college-artslaw/cels/essays/sylabusandmaterials/evanssam.pdf> (2019年3月3日閲覧)

- Facione, P.A. (2020) *Critical Thinking : What it is and what why it counts*. In Sight Development Program.
- Franksiska, R. (2006) *Communication style*, Bina Ekonomi. 10,75-85
- Grave, E. (2017) *A 10-Step Analysis of Cultural Encounters - a Tool to Broaden the Cultural Understanding of Japanese Students*. 『秋田大学大学院理工学研究科研究報告』 38, 17-21
- Graves, K. (2000) *Designing Language Course : A Guide for Teachers*. London, UK: International Publishing Europe Berkshire House
- Gresham, F. M. (1986) *Conceptual and Definitional Issues in the Assessment of Children's Social Skills: Implications for Classification and Training*. Journal of Clinical Child Psychology, 15, 3-15.
- Grove, C. & Hallowell, W. (2002) *On the Design and Delivery of Intercultural Training (Properly Understood)* <http://www.grovetwell.com/wp-content/uploads/pub-crosscul-training.pdf> (2021年12月4日、閲覧)
- Itoh, Y. (1991) *Socio-cultural backgrounds of Japanese interpersonal communication style*. Civilisations 39, 101-128
- Junaidi, A. et al (2020) *Panduan Penyusunan Kurikulum Pendidikan Tinggi di Era Industri 4.0 Untuk Mendukung Merdeka Belajar-Kampus Merdeka*. Direktorat Jenderal Pendidikan Tinggi Kementerian Pendidikan Dan Kebudayaan
- Kim, Y.Y. (1991) *Intercultural Communication Competence: a System-theoretic view*.in S. Ting-Toomey & F. Korzeny (Eds.) *Cross-cultural Interpersonal Communication*, 259-275
- Kokarevich, M.N. & Sizova, N.Z. (2014) *Model of Tolerance of Intercultural Communication*. Procedia - Social and Behavioral Sciences 166, 621 – 625
- Liddicoat, A.J., Scarino, A., Papademetre, L. & Kohler, M. (2003) *Report on intercultural language learning*, Canberra: Commonwealth Department of Education, Science and Training.

- Main, Alex (1985) *Reflection and the Development of Learning Skills*. In Boud David, Keogh Rosemary, Walker David: *Reflection: Turning Experience into Learning*. London and New York: RoutledgeFalmer
- Maslow, H. (2013) *Toward a psychology of being*. Start Publishing LLC.
- Mathers, N., Fox, N., & Hunn, A. (2008) *Surveys and Questionnaires*. The NIHR Research Design Service for Yorkshire & the Humber
- Maynard, S. (1997) *Japanese Communication : Language and Thought in Context*. Honolulu: University of Hawaii Press
- Muhlisian, A.A. (2018) *Penggunaan Media Sosial Instagram Dalam Praktik Pemahaman Budaya*. 12, 25-32
- Murawski, L.M. (2014) *Critical Thinking in the Classroom...and Beyond*. *Journal of Learning in Higher Education*. 10 , 25-30
- National Standards in Foreign Language Education Project (1999) *Standards for foreign language learning in the 21st century: Including Chinese, classical languages, French, German, Italian, Japanese, Portuguese, Russian, and Spanish* (=2002 聖田京子 (編訳) 「Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century 21世紀の外国語学習スタンダードズ 21世紀の外国語学習スタンダードズ 世紀の外国語学習スタンダードズ 「外国語学習スタンダードズ」」 『国際交流基金日本語国際センター』
- Nunan, D. (1988) *Syllabus Design*. Oxford: Oxford University Press
- Pourghaz, A., Afsaneh, M., & Najafi, S. (2016) *Critical Thinking and Its Relationship with Social Tolerance among Students*. *The new Educational Review*.49, 91-100
- Putra, J. (2018)日本事情教育における異文化コミュニケーション能力の育成を促す方法. International Conference on Japanese Language Education 2018. “Japanese Language Education and Its Relationship to Business World
- Pânișoară, G., Cristina, S., Pânișoară, I., & Duțăa, N. (2015) *Comparative Study Regarding Communication Styles of The Students*. - *Social and Behavioral Sciences*.186 , 202 – 208
- Rahayu, N. (2018) *Pengenalan Budaya Jepang Melalui Permainan Manna Sugoroku Bagi Pembelajar Bahasa Jepang Tingkat Dasar*. *Jurnal Pendidikan*. 9 (1), 1-15

- Ryan, S.B. (2003) *Intercultural Communication: Defining Culture to Recognize Cultural Tendencies Versus Stereotypes*. 山形大学紀要 (人文科学) 15(2), 273-282
- Scambor, E. (2009) *Guideline - Document Analysis*
<http://www.peerthink.eu/peerthink/images/stories/guideline.pdf> (2021年12月1日
閲覧)
- Sercu, L. (2005) *Foreign Language Teachers and Intercultural Competence: an International Investigation*. Clevedon: Multilingual Matters
- Shibata, A.M. (1998) *Intercultural Communication Concepts and Implications for Teachers*.
JALT Journal, 20(2), 104-118
- Tuncel, Ibrahim & Paker, Turan(2018) *Effects of an Intercultural Communication Course in Developing culture revolution in foreign language teaching*, 19-31
- UNESCO (2005) *Declaration of Principles on Tolerance Proclaimed and signed by the Member States of UNESCO on 16 November 1995*,1-4
<https://www.oas.org/dil/1995%20Declaration%20of%20Principles%20on%20Tolerance%20UNESCO.pdf> (2021年8月15日閲覧)
- Ventura, Matthew., Lai, Emily., Dicerbo, Kristen (2017) *Skills for Today: What We Know about Teaching and Assessing Critical Thinking*.
<https://www.pearson.com/content/dam/one-dot-com/one-dot-com/global/Files/efficacy-and-research/skills-for-today/Critical-Thinking-FullReport.pdf> (2019年6月3日閲覧)
- Washington State University (2016) Guide to Rating Critical & Integrative Thinking.
https://assessment.fiu.edu/resources/rubrics-and-curriculum-maps/_assets/rubrics/Critical%20and%20Integrative%20Thinking%20Rubric%20-%20Washington%20State%20University.pdf (2021年6月3日閲覧)
- Washington State University Critical Thinking Project (2001) *Guide to Rating Critical Thinking*
Washington State University <https://web.uri.edu/assessment/files/WSU-Critical-Thinking-Project-Resource-Guide.pdf> (2020年12月3日閲覧)
- Willingham, D.T.(2007) *Critical Thinking: Why is it so Hard to Teach?* American Educator, Summer, 9-19

Yee-Han chan, Ngan-Ling wong, Lee-Luan Ng(2017) *Japanese Language Students' Perception of Using Anime as a Teaching Tool*. Indonesian Journal of Applied Linguistics. 7 (1), 93-104

Zhu, Honglin (2011) *from Intercultural Awareness to Intercultural Empathy*. English Language Teaching. 4(1), 116-119

^{あはま}阿濱志保里・^{あはま}阿濱茂樹・霜川正幸 (2018) 「学習者ニーズに関する基礎的研究」 『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』 45, 121-127

秋山明之 (2001) 「自らの生き方とつながる異文化理解教育の創造 -アイデンティティ形成方略という視点から-」 『社会系教科教育学研究』 13, 127-134

石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・黒石武人 (2003) 「はじめて学ぶ異文化コミュニケーション -多文化共生と平和構築を向けて-」 有斐閣

石川芳子 (2015) 「ソーシャルスキルトレーニングの理論と実際」 <https://jascg.info/wp-content/uploads/2015/03/4a848f73644d6264353f2cd4545435e5.pdf> (2020年3月7日 閲覧)

石田敏子 (1995) 「日本語教授法」 大修館書店

伊藤孝恵 (1998) 「「日本事情」教育についての一考察 -異文化間コミュニケーションの観点から-」 『日本語教育研究』 36(2), 105-110

伊藤明美 (2014) 「多文化共生に向けた異文化コミュニケーショントレーニング(ICT)の試み: 改変版 Outside Expert の実践と参加者の学び」 『藤女子大学文学部紀要』 51, 47-73

伊藤江美 (2013) 「日本事情クラスにおける『楽しい』という感情の機能の検討 -『ダーツの旅』の視聴とお祭り体験学習によるアクティブ・ラーニング-」 『国際経営・文化研究』 18(1), 1-15

出原節子 (2002) 「異文化トレーニングとしての日本事情教育」 『富山大学留学生センター紀要』 1, 20-29

池田理知子・灘光洋子・今井千景・吉武正樹・E.M.クレマー・山田美智子・岩隈美穂 (2002) 「多文化社会と異文化コミュニケーション」 三修社

- 膽吹覚 (2013) 「日本事情におけるアクティブ・ラーニング – 『越前若狭いろはかるた』を使用した授業の紹介 –」 『共通教育フォーラム』 15, 2-3
- ウィディアンティスシ (2016) 「地域在住外国人と日本人のコミュニケーション：茨城県大洗町在住インドネシア人の場合」
http://file.upi.edu/Direktori/FPBS/JUR. PEND. BAHASA JEPANG/197312032003122-SUSI_WIDIANTI/Makalah.pdf
- 宇野光紀 (2015) 「実践から見る、外国語教育におけるヒューマンにスティックアプローチ」 『神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要』, 19-27
- 宇塚万里子・岡益巳 (2014) 「日本事情コースの現状と問題に関する実証的研究」 『大学教育研究紀要』 10, 179-192
- 奥村訓代 (2000) 「インターフェースとしての日本事情」 『広島大学留学生教育』 4, 9-20
- 岡崎正道 (1999) 「日本事情指導の実際」 『言語と文化の諸相』, 335-348
- 奥田俊詞 (2007) 「メタ認知の視点から見たキャリア教育」 http://www.e-net.nara.jp/kenkyo/index.cfm/21,2476,c.html/2476/13_kiyou_h18.pdf (2021年12月3日閲覧)
- 小川都 (2013) 「留学生に必要とされる「一般日本事情」のあり方」 『専修大学外国語教育論集』 41, 105-113
- 小川貴士 (1996) 「異文化理解における「文化テキスト」の読みと認識」 『国際基督教大学日本語教育研究センター』 5, 1-9
- 大橋眞・Gehertz 三隅友子 (2014) 「共生社会を支える教養教育の可能性」 『徳島大学国際センター紀要・年報』, 1-12
- 大竹恵美子 (2000) 「日本事情を考える –その専門性について–」 『外国語教育-理論と実践』 26, 23-31
- 加藤優子 (2009) 「異文化間能力を育む異文化トレーニングの研究：高等教育における異文化トレーニング実践の問題と改善に関する一考察」 『仁愛大学研究紀要』 8, 13-21

- _____ (2011) 「高等教育における異文化トレーニング教育支援システム利用のための考察－教師を対象にした面接調査より－」 『仁愛大学研究紀要』 10, 33-40
- 河内千春 (1998) 「続・日本語教師が教える日本事情」 『講座日本語教育』 33, 166-180
- 河野理恵 (2000) 「戦略”的「日本文化」非存在説－日本事情教育における「文化」のとらえ方をめぐって－」 『21世紀の『日本事情』 第2号 日本語教育から文化リテラシーへ』 くろしお出版, 4-16
- 金本節子 (1994) 「‘Cultural Studies’としてみた日本事情」 『茨城大学教養部紀要』 27, 209-217
- 川上郁雄 (1999) 「日本事情教育における文化の問題」 『21世紀の『日本事情』 創刊号 日本語教育から文化リテラシーへ』 くろしお出版, 16-26
- 京祥太郎 (2001) 「日本語教育における日本事情の捉え方－日本事情用教材分析から考察－」 『留学生教育』 6, 89-94
- 北出慶子 (2010) 「留学生と日本人学生の異文化間コミュニケーション能力育成を目指した協働学習授業の提案－異文化コミュニケーション能力理論と実践から－」 『言語文化教育研究』 9 (2) , 65-90
- 北村武士 (2011) 「日本事情・日本文化を取り入れた日本語授業を考える」 『国際交流基金教授法シリーズ『日本事情・日本文化を教える』より [https://www.koryu.or.jp/portals/0/resources/kaohsiung/ez3_contents_nsf/15aef977a6d6761f49256de4002084ae/b23cb5657c97286049257825002658fe/\\$FILE/dai%20san%20kai%20jyunkai%20handout.pdf](https://www.koryu.or.jp/portals/0/resources/kaohsiung/ez3_contents_nsf/15aef977a6d6761f49256de4002084ae/b23cb5657c97286049257825002658fe/$FILE/dai%20san%20kai%20jyunkai%20handout.pdf) (2019年9月30日閲覧)
- 木谷忍 (2009) 「内部観測にもとづく異文化理解シミュレーションでの験評価に関する試論－予想外の出来事をどう捉えどう評価するか－」 『シミュレーション&ゲーミング』 19 (1) , 61-72
- 見城悌治・三村達也・中嶋英介・菅田陽平 (2015) 「現代中国における大学生に対する「日本事情」ニーズ調査」 『国際教育』 8, 51-76

- グエン タインタム・グイエン チツオン バン・マイ ゲエン ゴック (2013) 「ベトナムにおける日本語教育と日本研究の動き」 『ベトナムシンポジウム 2013』, 249-258
- グスティニ マリア・ルダギムティア アニキ・プリシャンティ スチアティ (2016) 「インドネシアの日系企業における異文化コミュニケーション問題 –インドネシア社員に対する予備調査–」 『日本語教育国際研究大会高等発表』 http://bali-icjle2016.com/wp-content/uploads/gravity_forms/2-ec131d5d14e56b102d22ba31c4c20b9c/2016/09/Maria-Gustini_インドネシアの日系企業における異文化コミュニケーション問題-インドネシア教育大学院生.pdf?TB_iframe=true (2017年8月18日閲覧)
- 久保田竜子(2008)「日本文化を批判的に教える」佐藤慎司・ドーア根理子編『文化、ことば、教育 –日本語/日本の教育の「標準」を越えて–』明石書店, 151-173.
- _____ (2013) 「日本語教育における文化」『アメリカにおける日本語教育の過去・現在・未来』全米日本語教育学会・国際交流基金
- 栗原伸一 (2015) 『入門統計学—検定から多変量解析・実験計画法まで—』東京：オーム社
- 小池生夫・井出祥子・河野守夫・鈴木博・田中春美・田辺洋二・水谷修 (2003) 『応用言語学辞典』研究社
- 牛頭哲宏 (2014) 「「言葉の使い方を振り返る力」を育てる学習指導 –小学校国語科におけるロールプレイの活用–」 『神戸常盤大学紀要』7, 75 - 85
- 工藤泰三 (2020) 「リサーチとプレゼンテーションを軸にした異文化理解 CLIL 英語コースの開発」 『名古屋学院大学編集 言語・文化編』31 (2) , 71-81
- 倉橋洋子 (2017) 「大学生の異文化に対する態度について」 『東海学園大学教育研究紀要』1, 3-17
- 倉地暁美 (1994) 「国際化時代における日本事情教育の課題：グローバル教育の視点から」 『広島大学平和科学研究センター』117, 105-126

- ケリ綾子 (2005) 「日本事情では何を教えるべきか」 『琉球大学留学生センター紀要』
2, 61-74
- 国際交流基金 (2006) 『第1巻 日本語 教師の役割/コースデザイン』 ひつじ書房
- _____ (2009) 「日本語教師の役割/コースデザイン」 ひつじ書房
- _____ (2010) 「日本事情・日本文化を教える」 ひつじ書房
- _____ (2017) 「JF 日本語教育スタンダード 【新版】 利用者のためのガイドブック」
https://jfstandard.jp/pdf/web_whole.pdf (2021年12月1日閲覧)
- _____ (2019) 「2018年度海外日本語教育機関調査結果 (速報値)」
[https://www.jpf.go.jp/j/about/press/2019/dl/2019-029-02.pdf%20\(2019](https://www.jpf.go.jp/j/about/press/2019/dl/2019-029-02.pdf%20(2019) (2020
年6月17日閲覧)
- 小玉安恵 (2018) 「オンラインによる異文化間協働型の日本文化の授業 COIL の試みー
異文化間で活躍できる人材の育成を目指してー」 『日本語教育』 169, 93-108
- 小林ミナ (1998) 「北海道大学日本語研修コースにおける日本事情授業」 『北海道大学
留学生センター紀要』 2, 75-87
- サウクエンファン (2006) 「社会文化・社会言語重視のインターアクション教育ー初
級日本語学習者向けの日本事情コースとしての試みー」 『論究日本事情神田
外国語大学日本研究所日本事情研究会論』 木内印刷, 9-30
- 佐々木倫子 (2002) 「日本語教育で重視される文化概念」 『ことばと文化を結ぶ日本語
教育』 凡人社
- _____ (2003) 「日本語教員と文化リテラシー」 『国際日本学シンポジウム国際日
本学の可能性』 国際日本語との連帯による総合的日本語教育の可能性, 23-
27 <https://www.li.ocha.ac.jp/ug/global/mrs/nihongaku5.pdf> (2018年3月15日
閲覧)
- 佐藤慎司 (2007) 「日本人のコミュニケーションスタイル」 観とその教育の再考ーア
メリカの日本語教科書を例としてー 『WEB版リテラシーズ』 4 (1) , 1-9
- 佐藤勢紀子 (1998a) 「学習者主体の日本事情ー異文化間コミュニケーションを考える
ー」 『メディア教育開発センター』 3, 133-145

- _____ (1998b) 日本事情を開くー授業改善のプロセサー『広島大学留学生教育』3, 65-76
- 佐藤麻里子・小林悦夫 (1994) 「カリキュラム開発及び理念的目標の構造化について」『中国帰国孤児定着促進センター紀要』2, 1-25
- 佐野光彦 (2015) 「グローバル時代における高等学校の異文化交流授業ーその意義と効果ー」『教育開発センタージャーナル』6, 51-62
- 坂本利子 (2011) 「異文化理解授業から国内学生は何を学んでいるかー多文化共生力育成を目指してー」『立命館言語文化研究』24 (3) , 143-157
- 酒井英樹 (2014) 「異文化理解の授業を行うにあたって」『Teaching English Now 異文化理解の授業づくり特集』28, 2-5
- 澤田田津子 (2001) 「日本語中級学習者のための日本事情シラバス」『奈良教育大学紀要人文社会学』50 (1) , 147-157
- 澤邊裕子・中川正臣・岩井朝乃・相澤由佳「教室と社会をつなげる交流学习実践コミュニティは何を目指すのか：外国語教育における〈拡張型交流学习〉の可能性」『日本語教育研究』44, 115-133
- 塩谷由美子・小野塚若菜 (2015) 「大学教育における日本事情コースの位置づけに関する考察ーディベートを用いた論理的思考育成の試みー」『日本語教育方法研究会誌』22 (1) , 2-3
- 柴田幹夫 (2002) 「「日本語・日本事情部門」の概要と到達目標ー学部生に対する日本語・日本事情教育ー」『新潟大学大学教育開発研究センター』8 (3) , 181-183
- 白畑知彦・富田祐一・若林茂則・村野井仁 (1999) 「英語教育用語辞典」大修館書店
- 島崎薫 (2016) 「日本文化のクラスにおけるアクティブラーニングの 実践ーすずめ踊りプロジェクトでのアクション・リサーチを通したー考察ー」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』2, 181-191
- ジョナックキャシー・根岸ウッド日実子・松本剛次 (2008) 「オーストラリアの初中等教育における外国語教育の現在と国際交流基金シドニー日本文化センターの

- 日本語教育支援 – Intercultural Language Teaching and Learning の考え方を中心にー」『日本語教育紀要』4, 115-130
- 砂川裕一 (1998) 「日本事情論の視界の拡充のために」『広島大学留学生教育』3, 45-64
- 鈴木ゆみ、斎藤誠一 (2016) 「異文化間感受性尺度日本語版作成の試み」『小部大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』9 (2), 39-44
- 牲川波都季 (2000) 「剥ぎ取りからはじまる日本事情」『21世紀の『日本事情』第2号 日本語教育から文化リテラシーへ』くろしお出版, 28-39
- _____ (2002) 「同化主義としてのー学習中心ー」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』15, 163-177
- 鈴木雅光 (2005) 「異文化の理解」『Dialogos』5, 81-92
- _____ (2016) 「異文化コミュニケーションについて」『東洋大学大学院紀要』53, 395-405
- 園田博文・奥村圭子・中村朱美 (2008) 「異文化能力とコミュニケーション能力の養成にむけてー山梨大学・山形大学・佐賀大学の授業実践を事例としてー」『山形大学紀要 (教育学科)』14 (3), 55-77
- 高寄幸子・都恩珍 (2016) 「海外の日本語学習者に日本文化をどう教えるかーアクティブラーニングを取り入れた授業の試みー」『JLSA』8, 115-127
- 田尻英三 (1983) 「インドネシアの日本語教育」『日本語教育国際会議第2回東南アジアにおける日本語教育のあり方を探る』35, 1-20
- 田中共子・中島美奈子 (2006) 「ソーシャルスキル学習を取り入れた異文化間教育の試み」『異文化間教育』24, 28-3
- 田中共子 (2008) 「AUCーGS 学習モデルに基づく異文化間教育の試み」『文化共生学研究』6, 125-135
- _____ (2010) 「異文化適応とソーシャルスキル」『日本語教育』146, 61-75
- 田中信之 (2000) 「留学生別科における日本事情教育」『北陸大学紀要』24, 339~345
- 土屋千尋・櫛谷圭司・眞水康樹・内藤俊彦・藤井隆至・濱口哲・松田由美子・和田悦子・足立祐子 (1997) 「全学協力による日本事情のカリキュラム編成ラム編

- 成および教育方法改善のための調査研究」『日本教育工学雑誌:日本教育工学会論文誌 / 日本教育工学会編』 23, 45-48
- 鄭起永 (2002) 「日本語教育におけるマルチメディア活用の有効性と教師の役割」『明海日本語』 7, 37-45
- 戸田利彦 (1992) 「大学正規コースとしての日本事情の取り扱い —理念と内容的のあり方をめぐって—」『比治山女子短期大学紀要』 26, 41-55
- _____ (1996) 「異文化理解と「性差 (gender)」 —日本事情における取り扱い—」『年報』 11, 67-87
- 徳井厚子 (1996a) 「日本事情の役割とイメージ —学生たちの眼をとおしてみえてくるもの—」『教育システム研究開発センター紀要』 1, 135-151
- _____ (1996b) 「異文化理解と日本事情教育 (二) —誤解のプロセスをテーマにした異文化トレーニングの試み—」『信州大学教育学部紀要』 89, 1-11
- _____ (1997) 「文化モデルと日本事情教育」『教育システム研究開発センター紀要』 2, 191-207
- 富盛伸夫 (2013) 「CEFR のグローバル化と異文化コミュニケーション能力の諸問題: Michael Byram and Lynne Parmenter (ed), The Common European Framework of Reference— The Globalization of Language Education Policy —」科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 研究プロジェクト中間報告書 (2012-2013)
- Tran, Thi Chung Toan (2009) 「ベトナムにおける日本文化研究の諸課題」『創立 20 周年記念国際シンポジウム日本文化研究の過去・現在・未来—新たな地平を拓くために—』 32, 119—132
- 中崎温子 (2005) 「多文化共生社会の日本語教育 —「コミュニケーション」ということの考察を通して—」『言語と文化』 13, 103-120
- 中村純子 (2011) 「嶺南師範学院の日本語学科カリキュラム及び学生のニーズに関する報告」『地域総合研究』 19, 177-187
- 中村良廣 (2011) 「異文化コミュニケーションと実践型教育」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』 22, 103-114

- 中村愛 (2015) 「JFL 環境における韓国人日本語学習者の言語活動に関する調査」『日本語と日本語教育』43, 53-59
- 長岡麻里子 (2012) 「異文化との出会い:教室内で異文化意識を高める」『異文化学園大学紀要』20, 137-148
- 長谷川ユリ (1996) 「日本事情の授業から アンケート導入の試み」『留学生センター 一年報』4, 23-32
- 西井和弥 (2002) 「日本事情コースの意義に関する考察」『NUCB JLCC』4 (2) , 25-33
- 二谷沙耶香 (2017) 「日本事情コースにおける「学習者の日々の疑問」を教材化した実践 -Project Based Learning を手法として-」『日本語教育方法研究会誌』24 (1) ,70-71
- 沼田潤 (2011) 「日本人大学生における異文化理解の現状」『人間環境学研究』10 (2) , 55-63
- ネウストプニー,J.V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書
- 野村美穂子 (2002) 「俳句にお茶会、カラオケに日本国憲法 -授業報告:初めての「日本事情 B-」」『文教大学国際学部図書・紀要委員会編』2, 61-67
- パリハワダナルチラ (2019) 「京都大学日本語コース履修者の履修動向 -2017 年度実のカリキュラム改編後の履修データを基に-」『京都大学国際高等教育院紀要』2, 1-20
- 橋本敬司 (1994) 「日本事情考」『広島大学留学生センター紀要』4, 65-80
- _____ (1999) 「開かれる日本事情」『広島大学留学生センター』3, 85-95
- 八若寿美子 (2004) 「活動中心の十五湯における評価—自己評価・ピア評価の有効性」『茨城大学留学生センター紀要』2, 13-24
- 一二三朋子 (2006) 「ビデオを使った日本事情授業の実践報告」『論究日本事情神田外国語大学日本研究所日本事情研究会論』木内印刷, 31-48
- 平野遼 (2020) 「英語科教員養成課程における異文化理解に関する一考察」『文化コミュニケーション論集』18, 43-50
- 古川嘉子 (2007) 「インドネシアの日本語教育」

<https://www.jpff.go.jp/j/urawa/about/world/img/13/furukawa.pdf> (2020年3月

14日閲覧)

- 札幌寛子 (1993) 「「日本事情」講座研究－現代用語をキーワードにした「日本事情」－」『金沢大学留学生教育センター紀要』2, 59-69
- 福島知津子 (2018) 「異文化理解する？しようとする？」『英語教育リレー随想』96, 1-2
- 細川英雄 (1999) 『日本語教育と日本事情－異文化を超える－』明石書店
- _____ (2000) 「言葉と文化はどのように教えられてきたか－日本事情教育研究小史試み－」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』13, 103-112
- _____ (2002) 「ことば・文化・教育 ことばと文化を結ぶ日本語教育をめざして」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社, 1-10
- _____ (2003) 「「個の文化」の再論－日本語教育における言語文化教育の意味と課題－」『21世紀の日本事情5』くろしお出版
- 松尾知明 (2018) 「多文化教育と日本人性－異文化間能力の育成に向けて－」『生涯学習とキャリアデザイン』16 (2), 103-113
- 松本佳穂子 (2013) 「異文化間能力の指標と指導モデル構築の試み」『文明』18, 51-63
- 松本久美子 (1997) 「初級日本語コースにおける異文化教育導入案－カルチャーギャップに焦点を当てて－」『長崎大学センター紀要』5, 77-96
- 松嶋緑 (2004) 「2003年度担任クラス内での日本事情実践報告－別科における日本事情講座開設の必要性－」『別科日本語教育』6, 30-42
- 宮崎里司 (2000) 「もうひとつの日本事情：海外でのインターアクションのための日本事情」『21世紀の『日本事情』第2号－日本語教育から文化リテラシーへ－』くろしお出版, 42-51
- 宮城典江 (1993) 「日本語教育における日本事情－その捉え方と教授形態について－」『国際経営フォーラム』5, 250-267
- 宮本律子、松岡洋子 (1999) 「日本事情のオリエンテーション教育としての意義－複数の授業形態の実践を通して－」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』21, 63-71

- 三浦香苗 (2003) 「教養教育の「日本事情：多文化交流ディスカッション」授業研究」
『金沢大学留学生センター紀要』6, 31-47
- 三代純平 (2009) 「留学生生活を支えるための日本語教育とその研究の課題 ―社会構成主義からの示唆―」『言語文化教育研究』8 (1) , 65-99
- 三牧陽子 (1992) 「「日本語」日本事情開講をめぐって」『留学生センター年報』創刊号, 69-90
- _____ (1994) 「日本事情再考」『留学生センター年報』2, 31-44
- 水田直美 (1997) 「日本語教員養成における日本事情教育 ―倉敷芸術科学大学教養学部の場合―」『倉敷芸術科学大学紀要』3, 231-239
- 森山美雪 (2011) 「シュミレーションゲーム『バーンガ』の効果とその要因について ―多面的な状況に注目して―」『異文化コミュニケーション』14, 69-84.
- 森山新 (2011) 「グローバル時代に求められる多文化・多言語教育」『多言語多文化同時学習支援国際シンポジウム』
<https://www.li.ocha.ac.jp/ug/global/mrs/201203.pdf> (2021年12月6日閲覧)
- 文部省 (1962) 「外国人留学生の一般教育等履修の特例について (通知)」『昭和 37 年の文部通達』国書刊行会
- 文部科学省 (2015) 「アクティブラーニングに関する議論」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afieldfile/2015/09/04/1361407_2_4.pdf (2021年12月5日閲覧)
- 百瀬侑子 (1998) 「国際理解・国際協力を目指した日本語教育のあり方 ―インドネシアに対する支援・協力を例にして―」『国際協力研究』14 (1) , 43-50
- 山口育子 (2001) 「「年中行事」を生かした異文化理解教育：同志社大学留学生別科日本事情クラスでの実践例」『同志社大学留学生別科紀要』1, 119-132
- 山口和代 (2004) 「南山大学総合政策学部での日本語教育における日本事情の位置づけと今後の課題」『国際開発研究フォーラム』26, 179-192
- 柳内忠剛 (1987) 「異文化間コミュニケーションと日本人の意識」『思想と文化』477-492,

- 藪田由紀子 (2011) 「異文化交流プログラムにおける意識調査 —韓国と日本の大学生のケーススタディーを通して—」『清泉女学院短期大学研究紀要』 29, 47-61
- 横山博信 (2017) 「朝日大学留学生別科日本語研修課程における「日本事情コース」指導の実践的課題」『朝日大学留学生別科紀要』 14, 3-12
- 吉嶺加奈子 (2018) 「対人日本語学習者向け『日本事情』オンラインコースの学習成果と課題」, 135-136 <https://gakkai.univcoop.or.j.cc/2018/papers/pdf/pcc029.pdf>
(2020年3月24日閲覧)
- 吉廣綾子・Gehrtz 三隅 友子 (2005) 「日本事情「吉野川プロジェクト」—参加者の視点から直す—」『徳島大学留学生センター紀要』 1, 60-77
- 若林秀明 (1999) 「オーストラリアの大学におけるニーズ分析」『世界の日本語教育』 9, 63-85
- 脇田里子 (2000) 『共同作業による多文化理解教育の実践と課題』『メディア教育研究』 4, 27-36
- 渡辺文夫編著(1995)『異文化接触の心理学その現状と理論』川島書店

謝辞

本論文の執筆にあたり、九州大学大学院比較社会文化研究院松永典子教授には、主指導教員として、地球社会統合科学府に研究生として在籍時期から、博士後期課程に入り、本論文を書き終わった時期まで温かい励ましやご指導を賜りました。同じく九州大学大学院比較社会文化研究員杉山あかし准教授、九州大学大学院言語文化研究院志水俊広准教授、同じく九州大学大学院言語文化研究院井上奈良彦教授には副指導教員として、他の視点からのご助言とご指導をいただきました。ここに、先生方に真心より感謝を申し上げます。

本論文の審査時期に、同志社大学グローバル・コミュニケーション学部グローバル・コミュニケーション学科脇田里子准教授には副審査として、多くのご助言をいただきました。感謝を申し上げます。

研究過程につきましては、多くの方から支援や協力をいただきました。インドネシアコンピューター大学日本文学学科の皆様、インドネシア教育大学日本語教育学科の皆様、バンドン外国語大学日本語学科の皆様、セマラン国立大学日本語教育学科の皆様、チレボン外国語大学日本文学学科の皆様、ウダヤナ大学日本文学学科の皆様、ハサヌディン大学日本文学学科の皆様、予備調査及び本調査にご協力をいただき、大変ありがたく存じます。

本論文の文書を添削してく下さった良永朋実先輩、柳瀬千恵美先輩にここにお礼を申し上げます。松永ゼミの皆様、いつものコメント等に、ありがたく存じます。

このように、本論文は多くの方々に支えられて、完成いたしました。改めて、感謝の気持ちを表します。

付録資料

論文博士の学位授与の要件として、従来規則第5条第1項の課程修了による博士（以下「課程博士」という。）の場合と同様の方法による論文審査と学力確認のための試験に合格することを必要としたが、今回大学の定める適宜な方法で論文審査および学力の確認を行なうことに改め、学位の種類や提出論文の性格等に応じて単に形式的な試験にとどまらず、適正な審査ができるようにしたものである。

(2) (1)に伴い、規則第10条および第11条の規定を整備したこと。

学位授与の報告に必要な提出書類中今回の改正により整備した事項の適用は、論文博士について論文審査および学力の確認の結果ならびにこれらを担当した機関に関する事項であり、課程博士の場合は従前どおりである。したがって、試験関係の事項は論文博士の場合には適用がなく、学力の確認関係の事項は課程博士の場合には適用がない。また、学位規程に定めるべき学位に関する必要な事項には新たに学力の確認の方法が加えられた。

3 運用上留意すべき事項

(1) 今回の改正の趣旨により、論文審査および学力の確認の方法を再検討する際には、大学院および学位制度の趣旨にじゅうぶん留意し、学位の種類に応じて真に規則第3条に規定する能力を有する者を検出するという観点から適正な審査方法を決定のうえ実施されたい。

(2) 今回の改正により学位の審査方法を改めた場合において、方法改正時審査中のものについては、この省令施行の日前に学位の申請を受理したものであつても、大学の定めるところにより、改められた方法によつてさしつかえない。

(3) 論文博士の学位の授与にあつては、課程博士の大学院在学年限との均衡を失わないようにじゅうぶん配慮されたい。

(4) 医学博士の学位については、改正後も昭和33年5月6日付け文大大第339号大学学術局長通知「新制大学院における論文提出による医学博士の学位の取扱について」の趣旨によることが望ましい旨医学視学委員会において決定されたので、医学研究科をおく大学では御了承のうえ取り扱われたい。

(5) 改正後の規則第10条の規定に基づく文部大臣への報告の様式については、昭和33年4月22日付け文大大第313号大学学術局長通知「博士の学位授与について」による報告様式のうち様式2中に「試験の結果の要旨および試験担当者氏名」とあるのを「学力確認の結果の要旨および学力確認担当者」として、また別紙2についても同様趣旨で改めて処理されたい。

(6) この改正省令の施行に伴い、各大学では学位規程の改正を検討されることになるが、学位規程の内容には従来から再考を要する事項がしばしばみられると、とくに学位審査の費用に係る次の諸点についてはあわせて留意し、その改善を図られたい。

(イ) 学位審査に伴う諸費用として、審査手数料のほか審査料その他の名目による費用を徴収するものがあるが、審査のために必要な費用は一切を審査手数料として一本化することとし、その手続の適正を図られたいこと。

(ロ) 旧制度の学位審査に際し、審査委員等が上記審査手数料として大学で定めた費用のほか、審査の謝礼等の名目で多額の金品を收受した疑いはより取調を受けた事件があつたのにかんがみ、新制度の学位審査にあつては各大学ともじゅうぶん厳正な取扱いをされていることと考えるが、今後もかかる不祥事の生ずることがないように学位規程の運用については格段の注意を払われたいこと。

(参考)

文部大臣 殿

昭和37年3月10日

大学設置審議会 会長

論文提出による博士の学位の授与方法について（答申）

本審議会は、諮問第47号にかかる上記のことについて慎重に審議しました結果、昭和27年10月11日に答申しました学位に関する要項の一部を下記のとおり改正することに結論を得ましたので、答申します。

記

1 学位授与の方法中3のロを次のように改める。

ロ 論文提出により、博士の学位を授与される者は、大学院において博士課程を終えて学位を授与される者と同等以上の内容を有している論文を提出し、且つ専攻学術に関し、同様に広い学識を有することを確認された者でなければならない。

2 学位審査の方法中2を次のように改める。

2. 提出論文の審査及び「三の3のロ」の広い学識を有することの確認の方法は、当該大学の定めるところによる。

文部省令第13号

学校教育法（昭和22年法律第26号）第68条第1項の規定に基づき、学位規則の一部を改正する省令を次のように定める。

昭和37年3月31日

文部大臣

学位規則の一部を改正する省令

学位規則（昭和28年文部省令第9号）の一部を次のように改正する。

第5条第2項を次のように改める。

2 博士の学位は、大学の定めるところにより、大学院の行なう博士論文の審査に合格し、かつ、前項第1号に該当する者と同等以上の学力を有することを確認された者にも授与することができる。

第10条第4号及び第5号中「論文審査及び試験」を「論文審査及び試験又は学力の確認」に改める。

第11条中「論文審査及び試験」を「論文審査の方法、試験及び学力の確認」に改める。

附 則

この省令は、昭和37年4月1日から施行する。

4. 外国人留学生の一般教育等履修の特例について

昭和37年4月18日

文大大第244号

文部省大学学術局長から

国公立大学（短期大学を除く。）長あて

昭和37年4月18日文部省令第21号をもつて大学設置基準（昭和31年10月22日文部省令第28号）の一部を改正する省令が、別紙のとおり公布施行され、外国人留学生の一般教育等の履修について特例が設けられました。

関係各大学におかれては、下記事項を御留意のうえ、遺漏のないようお取り計らい願います。

記

1 制定の趣旨

この省令は、外国人留学生に対し、その修学目的に即して合理的な教育課程を編成できるように、大学設置基準に特例を設け、全体的な学習効果を高めるとともに、履修上の

負担の軽減をはかることを目的とする。

なお、従来、課外教育として日本語教育等を実施していた大学が、これをこの特例による科目に改編して、卒業要件としての単位に通算し、外国人留学生の履修上の負担を軽減する場合には、このために学力の低下をきたすことのないようにすることはもちろん、これによつて生じた余裕をもつて基礎教育科目の教育を充実する等、むしろ総合的学力の向上に努められたい。

2 適用の範囲

ここにいう外国人留学生とは、大学入学を目的として入国許可を受けて入国し、大学に入学した者を指し、在日外国人で大学に入学した学生には適用しないものとする。なお、日本人学生に対しては適用されないことはいうまでもない。

3 特例による科目開設にあつての留意事項

- (1) 日本語科目および日本事情に関する科目（以下日本語科目等という。）を置き、これを開設する場合、いくつかの授業科目に分けて実施することができるものとする。たとえば、日本事情に関する科目としては、一般日本事情、日本の歴史および文化、日本の政治経済、日本の自然、日本の科学技術といったものが考えられる。
- (2) 日本語科目等として開設する授業科目は、大学教育の水準に応じた内容を有することを要し、初歩的内容のものは従来どおり基準外の扱とする。
また、各授業科目の内容については、日本人学生に対する一般教育科目の趣旨と同様の教育的意図を実現できるように留意するとともに、学生が在学または進学する学部専攻分野に応じた基礎知識をもあわせて学習し得るよう配慮することが望ましい。
- (3) 日本語科目等は、少なくとも外国人留学生数名以上を対象として授業を行なう場合に開設するものとし、1～2名に対して行なう補習授業的なものをこれにあてることは望ましくない。
- (4) 日本語科目等の授業科目は、新設（既設科目の改編を含む。）することを要し、一般教育科目等の既設の授業科目を、そのままこれにあてることはできないものとする。
- (5) 保健体育科目の講義2単位を日本語科目等によつて代替する場合は、日本事情に関する科目中に、保健体育科目の趣旨を加味し、保健衛生等の内容をもりこむ等について配慮されたい。

4 日本語科目等の単位計算方法

単位計算方法は、大学設置基準第26条により、一般の授業科目と同様の方法によるが、特に日本語科目については、講義の場合も教育効果を考慮して第26条第1号ただし書により、教室における毎週2時間15週の講義をもつて1単位とすることが適当である。

5 日本語科目等の履修方法

- (1) 一般教育科目については、修得単位数36単位のうち、人文、社会、自然科学各系列1科目以上4単位以上、合計5科目以上20単位以上を履修することを要し、また、保健体育科目については、修得単位数4単位のうち実技2単位を履修することを要するが、残り18単位は日本語科目等をもつてかえることができることとなつた。
一般教育科目の履修を各系列1科目以上4単位以上、合計5科目以上20単位以上としたことは、学生が在学または進学する学部専攻分野に応じて、特定系列の科目に重点をおくことを可能としたものであり、また、基礎教育科目の取り扱いは変わらないので大学の履修方法の定め方により、さらに基礎学力の充実を図ることが可能となつたものである。

なお、外国語科目についての改正は行なわれていないが、大学において2カ国語以上の履修を卒業の要件としている場合においても、外国人留学生に対しては1カ国語8単位の履修をもつて卒業の要件としてさしつかえない。

- (2) 医学、歯学の学部の場合、進学の課程における修得単位数64単位のうち人文、社会科学系の科目については、それぞれ1科目以上4単位以上を履修することを要し、また保健体育科目については、修得単位数4単位のうち実技2単位を履修することを要するが、残り18単位は基礎教育科目、日本語科目等をもつてかえることができることとなつた。

6 その他

日本語科目等を開設するには、学則の変更を必要とするが、学則を変更する場合、学則中に大学設置基準第45条の規定により開設し、かつ同条に定める外国人留学生のみに対して適用する旨を明らかにすることが望ましい。

文部省令第21号

学校教育法（昭和22年法律第26号）第3条の規定に基づき、大学設置基準の一部を改正する省令を次のように定める。

昭和37年4月18日

文 部 大 臣

大学設置基準の一部を改正する省令

大学設置基準（昭和31年文部省令第28号）の一部を次のように改正する。

第45条を第46条とし、第44条の次に次の1条を加える。

（外国人留学生に関する授業科目等の特例）

- 第45条 大学は、外国人留学生（大学において教育を受ける目的をもつて入国し、大学に入学した外国人留学生をいう。以下同じ。）の教育について必要があると認めるときは、第19条に規定するもののほか、日本語科目及び日本事情に関する科目を置き、これらに関する授業科目を開設することができる。
- 2 前項の授業科目の単位数は、原則として四単位とし、単位の計算方法については第26条の定めるところによるものとする。
- 3 第1項に規定する授業科目を開設する大学の外国人留学生に係る卒業の要件として修得すべき単位数は、第32条の規定にかかわらず、一般教育科目については同条第1項第1号の規定により修得すべき単位数36単位のうち第20条第2項各号の系列についてはそれぞれ1科目以上4単位以上、合計5科目以上20単位以上、保健体育科目については第32条第1項第3号の規定により修得すべき単位数4単位のうち実技2単位とし、これらの科目のその他の単位は、日本語科目及び日本事情に関する科目の単位をもつて代えることができる。
- 4 第1項に規定する授業科目を開設する大学の外国人留学生に係る医学又は歯学の大学学部の進学の課程において修得すべき単位数は、第33条第2項の規定にかかわらず、人文科学系及び社会科学系の科目については同条同項の規定により修得すべき単位数12単位のうちそれぞれ1科目以上4単位、保健体育科目については同条同項の規定により修得すべき単位数4単位のうち実技2単位とし、これらの科目のその他の単位は、基礎教育科目、日本語科目及び日本事情に関する科目の単位をもつて代えることができる。

附 則

この省令は、公布の日から施行する。

5. 国立大学附属病院諸料金規程準則およびその解説について

昭和37年6月2日
文 大 病 第 286 号
文部省大学学術局長から
附属病院を置く各国立大学長
あて

シラバス (原文)

Module/Course Title: Nihon Jijo					
Module/course code	Student workload	Credits (ECTS)	Semester	Frequency	Duration
JP 127	2 credits = 80 hours	2x50 minute	2nd Semester	16 classes/semester	1 semester
Types of Course		Contact hours	Independent study	Class size	
Study Program-Based Core Professional Courses		2 credits = 27 hours	2 credits = 53 hours	30 students	
Prerequisites for participation (if applicable)					
-					
Learning outcomes					
<p>The Nihon Jijo course is one of the compulsory subjects for all students in Japanese Language Education Department. This subject requires a broad general knowledge of Japan. therefore, students are required to read books related to Japan. The purpose of this course is for students to accumulate knowledge related to the state of Japan.</p> <ul style="list-style-type: none"> - Contribute to improving the quality of life of society, nation, state, and progress of change based on Pancasila. - Master basic concepts of language, language skills, language learning, language research, and Japanese language education research. - Able to apply logical, critical, systematic, and innovative thinking in the context of the development or implementation of science and technology that pays attention to and applies humanities values in the field of Japanese language education. <p>S1 Believe in God Almighty and be able to show a religious attitude.</p> <p>S4 as citizens who are proud and love the country, have nationalism and a sense of responsibility to the state and nation.</p> <p>S9 Demonstrate an attitude of responsibility for work in their field of expertise independently.</p> <p>S11 Be scientific, educative and religious in attitude and behaviour.</p> <p>S12 Compassionate and foster care in a work environment and social life that has a global competitive and comparative advantage.</p> <p>P2 Master the theoretical concepts of Japanese language, linguistics, and culture and its' research in the context of Japanese language teaching and learning.</p> <p>KU7 Able to be responsible for the achievement of group work and to supervise and evaluate the completion of work assigned to workers under their responsibility.</p> <p>KU8 Able to carry out the self-evaluation process of the work group under their responsibility, and able to manage learning independently.</p> <p>KK1 Able to study and apply the theoretical concepts of Japanese as a foreign language equivalent to the B2 CEFR (The Common European Framework of Reference for Languages) and JF Standard (Japan Foundation Standard) level.</p>					

Subject aims/Content

Week 1

Students understand the lecture syllabus which contains the objectives and the scope of the course, policy of lectures, assignments and assessment of the Nihon Jijo course

- Semester learning plan discussion
- Introduction to Nihon Jijo lectures

Week 2

Students are able to possess knowledge about the geography of Japan

- Geography: nature, seasons, *To Do Fu Ken*, mountains and rivers

Week 3

Students are able to possess knowledge about the Japanese life in terms of food (culinary)

- Japanese life: food (culinary)

Week 4

Students are able to possess knowledge about the Japanese life in terms of clothes

- Clothes in Japan

Week 5

Students are able to possess knowledge about the Japanese life in terms of houses

- Houses in Japan

Week 6

Students are able to possess knowledge about the annual festivals in Japan

- Festivals in Japan
- Traditional celebration

Week 7

Students are able to possess knowledge about “Education” in Japan

- Education in Japan

Week 8

Mid Semester Examination

Week 9

Students are able to possess knowledge about “Sports” in Japan

- Exercises

Week 10

Students are able to possess knowledge about Japanese Government

- Japanese Government

Week 11

Students are able to possess knowledge about “Economy” in Japan
- Economics

Week 12

Students are able to possess knowledge about “Industry” in Japan
- Japan’s Industries

Week 13

Students are able to possess knowledge about “Transportations” in Japan
- Transportation

Week 14

Students are able to possess knowledge about Japan’s environment such as pollution etc.
- Pollution and Environment

Week 15

Students are able to possess knowledge about Religion/Beliefs in Japan
-Religion/Beliefs

Week 16

End Semester Examination

Teaching Methods

lectures, discussions, seminars and online learning

Assessment methods

mid semester examination, end semester examination, assignments, course attendance and participation

This module/course is used in the following study programme/s as well

-

Responsibility for module/course

Compulsory

Bibliographical References

- Tanoshiku Yomeru Nihon no Kurashi 12 ka getsu, Aruku: Japan.
- Takamatsu, (1991) Nihon Seikatsu, Jijou: Tokyo Japan
- Gendai Nihonjijo
- Kamus Istilah Masyarakat dan kebudayaan Jepang
- Nihonjijo nyuumon



STBA YAPARI-ABA BANDUNG

PRODI BAHASA JEPANG

Kode
Dokumen

RENCANA PEMBELAJARAN SEMESTER

MATA KULIAH (MK)	KODE	RUMPUN MK	BOBOT	SEMESTER	Tanggal Penyusunan
Nihonjijou	C54402	MKK	2 SKS	I	25 September 2020
OTORISASI / PENGESAHAN Dr. Titien Rostini, M.Hum.	Dosen Pengembang RPS		Koordinator RMK	Ketua Program Studi	
	Maria Gustini, M.Pd., M.A.		Asep Muchlisian, M.Pd.	Ari Rahmat Utama A., M.Pd.	
Capaian Pembelajaran	CPL PRODI yang dibebankan pada MK				
	S5	Menghargai keanekaragaman budaya, pandangan, agama, dan kepercayaan, serta pendapat atau temuan orisinal orang lain			
	S9	Menunjukkan sikap bertanggungjawab atas pekerjaan di bidang keahliannya secara mandiri;			
	S12	Menginternalisasi etika dan budaya Jepang yang selaras dengan nilai-nilai Pancasila			
	P4	Menguasai pengetahuan mengenai budaya dan masyarakat Jepang			
	KK3	Mampu menerapkan pengetahuan budaya dan masyarakat Jepang dalam komunikasi lintas budaya			
	KU2	Mampu menunjukkan kinerja mandiri, bermutu, dan terukur			
	KU8	Mampu melakukan proses evaluasi diri terhadap kelompok kerja yang berada dibawah tanggung jawabnya, dan mampu mengelola pembelajaran secara mandiri			
	Capaian Pembelajaran Mata Kuliah (CPMK)				
CPMK1	Mampu memahami sejarah dan kebudayaan Jepang dalam kaitannya dengan perkembangan dan pemakaian bahasa Jepang, struktur masyarakat Jepang, dan gambaran umum kehidupan di Jepang (S5,S9,S12,P4,KK3,KU2,KU8)				
CPMK2	Mampu memilah dan memilih budaya dan kebiasaan Jepang yang bisa diaplikasikan dalam masyarakat Indonesia (S5,S9,S12,P4,KK3,KU2,KU8)				
CPMK3	Mampu memahami aspek-aspek sejarah dan budaya bangsa Jepang yang berkaitan dengan kaidah penggunaan bahasa Jepang (S5,S9,S12,P4,KK3,KU2,KU8)				

	CPMK4	Mampu menyimpulkan dan menyampaikan kembali suatu informasi dengan menggunakan bahasa Jepang yang telah dikuasai (S5,S9,S12,P4,KK3,KU2,KU8)
	CPL => CPMK => Sub-CPMK	
	Sub-CPMK 1	Mampu memahami sejarah Jepang dan kanji
	Sub-CPMK 2	Mampu memahami keadaan geografis dan iklim
	Sub-CPMK 3	Mampu memahami kehidupan sehari-hari masyarakat Jepang
	Sub-CPMK 4	Mampu memahami tradisi masyarakat Jepang
	Sub-CPMK 5	Mampu memahami seni masyarakat Jepang
	Sub-CPMK 6	Mampu memahami perbedaan dan persamaan antara budaya Jepang dengan Indonesia
	Sub-CPMK 7	Mampu memahami sejarah dan budaya yang berkaitan dengan perkembangan bahasa Jepang
	Sub-CPMK 8	Mampu memahami system pemerintahan Jepang
Deskripsi Singkat Mata Kuliah	Mata kuliah ini membahas sejarah Jepang; sejarah masuknya kanji; kondisi geografis dan iklim Jepang; pembagian daerah administrasi pemerintahan di Jepang; aktivitas harian masyarakat Jepang; festival serta kesenian tradisional Jepang dan lain-lain	
Bahan Kajian : Materi Pembelajaran	<ol style="list-style-type: none"> 1. Sejarah Jepang dan kanji 2. Keadaan geografis dan iklim 3. Sistem pemerintahan Jepang 4. Kehidupan sehari-hari masyarakat Jepang 5. Makanan Jepang 6. Tradisi masyarakat Jepang 7. Seni masyarakat Jepang 	
Pustaka	<p>Utama :</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Usuda, Atsuko. (1993). <i>Nihon no Kurashi 12kagatsu</i>. Japan: Apurikotto 2. Setsuko Kanemoto. (2002). <i>Nihon Bunka no Mitsukekata</i>. Japan: Ibaraki University <p>Pendukung :</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. Video dan artikel terkait budaya Jepang 	
Dosen Pengampu	Maria Gustini, M.Pd., M.A.	
Mata Kuliah Syarat	-	

Mg ke-	Sub-CPMK (sbg kemampuan akhir yang diharapkan)	Penilaian		Bentuk Pembelajaran; Metode Pembelajaran; Penugasan Mahasiswa; [Estimasi Waktu]		Materi Pembelajaran [Pustaka]	Bobot Penilaian (%)
		Indikator	Kriteria & Bentuk	Tatap Muka	Daring		
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
1,2	Mampu memahami sejarah Jepang	<p>Pemahaman pembagian sejarah Jepang berdasarkan zaman</p> <p>Kebudayaan yang dihasilkan oleh masing-masing zaman</p>	<p>Kriteria: Pemahaman konsep, pemaparan dalam bentuk lisan maupun tulisan mengenai materi</p> <p>Bentuk non-test:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Presentasi kelompok • Pertanyaan lisan di akhir perkuliahan 	<p>TM: 1x(2x50")</p> <ul style="list-style-type: none"> • Bentuk: Kuliah • Metode: Pembelajaran Berbasis Teks, diskusi 	Upload Tugas di Google classroom	<p>Pemaparan RPS dan Kontrak Pembelajaran</p> <p>Presentasi kelompok dan handout mengenai pembagian zaman dan kebudayaan yang dihasilkan pada masing-masing zaman</p>	5
3	Mampu memahami sejarah Jepang dan kanji	<p>Pemahaman sejak kapan masuknya kanji</p> <p>Pembagian kanji dan pemakaian dalam kehidupan sehari-hari</p>	<p>Kriteria: Pemahaman konsep, pemaparan dalam bentuk lisan maupun tulisan mengenai materi</p> <p>Bentuk non-test:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Presentasi kelompok • Pertanyaan lisan di akhir perkuliahan 	<p>M: 1x(2x50")</p> <ul style="list-style-type: none"> • Bentuk: Kuliah • Metode: Pembelajaran Berbasis Teks, diskusi 	Upload Tugas di Google classroom	Sejarah masuknya kanji, pembagian dan pemakaian kanji dalam kehidupan sehari-hari	5
4,5	<p>Mampu memahami keadaan geografis dan iklim</p> <p>Mampu memahami system pemerintahan Jepang</p>	<p>Pemahaman keadaan geografis dan iklim di Jepang</p> <p>Pemahaman mengenai system pemerintahan dan partai politik di Jepang</p>	<p>Kriteria: Pemahaman konsep, pemaparan dalam bentuk lisan maupun tulisan mengenai materi</p> <p>Bentuk non-test:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Presentasi kelompok • Pertanyaan lisan di akhir perkuliahan 	<p>M: 1x(2x50")</p> <ul style="list-style-type: none"> • Bentuk: Kuliah • Metode: Pembelajaran Berbasis Teks, diskusi 	Upload Tugas di Google classroom	<p>Pembagian musim di Jepang, keadaan geografis, pembagian To-Do-Fu-Ken</p> <p>Sistem pemerintahan dan partai politik</p>	10
6, 7	Mampu memahami kehidupan sehari-hari masyarakat Jepang	<p>Ketepatan pemahaman mengenai Ofuro, onsen, ryoukan</p> <p>Ketepatan pemahaman mengenai oshoshiki, , judou, pachinko</p>	<p>Kriteria: Pemahaman konsep, pemaparan dalam bentuk lisan maupun tulisan mengenai materi</p> <p>Bentuk non-test:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Presentasi kelompok 	<p>M: 1x(2x50")</p> <ul style="list-style-type: none"> • Bentuk: Kuliah • Metode: Pembelajaran Berbasis Teks, diskusi 	Upload Tugas di Google classroom	Sejarah mengenai ofuro, onsen, ryoukan oshoshiki, , judou, pachinko	10

Mg ke-	Sub-CPMK (sbg kemampuan akhir yang diharapkan)	Penilaian		Bentuk Pembelajaran; Metode Pembelajaran; Penugasan Mahasiswa; [Estimasi Waktu]		Materi Pembelajaran [Pustaka]	Bobot Penilaian (%)
		Indikator	Kriteria & Bentuk	Tatap Muka	Daring		
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
			<ul style="list-style-type: none"> Pertanyaan lisan di akhir perkuliahan 				
8	Ujian Tengah Semester (UTS) (20)						
9, 10	<p>Mampu memahami tradisi masyarakat Jepang</p> <p>Mampu memahami perbedaan dan persamaan antara budaya Jepang dengan Indonesia</p>	<p>Ketepatan pemahaman mengenai tradisi masyarakat Jepang oshogatsu, obon</p> <p>Ketepatan pemahaman mengenai tradisi masyarakat Jepang hina matsuri, koinobori</p>	<p>Kriteria: Pemahaman konsep, pemaparan dalam bentuk lisan maupun tulisan mengenai materi</p> <p>Bentuk non-test:</p> <ul style="list-style-type: none"> Presentasi kelompok Pertanyaan lisan di akhir perkuliahan 	<p>M: 1x(2x50")</p> <ul style="list-style-type: none"> Bentuk: Kuliah Metode: Pembelajaran Berbasis Teks dan diskusi 	<p>Upload Tugas di Google classroom</p>	<p>Definisi oshogatsu, obon, kegiatan yang dilakukan pada waktu tsb</p> <p>Definisi oshogatsu, obon, kegiatan yang dilakukan pada waktu tsb</p>	10
11, 12, 13	<p>Mampu memahami tradisi masyarakat Jepang</p> <p>Mampu memahami perbedaan dan persamaan antara budaya Jepang dengan Indonesia</p>	<p>Ketepatan pemahaman mengenai tradisi masyarakat Jepang tanabata, setsubun</p> <p>Ketepatan pemahaman mengenai tradisi masyarakat Jepang shichi, go, san, seijin shiki</p> <p>Ketepatan pemahaman mengenai tradisi masyarakat Jepang kabuki, noh</p>	<p>Kriteria: Pemahaman konsep, pemaparan dalam bentuk lisan maupun tulisan mengenai materi</p> <p>Bentuk non-test:</p> <ul style="list-style-type: none"> Presentasi kelompok Pertanyaan lisan di akhir perkuliahan 	<p>M: 1x(2x50")</p> <ul style="list-style-type: none"> Bentuk: Kuliah Metode: Pembelajaran Berbasis Teks dan diskusi 	<p>Upload Tugas di Google classroom</p>	<p>Definisi tanabata, setsubun, kegiatan yang dilakukan pada waktu tsb</p> <p>Definisi shichi, go, san, seijin shiki, kegiatan yang dilakukan pada waktu tsb</p> <p>Definisi dan sejarah kabuki, noh</p>	15
14	Mampu memahami kehidupan sehari-hari masyarakat Jepang	Ketepatan pemahaman mengenai budaya makan dan makanan masyarakat Jepang	<p>Kriteria: Pemahaman konsep, pemaparan dalam bentuk lisan maupun tulisan mengenai materi</p> <p>Bentuk non-test:</p>	<p>M: 1x(2x50")</p> <ul style="list-style-type: none"> Bentuk: Kuliah Metode: 	<p>Upload Tugas di Google classroom</p>	Budaya makan dan Jenis makanan Jepang	5

Mg ke-	Sub-CPMK (sbg kemampuan akhir yang diharapkan)	Penilaian		Bentuk Pembelajaran; Metode Pembelajaran; Penugasan Mahasiswa; [Estimasi Waktu]		Materi Pembelajaran [Pustaka]	Bobot Penilaian (%)
		Indikator	Kriteria & Bentuk	Tatap Muka	Daring		
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
	Mampu memahami perbedaan dan persamaan antara budaya Jepang dengan Indonesia		<ul style="list-style-type: none"> • Presentasi kelompok • Pertanyaan lisan di akhir perkuliahan 	Pembelajaran Berbasis Teks dan diskusi			
15	<p>Mampu memahami seni masyarakat Jepang</p> <p>Mampu memahami perbedaan dan persamaan antara budaya Jepang dengan Indonesia</p>	Ketepatan pemahaman mengenai seni masyarakat Jepang, dan persamaan juga perbedaan budaya Jepang dengan Indonesia	<p>Kriteria: Pemahaman konsep, pemaparan dalam bentuk lisan maupun tulisan mengenai materi</p> <p>Bentuk non-test:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Presentasi kelompok • Pertanyaan lisan di akhir perkuliahan 	<p>M: 1x(2x50")</p> <ul style="list-style-type: none"> • Bentuk: Kuliah • Metode: Pembelajaran Berbasis Teks dan diskusi 	Upload Tugas di Google classroom	Sejarah kabuki dan noh	5
16	Ujian Akhir Semester (UAS) (20)						

SILABUS

I. IDENTIFIKASI MATA KULIAH

Nama Mata Kuliah	:	Nihon Jijo
Kredit	:	2
Semester	:	1
Tingkat	:	1
Program Studi	:	Sastra Jepang
Jurusan	:	-
Dosen	:	Pitri Haryanti,M.Pd

II. DESKRIPSI SINGKAT MATA KULIAH

Matakuliah ini mengajarkan tentang keadaan Jepang mulai dari letak geografi, ekonomi, industri, seni, budaya, pendidikan, kependudukan, politik juga mengetahui tentang cara berpikir orang Jepang serta perkembangan hubungan negara Jepang dengan dunia luar. dan sistem kehidupan orang Jepang secara umum

III. TUJUAN INSTRUKSIONAL

Setelah mengikuti mata kuliah ini, mahasiswa mampu memahami tentang keadaan Jepang mulai dari letak geografi, ekonomi, industri, seni, budaya, pendidikan, kependudukan, politik juga mengetahui tentang cara berpikir orang Jepang serta perkembangan hubungan negara Jepang dengan dunia luar. dan sistem kehidupan orang Jepang secara umum

IV. METODE PERKULIAHAN

Ceramah, diskusi, tanya jawab dan presentasi

V. SISTEMATIKA PENILAIAN

- Nilai Akhir (NA) = 10% Absen + 10% Quiz + 10% Tugas + 30% UTS + 40% UAS
- Bobot Penilaian

INDEKS	NILAI
A	$80 \subseteq NA$
B	$68 \subseteq NA \subseteq 79$
C	$55 \subseteq NA \subseteq 67$
D	$45 \subseteq NA \subseteq 54$
E	$0 \subseteq NA \subseteq 44$

VI. MATERI PERKULIAHAN

Minggu ke	Materi Perkuliahan	Referensi
-----------	--------------------	-----------

1.	Letak Geografis Jepang	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
2.	Sejarah Jepang	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
3.	Tempat Tinggal dan Kebiasaan Orang Jepang	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
4.	Transportasi dan Telekomunikasi	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
5.	Pola Makan dan Pakaian Tradisional Jepang	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
6.	Bahasa Jepang dan Ungkapan Sehari-hari	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
7.	Pendidikan Jepang	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
8.	Ujian Tengah Semester	
9.	Pemerintahan	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
10.	Ekonomi, Industri, Teknologi dan Hasil Bumi Jepang	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
11.	Alat Musik dan Budaya Tradisional Jepang	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
12.	Olah Raga	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
13.	Kesusatraan Jepang	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
14.	Agama dan kepercayaan	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
15.	Siklus Hidup orang Jepang	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
16.	Ujian Akhir Semester	

VII. PUSTAKA ACUAN

Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd

VIII. MEDIA YANG DIPERLUKAN PESERTA KULIAH

LCD, Komputer, Gambar, Spidol, Whiteboard



**UNIVERSITAS UDAYANA
FAKULTAS ILMU BUDAYA
PROGRAM STUDI SASRA JEPANG**

KODE DOKUMEN
.....

RENCANA PEMBELAJARAN SEMESTER

		MATA KULIAH (MK)				SEMESTER		Tgl Penyusunan	
		KODE	Rumpun MK	BOBOT (sks)					
NIHON JIJO		SAJ2040	BUDAYA JEPANG	2 SKS	III		30 Oktober 2020		
OTORISASI		Dosen Pengembang RPS		Koordinator MK	Koordinator Program Studi				
		NI LUH PUTU ARI SULATRI, S.S.,M.SI	NI LUH PUTU ARI SULATRI, S.S.,M.SI		NGURAH INDRRA PRADHANA, S.S.,M.HUM.				
Capaian Pembelajaran (CP)		CPL- PRODI							
S12	Responsif terhadap dampak penyelesaian permasalahan bahasa, sastra dan sosial budaya terhadap masyarakat, lingkungan dan global.								
S13	Peka terhadap masalah kebahasaan, kesusastraan dan sosial budaya.								
P1	Menguasai konsep dalam bidang budaya dan pranata sosial Jepang serta mampu memformulasikan penyelesaian masalah secara prosedural.								
KU1	Mampu menerapkan pemikiran logis, kritis, sistematis, dan inovatif dalam konteks pengembangan atau implementasi ilmu pengetahuan dan teknologi yang memperhatikan dan menerapkan nilai humaniora.								
KK13	Mampu mengaplikasikan konsep budaya untuk memahami fenomena sosial budaya pada masyarakat berbahasa Jepang.								
		CPMK							
M1	Mahasiswa mampu memabarkan kondisi geografi Jepang								
M2	Mahasiswa mampu menguraikan sistem pembagian wilayah di Jepang								
M3	Mahasiswa mampu menjabarkan sistem religi dalam masyarakat Jepang								
M4	Mahasiswa mampu menguraikan festival / perayaan khusus di Jepang								
M5	Mahasiswa mampu menjabarkan budaya berpakaian di Jepang								
M6	Mahasiswa mampu menguraikan budaya makanan dalam masyarakat Jepang								
M7	Mahasiswa mampu menjabarkan sistem tempat tinggal di Jepang								
M8	Mahasiswa mampu menguraikan sistem transportasi di Jepang								

M9	Mahasiswa mampu menjabarkan olah raga tradisional dan populer di Jepang
M10	Mahasiswa mampu menjabarkan jenis-jenis hiburan populer di Jepang
M11	Mahasiswa mampu menjabarkan jenis-jenis budaya tradisional Jepang
M12	Mahasiswa mampu menguraikan jenis-jenis budaya kontemporer Jepang
Deskripsi singkat MK	Mata kuliah <i>Nijon Jijo</i> merupakan mata kuliah yang memberikan pemahaman mengenai geografi, demografi, dan produk kebudayaan tradisional serta kontemporer di Jepang
Bahan Kajian/Materi Pembelajaran/ Pokok Bahasan	<ol style="list-style-type: none"> 1. Lingkungan alam Jepang, pulau-pulau utama di Jepang, dan pembagian musim di Jepang 2. Sistem todofuken dan ciri khas dari masing-masing perfektur di Jepang 3. Sejarah dan perkembangan Shinto, agama Budha, dan agama Kristen di Jepang, sinkretisme kepercayaan di Jepang, dan agama-agama baru dalam masyarakat Jepang 4. Festival atau perayaan khas dari bulan Januari hingga bulan Juni di Jepang 5. Festival atau perayaan khas dari bulan Juli hingga bulan Desember di Jepang 6. Jenis-jenis pakaian tradisional Jepang, pengaruh musim terhadap budaya berpakaian masyarakat Jepang, kedudukan Jepang dalam perkembangan fashion di dunia 7. Pola makan masyarakat Jepang, jenis-jenis makanan dan minuman tradisional Jepang, dan jenis-jenis tempat makan di Jepang 8. Jenis tempat tinggal di Jepang, bagian dalam rumah tradisional di Jepang, dan sistem penyewaan tempat tinggal di Jepang 9. Sarana dan prasarana transportasi darat, laut, serta udara di Jepang 10. Jenis olahraga tradisional Jepang: Sumo, Judo, Karate, Kendo, dan Kyudo 11. Jenis olahraga modern populer di Jepang: Sepakbola dan Baseball 12. Sejarah dan perkembangan karaoke dan pachinko di Jepang 13. Sejarah dan perkembangan ikebana, sado, dan shodo 14. Sejarah dan perkembangan drama, film, dan musik kontemporer di Jepang
Referensi	<p>Utama</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 Mizue, Sasaki. 1999. <i>Nihon Jijo Nyumon</i>. Tokyo: Aruku 2 Atsuko, U., Ayako, U., Yukiko, S., Masako, H., dan Reiko, M. 1993. <i>Tanoshiku Yomeru Nihon no Kurashi 12 kagetsu</i>. Tokyo: Kyobundo 3 Danandjaja, James. 1997. <i>Foklor Jepang: Dilihat dari Kacamata Orang Indonesia</i>. Jakarta: P. T. Pustaka Utama Grafiti

Pendukung						
	1					
	2					
	Dst					
Media Pembelajaran	Perangkat Lunak		Perangkat Keras:			
	MS Word; MS Power Point; Youtube		PC, Flash Disk, LCD, and Projector			
Dosen Pengampu	Ni Luh Putu Ari Sulatri, S.S.M.Si.					
	Dr. Ida Ayu Laksmita Sari, S.Hum., M.Hum.					
Minggu ke	Sub-CPMK (Kemampuan akhir yang diharapkan)	Indikator	Kriteria dan Bentuk Penilaian	Bentuk, Metode Pembelajaran dan Penugasan serta Alokasi Waktu	Materi Pembelajaran dan Pustaka	Bobot Penilaian (%)
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
1	Mahasiswa mampu menjabarkan kondisi geografi Jepang	Ketepatan menjabarkan : 1. Lingkungan alam Jepang, 2. pulau-pulau utama di Jepang, 3. pembagian musim di Jepang	Kriteria : 1. Rubrik Penilaian Makalah 2. Rubrik Penilaian Presentasi Bentuk non-test : 1. Makalah Berkelompok 2. Presentasi Kelompok	1. Kuliah & Diskusi (2x50menit): - Pemaparan Materi - Penayangan Video - Small Group Discussion 2. Tugas Terstruktur (2x60menit) 3. Tugas Mandiri (2x60 menit)	Referensi Utama 1, 2, 3	5%
2	Mahasiswa mampu menguraikan sistem pembagian wilayah di Jepang	1. Sistem todofuken 2. ciri khas dari masing-masing perfektur di Jepang	Kriteria : 1. Rubrik Penilaian Makalah 2. Rubrik Penilaian Presentasi	1. Kuliah & Diskusi (2x50menit) - Pemaparan Materi - Penayangan Video	Sumber referensi utama 1, 2, 3	10%

3	Mahasiswa mampu menjabarkan sistem religi dalam masyarakat Jepang	<ol style="list-style-type: none"> Sejarah perkembangan Shinto, agama Budha, dan agama Kristen di Jepang sinkretisme kepercayaan di Jepang, agama-agama baru dalam masyarakat Jepang 	<p>Bentuk non-test :</p> <ol style="list-style-type: none"> Makalah Berkelompok Presentasi Kelompok 	<ul style="list-style-type: none"> Small Group Discussion <ol style="list-style-type: none"> Tugas Terstruktur (2x60menit) Tugas Mandiri (2x60 menit) 	Sumber referensi utama 1, 2, 3	5%
4 & 5	Mahasiswa mampu menguraikan festival / perayaan khusus di Jepang	<ol style="list-style-type: none"> Festival atau perayaan khas dari bulan Januari hingga bulan Juni di Jepang Festival atau perayaan khas dari bulan Juli hingga bulan Desember di Jepang 	<p>Kriteria :</p> <ol style="list-style-type: none"> Rubrik Penilaian Makalah Rubrik Penilaian Presentasi <p>Bentuk non-test :</p> <ol style="list-style-type: none"> Makalah Berkelompok Presentasi Kelompok 	<ul style="list-style-type: none"> Kuliah & Diskusi (2x50menit) Pemaparan Materi Penayangan Video Small Group Discussion <ol style="list-style-type: none"> Tugas Terstruktur (2x60menit) Tugas Mandiri (2x60 menit) 	Sumber Referensi 1, 2, 3	15%

6	Mahasiswa mampu menjabarkan budaya berpakaian di Jepang	<ol style="list-style-type: none"> 1. Jenis-jenis pakaian tradisional Jepang, pengaruh musim terhadap budaya berpakaian masyarakat Jepang 2. kedudukan Jepang dalam perkembangan fashion di dunia 	<p>Kriteria :</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Rubrik Penilaian Makalah 2. Rubrik Penilaian Presentasi <p>Bentuk non-test :</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Makalah Berkelompok 2. Presentasi Kelompok 	<p>Kelompok</p> <p>3. Tugas Mandiri (2x60 menit)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Kuliah & Diskusi (2x50menit) <ul style="list-style-type: none"> - Pemaparan Materi - Penayangan Video - Small Group Discussion 2. Tugas Terstruktur (2x60menit) 3. Tugas Mandiri (2x60 menit) 	Sumber Referensi Utama 1, 2, 3	10%
7	Mahasiswa mampu menguraikan budaya makanan dalam masyarakat Jepang	<ol style="list-style-type: none"> 1. Pola makan masyarakat Jepang, 2. jenis-jenis makanan dan minuman tradisional Jepang, 3. jenis-jenis tempat makan di Jepang 	<p>Kriteria :</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Rubrik Penilaian Makalah 2. Rubrik Penilaian Presentasi <p>Bentuk non-test :</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Makalah Berkelompok 2. Presentasi Kelompok 	<p>Kelompok</p> <p>3. Tugas Mandiri (2x60 menit)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Kuliah & Diskusi (2x50menit) <ul style="list-style-type: none"> - Pemaparan Materi - Penayangan Video - Small Group Discussion 2. Tugas Terstruktur (2x60menit) 3. Tugas Mandiri (2x60 menit) 	Sumber Referensi Utama 1, 2, 3	10%

8	UTS				20%
9	Mahasiswa mampu menjabarkan sistem tempat tinggal di Jepang	<ol style="list-style-type: none"> Jenis tempat tinggal di Jepang, bagian dalam rumah tradisional di Jepang, sistem penyewaan tempat tinggal di Jepang 	<p>Kriteria :</p> <ol style="list-style-type: none"> Rubrik Penilaian Makalah Rubrik Penilaian Presentasi <p>Bentuk non-test :</p> <ol style="list-style-type: none"> Makalah Berkelompok Presentasi Kelompok 	<ol style="list-style-type: none"> Kuliah & Diskusi (2x50menit) <ul style="list-style-type: none"> Pemaparan Materi Penayangan Video Small Group Discussion Tugas Terstruktur (2x60menit) Tugas Mandiri (2x60 menit) 	Sumber Referensi Utama 1, 2, 3
10	Mahasiswa mampu menguraikan sistem transportasi di Jepang	Sarana dan prasarana transportasi darat, laut, serta udara di Jepang	<p>Kriteria :</p> <ol style="list-style-type: none"> Rubrik Penilaian Makalah Rubrik Penilaian Presentasi <p>Bentuk non-test :</p> <ol style="list-style-type: none"> Makalah Berkelompok Presentasi Kelompok 	<ol style="list-style-type: none"> Kuliah & Diskusi (2x50menit) <ul style="list-style-type: none"> Pemaparan Materi Penayangan Video Small Group Discussion Tugas Terstruktur (2x60menit) Tugas Mandiri (2x60 menit) 	Sumber Referensi 1, 2, 3
11 & 12	Mahasiswa mampu menjabarkan olah raga tradisional dan	1. Jenis olahraga tradisional Jepang: Sumo, Judo,	<p>Kriteria :</p> <ol style="list-style-type: none"> Rubrik Penilaian 	<ol style="list-style-type: none"> Kuliah & Diskusi (2x50menit) 	Sumber Referensi 1, 2, 3

	populer di Jepang	Karate, Kendo, dan Kyudo 2. Jenis olahraga modern populer di Jepang: Sepakbola dan Baseball	Makalah 2. Rubrik Penilaian Presentasi Bentuk non-test : 1. Makalah Berkelompok 2. Presentasi Kelompok	- Pemaparan Materi - Penayangan Video - Small Group Discussion 2. Tugas Terstruktur (2x60menit) 3. Tugas Mandiri (2x60 menit)		
13	Mahasiswa mampu menjabarkan jenis hiburan populer di Jepang	Sejarah perkembangan dan pachinko di Jepang dan karaoke	Kriteria : 1. Rubrik Penilaian Makalah 2. Rubrik Penilaian Presentasi Bentuk non-test : 1. Makalah Berkelompok 2. Presentasi Kelompok	1. Kuliah & Diskusi (2x50menit) - Pemaparan Materi - Penayangan Video - Small Group Discussion 2. Tugas Terstruktur (2x60menit) 3. Tugas Mandiri (2x60 menit)	Sumber Referensi 1, 2, 3	15%
14	Mahasiswa mampu menjabarkan jenis budaya tradisional Jepang	Sejarah dan perkembangan ikebana, sado, dan shodo	Kriteria : 1. Rubrik Penilaian Makalah 2. Rubrik Penilaian Presentasi Bentuk non-test : 1. Makalah	1. Kuliah & Diskusi (2x50menit) - Pemaparan Materi - Penayangan Video - Small Group Discussion	Sumber Referensi 1, 2, 3	15%

15	Mahasiswa mampu menguraikan jenis-jenis budaya kontemporer Jepang	Sejarah perkembangan film, dan kontemporer di Jepang	dan drama, musik	2. Presentasi Kelompok	2. Tugas Terstruktur (2x60menit) 3. Tugas Mandiri (2x60 menit)	Sumber Referensi 1, 2, 3	15%
16	UAS	Kriteria : 1. Rubrik Penilaian Makalah 2. Rubrik Penilaian Presentasi Bentuk non-test : 1. Makalah Berkelompok 2. Presentasi Kelompok			1. Kulliah & Diskusi (2x50menit) - Pemaparan Materi - Penayangan Video - Small Group Discussion 2. Tugas Terstruktur (2x60menit) 3. Tugas Mandiri (2x60 menit)		20%

Keterangan:

Penilaian pembelajaran

Nilai proses (60%):

- a. Review artikel & video : 20%
- b. Essay Mandiri dari studi kasus : 20%
- c. Makalah Kelompok : 10%
- d. Presentasi Kelompok : 10 %

Nilai hasil (40%):

- a. UTS (esai test) : 20%
- b. UAS (esai test) : 20%

Penelaah
Penjaminan Mutu Akademik Program Studi



(IDA AYU LAKSMITA SARI)

Penyusun RPS
Koordinator Mata Kuliah

(NI LUH PUTU ARI SULATRI)

Disahkan oleh
Koordinator Program Studi



(NGURAH INDRA PRADHANA)

		UNIVERSITAS HASANUDDIN, FAKULTAS ILMU BUDAYA, PROGRAM STUDI SAstra JEPANG				Kode Dokumen
RENCANA PEMBELAJARAN SEMESTER						
MATA KULIAH (MK)	KODE	Rumpun MK	BOBOT (sks)		SEMESTER	Tgl Penyusunan
Kejepangan II		Sejarah Budaya	T=?	P=?	1	Agustus 2020
OTORISASI	Pengembang RPS		Koordinator RMK		Ketua PRODI	
	Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph. D		Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph. D		Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph. D	
Capaian Pembelajaran (CP)	CPL-PRODI yang dibebankan pada MK					
	ELO	To understand multidisciplinary aspects of Japanese Studies				
	ELO	To identify multicultural diversity and the dynamic of globalization phenomenon				
	Capaian Pembelajaran Mata Kuliah (CPMK)					
	CLO	Mampu mengenali dan memahami dasar-dasar sejarah, budaya, dan keunikan budaya/masyarakat Jepang				
	CPL ⇒ Sub-CPMK					
	CPL-1	Mampu mengidentifikasi dasar sejarah, budaya, tradisi, sosial, politik dan ekonomi Jepang				
	CPL-2	Mampu mengidentifikasi akar dan dasar keunikan <i>life style</i> dan pemikiran masyarakat Jepang				
Deskripsi Singkat MK	Mata Kuliah ini pengajaran pengenalan keunikan, filosofi, budaya, dan etos kerja Jepang Mata kuliah ini akan mengajarkan mengenai pengenalan studi kejepangan/Japanology secara multi disipliner Pengidentifikasian keunikan-keunikan sejarah, bangsa, agama dan budaya Jepang					
Bahan Kajian / Materi Pembelajaran	<ol style="list-style-type: none"> 1. Pengenalan sejarah, geografi, kebudayaan dan sosial masyarakat Jepang 2. Pengenalan Globalisasi produk sebagai ciri khas Monozukuri 3. Globalisasi J-pop sebagai dan globalisasi soft power Jepang 4. Pengenalan Gaya Hidup Masyarakat Jepang 5. Pengenalan Pendidikan Jepang 6. Lain-lainnya, misalnya situasi Jepang Saat ini 					
Pustaka	Utama :					
	Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan) Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Youtube J-Pop					

	Pendukung : The Way of Life in Japan Audio Visual yang berkaitan dengan kejepangan J-Pop yang terlink-kan dengan youtube dan media lainnya Youtube Hallyu dan lainnya. Podcast Metaze
Dosen Pengampu	Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph.D
Matakuliah syarat	Kejepangan I

Mg Ke-	Sub-CPMK (Kemampuan akhir tiap tahapan belajar)	Penilaian		Bentuk Pembelajaran, Metode Pembelajaran, Penugasan Mahasiswa, [Estimasi Waktu]		Materi Pembelajaran [Pustaka]	Bobot Penilaian (%)
		Indikator	Kriteria & Bentuk	Luring (<i>offline</i>)	Daring (<i>online</i>)		
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
1	Pendahuluan kontrak	Mahasiswa mengetahui dan memahami RPS mata kuliah Kejepangan 1	Memahami lingkup kegiatan dan materi mata kuliah Kejepangan 1	Bentuk : Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas pribadi untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 1	Bentuk : Kuliah dan Responsi TM (1x2x50") Metode : Discovery Learning	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
2	Pengenalan asal usul bangsa dan budaya Jepang untuk memahami filosofi bangsa. Mengenal istilah-istilah dalam kebudayaan Jepang	Mahasiswa mengetahui dan memahami filosofi bangsa serta istilah-istilah dalam kebudayaan Jepang	Mahasiswa memberikan respon untuk materi yang diberikan. Mahasiswa saling berpendapat agar memberikan pengetahuan eksternal mengenai asal-usul dan filosofi bangsa	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas yang aktif untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Mempelajari bahan ajar pada Menu Alur Pembelajaran di pertemuan 2	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%

3	Mengenali dasar-dasar geografi, kebudayaan dan kebiasaan Jepang dan masyarakatnya	Mahasiswa mengetahui dan memahami dasar-dasar geografi, kebudaya dan kebiasaan Jepang dan masyarakatnya.	Mahasiswa memberikan respon saat dilakukan diskusi mengenai hal-hal apa yang menarik dari kebudayaan dan kebiasaan Jepang yang tidak dimiliki oleh negara lain	Bentuk: Forum Kriteria: Menunjukkan keaktifan dalam berpendapat dalam diskusi untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Mempelajari bahan ajar pada Menu Alur Pembelajaran di pertemuan 3	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture The Way of Life in Japan	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
4	Mengenali sejarah Sakoku dan Samurai sosial masyarakat Jepang	Mahasiswa mengetahui dan memahami sejarah sakoku dan samurai sosial masyarakat di Jepang	Mahasiswa memberikan respon aktif berupa pertanyaan atau pendapat untuk memenuhi keingintahuan terhadap sejarah sakoku dan samurai	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas yang responsif untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Mempelajari bahan ajar pada Menu Alur Pembelajaran di pertemuan 4	Youtube Hallyu dan lainnya.	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
5	Pengenalan Globalisasi produk sebagai ciri khas Monozukuri	Mahasiswa mengetahui dan memahami globalisasi produk sebagai ciri khas Monozukuri	Mahasiswa memberikan respon aktif berupa pertanyaan jika ada yang ingin diketahui dari materi yang diberikan	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Mempelajari bahan ajar pada Menu Alur Pembelajaran di pertemuan 5	Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan)	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
6	Mengenali Globalisasi J-pop sebagai globalisasi soft power Jepang	Mahasiswa mengetahui dan memahami globalisasi J-pop sebagai globalisasi soft power Jepang	Mahasiswa memberikan respon aktif berupa pertanyaan dan saling menyatakan pendapat terhadap materi yang diberikan	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif berpendapat untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Mempelajari bahan ajar pada Menu Alur Pembelajaran di pertemuan 6	J-Pop yang terlink-kan dengan youtube dan media lainnya Youtube Hallyu dan lainnya Youtube J-Pop	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%

7	Pengenalan Gaya Hidup Masyarakat Jepang	Mahasiswa mengetahui dan memahami gaya hidup masyarakat Jepang	Mahasiswa memberikan respon aktif dalam berpendapat dan memberi pertanyaan. Mahasiswa dipersilakan untuk memberikan tanggapan mengenai gaya hidup masyarakat Jepang	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif memberi tanggapan dan pertanyaan untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Mempelajari bahan ajar pada Menu Alur Pembelajaran di pertemuan 7	Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan) Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Youtube Hallyu dan lainnya Audio Visual yang berkaitan dengan kejepangan	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
8	Evaluasi Tengah Semester / Ujian Tengan Semester						
9	Pengenalan Pendidikan Jepang	Mahasiswa mengetahui dan memahami pendidikan di Jepang	Mahasiswa memberikan respon aktif dalam memberikan pertanyaan dan pendapat mengenai pendidikan di Jepang	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif bertanya dan berpendapat untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Mempelajari bahan ajar pada Menu Alur Pembelajaran di pertemuan 9	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Audio Visual yang berkaitan dengan kejepangan	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
10	Mengenali situasi Jepang di masa Pandemi	Mahasiswa mengetahui dan memahami serta mencari tahu tentang situasi Jepang di masa Pandemi Covid-19	Mahasiswa aktif dalam memberikan pendapat, informasi, dan bertanya mengenai situasi Jepang	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif bertanya, berpendapat, dan berdiskusi untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Mempelajari bahan ajar pada Menu Alur Pembelajaran di pertemuan 10	Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan)	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
11	Pengenalan tarian-tarian Jepang	Mahasiswa mengetahui dan memahami tarian-tarian Jepang	Mahasiswa aktif dalam memberikan pertanyaan dan berpendapat	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif bertanya dan berpendapat untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Mempelajari bahan ajar pada Menu Alur Pembelajaran di pertemuan 11	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Audio Visual yang berkaitan dengan kejepangan	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%

12	Mengenali etos kerja di Jepang	Mahasiswa mengetahui dan memahami etos kerja di Jepang	Mahasiswa aktif dalam memberikan pertanyaan dan pendapat mengenai etos kerja di Jepang	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif bertanya dan berargumen untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Mempelajari bahan ajar pada Menu Alur Pembelajaran di pertemuan 12	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan) Japan Movie or Drama	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
13	Mengenali keunikan-keunikan yang dimiliki oleh negara Jepang	Mahasiswa mengetahui dan memahami keunikan-keunikan Jepang	Mahasiswa aktif dalam memberikan pertanyaan dan pendapat mengenai keunikan-keunikan Jepang	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif bertanya dan berargumen untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Mempelajari bahan ajar pada Menu Alur Pembelajaran di pertemuan 13	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Audio Visual yang berkaitan dengan kejepangan	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
14	Mengenali sistem politik dan ekonomi Jepang	Mahasiswa mengetahui dan memahami sistem politik dan ekonomi di Jepang	Mahasiswa aktif dalam memberikan pertanyaan dan pendapat mengenai sistem politik dan ekonomi Jepang	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif bertanya dan berargumen untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Mempelajari bahan ajar pada Menu Alur Pembelajaran di pertemuan 14	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan)	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
15	Mengenali pola pikir masyarakat Jepang	Mahasiswa mengetahui dan memahami pola pikir masyarakat Jepang	Mahasiswa aktif dalam memberikan pertanyaan, pendapat, serta berdiskusi mengenai pola pikir masyarakat Jepang	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif bertanya dan berargumen serta berdiskusi untuk mencapai sub CPMK	BM (1x2x60") SIKOLA → Mempelajari bahan ajar pada Menu Alur Pembelajaran di pertemuan 15	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Audio Visual yang berkaitan dengan kejepangan Japan Movie or Drama	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
16	Evaluasi Akhir Semester / Ujian Akhir Semester						

Catatan :

1. **Capaian Pembelajaran Lulusan PRODI (CPL-PRODI)** adalah kemampuan yang dimiliki oleh setiap lulusan PRODI yang merupakan internalisasi dari sikap, penguasaan pengetahuan dan ketrampilan sesuai dengan jenjang prodinya yang diperoleh melalui proses pembelajaran.
2. **CPL yang dibebankan pada mata kuliah** adalah beberapa capaian pembelajaran lulusan program studi (CPL-PRODI) yang digunakan untuk pembentukan/pengembangan sebuah mata kuliah yang terdiri dari aspek sikap, ketrampilan umum, ketrampilan khusus dan pengetahuan.
3. **CP Mata kuliah (CPMK)** adalah kemampuan yang dijabarkan secara spesifik dari CPL yang dibebankan pada mata kuliah, dan bersifat spesifik terhadap bahan kajian atau materi pembelajaran mata kuliah tersebut.
4. **Sub-CP Mata kuliah (Sub-CPMK)** adalah kemampuan yang dijabarkan secara spesifik dari CPMK yang dapat diukur atau diamati dan merupakan kemampuan akhir yang direncanakan pada tiap tahap pembelajaran, dan bersifat spesifik terhadap materi pembelajaran mata kuliah tersebut.
5. **Indikator penilaian** kemampuan dalam proses maupun hasil belajar mahasiswa adalah pernyataan spesifik dan terukur yang mengidentifikasi kemampuan atau kinerja hasil belajar mahasiswa yang disertai bukti-bukti.
6. **Kreteria Penilaian** adalah patokan yang digunakan sebagai ukuran atau tolok ukur ketercapaian pembelajaran dalam penilaian berdasarkan indikator-indikator yang telah ditetapkan. Kreteria penilaian merupakan pedoman bagi penilai agar penilaian konsisten dan tidak bias. Kreteria dapat berupa kuantitatif ataupun kualitatif.
7. **Bentuk penilaian:** tes dan non-tes.
8. **Bentuk pembelajaran:** Kuliah, Responsi, Tutorial, Seminar atau yang setara, Praktikum, Praktik Studio, Praktik Bengkel, Praktik Lapangan, Penelitian, Pengabdian Kepada Masyarakat dan/atau bentuk pembelajaran lain yang setara.
9. **Metode Pembelajaran:** Small Group Discussion, Role-Play & Simulation, Discovery Learning, Self-Directed Learning, Cooperative Learning, Collaborative Learning, Contextual Learning, Project Based Learning, dan metode lainnya yg setara.
10. **Materi Pembelajaran** adalah rincian atau uraian dari bahan kajian yg dapat disajikan dalam bentuk beberapa pokok dan sub-pokok bahasan.
11. **Bobot penilaian** adalah prosentasi penilaian terhadap setiap pencapaian sub-CPMK yang besarnya proposional dengan tingkat kesulitan pencapaian sub-CPMK tsb., dan totalnya 100%.
12. TM=Tatap Muka, PT=Penugasan terstruktur, BM=Belajar mandiri.

LOGO PT	PT Fakultas Departemen/Program Studi	
SILABUS SINGKAT		
MATA KULIAH	Nama	...
	Kode	...
	Kredit
	Semester
DESKRIPSI MATA KULIAH		
CAPAIAN PEMBELAJARAN MATA KULIAH (CPMK)		
1		
2		
3		
SUB CAPAIAN PEMBELAJARAN MATA KULIAH (Sub-CPMK)		
1		
2		
3		
4		
7		
8		
MATERI PEMBELAJARAN		
1		
2		
3		
4		
5		
6		
PUSTAKA		
PUSTAKA UTAMA		
	1.	
PUSTAKA PENDUKUNG		
PRASYARAT (Jika ada)		
.....		

LOGO PT	PT Fakultas Departemen/Program Studi				
RENCANA TUGAS MAHASISWA					
MATA KULIAH				
KODE	sk s	...	SEMESTE R
DOSEN PENGAMPU				
BENTUK TUGAS			WAKTU Pengerjaan Tugas		
.....				
JUDUL TUGAS					
.....					
SUB CAPAIAN PEMBELAJARAN MATA KULIAH					
.....					
DISKRIPSI TUGAS					
.....					
METODE Pengerjaan Tugas					
1.					
BENTUK DAN FORMAT LUARAN					
a. Obyek Garapan:					
b. Bentuk Luaran:					
1.					
INDIKATOR, KRETERIA DAN BOBOT PENILAIAN					
.....					
JADWAL PELAKSANAAN					
.....				
LAIN-LAIN					
.....					
DAFTAR RUJUKAN					
.....					

Pengertian 1 sks dalam BENTUK PEMBELAJARAN				Jam
a	Kuliah, Responsi, Tutorial			
	Tatap Muka	Penugasan Terstruktur	Belajar Mandiri	
	50 menit/minggu/semester	60 menit/minggu/semester	60 menit/minggu/semester	2,83
b	Seminar atau bentuk pembelajaran lain yang sejenis			
	Tatap muka		Belajar mandiri	
	100 menit/minggu/semester		70 menit/minggu/semester	2,83
c	Praktikum, praktik studio, praktik bengkel, praktik lapangan, penelitian, pengabdian kepada masyarakat, dan/atau bentuk pembelajaran lain yang setara			
	170 menit/minggu/semester			2,83



**UNIVERSITAS HASANUDDIN, FAKULTAS ILMU BUDAYA,
PROGRAM STUDI SASTRA JEPANG**

**Kode
Dokumen**

RENCANA PEMBELAJARAN SEMESTER

MATA KULIAH (MK)	KODE	Rumpun MK	BOBOT (sks)		SEMESTER	Tgl Penyusunan
Kejepangan II		Sejarah Budaya	T=?	P=?	1	Agustus 2020
OTORISASI	Pengembang RPS		Koordinator RMK		Ketua PRODI	
	Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph. D		Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph. D		Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph. D	
Capaian Pembelajaran (CP)	CPL-PRODI yang dibebankan pada MK					
		To understand multidisciplinary aspects of Japanese Studies				
		Memahami aspek-aspek multi disipliner dari studi kejepangan				
		To identify of multicultural diversity and the dynamic of globalization phenomenon				
		Mampu mengidentifikasi perbedaan multikultural dan dinamika fenomena globalisasi				
	Capaian Pembelajaran Mata Kuliah (CPMK)					
	CPMK	<ul style="list-style-type: none"> Mampu mengidentifikasi dan mengenali keunikan masyarakat Jepang termasuk etika kerja dalam masyarakat Mampu mengenali mengenai latar belakang budaya, dan dasar-dasar cara berpikir dan sosial-kemasyarakatan Jepang 				
	CPL → Sub-CPMK					
	CPL-1	Mengenali dan memahami dasar-dasar ilmu kejepangan termasuk geografi, klimatologi, sejarah, budaya, tradisi, sosial, politik dan ekonomi Jepang. Juga termasuk akan dibahas pariwisata Jepang yang populer untuk didatangi wisata asing, terutama dari Indonesia.				
	CPL-2	Mengidentifikasi akar dan dasar life style atau gaya hidup dan pemikiran masyarakat Jepang kontemporer				
CPL-3	Mengenali dasar-dasar perubahan sosial masyarakat Jepang kontemporer					
CPL-4	Mengidentifikasi dan membandingkan keunikan budaya Jepang sekaligus membandingkan dengan budaya lokal khususnya wilayah Sulawesi Selatan					
Deskripsi Singkat MK	Mata Kuliah ini kelanjutan Mata Kuliah Kejepangan I di semester genap. Pada mata kuliah ini mengajarkan kelanjutan dasar-dasar pengenalan studi kejepangan/Japonology yang merupakan pengantarbahasan yang akan diajarkan lebih detail pada mata kuliah tingkat master. Seperti, Pranata Sosial, Sejarah Jepang (Kuno, Modern dan Kontemporer) dan Sejarah Hubungan Indonesia Jepang. Mata kuliah ini memperkenalkan dan mendiskusikan kajian budaya, bahasa, sastra, dan sejarah Jepang tingkat dasar. Penyelenggaraan MK ini dilakukan secara blended learning; daring, luring dan menggunakan					

	Sikola.
Bahan Kajian / Materi Pembelajaran	Hal-hal dasar sehubungan dengan; 1. Lanjutan sejarah, geografi, sastra, kebudayaan dan sosial masyarakat Jepang dari MK Kejepangan I 2. Klimatologi serta harmonisasi Jepang dengan budaya dan tradisi Jepang 3. Membahas dan diskusi mengenai J-Pop sebagai lambang supremasi globalisasi soft power Jepang. 4. Pendidikan Jepang 5. Matsuri dan perayaan di Jepang 6. Budaya dan tradisi dalam sehari-hari 9. Dan lain-lainnya
Pustaka	Utama :
	Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan) Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Anime, Film dan J-Pop
	Pendukung :
	The Way of Life in Japan Audio Visual yang berkaitan dengan jepangan J-Pop yang terlink-kan dengan youtube dan media lainnya Channel-channel NHK World Channel-channel dari kanal berita
Dosen Pengampu	Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph.D
Matakuliah syarat	Kejepangan II

Mg Ke-	Sub-CPMK (Kemampuan akhir tiap tahapan belajar)	Penilaian		Bentuk Pembelajaran, Metode Pembelajaran, Penugasan Mahasiswa, [Estimasi Waktu]		Materi Pembelajaran [Pustaka]	Bobot Penilaian (%)
		Indikator	Kriteria & Bentuk	Luring (<i>offline</i>)	Daring (<i>online</i>)		
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
1	Pendahuluan	Mahasiswa mengetahui dan memahami RPS mata kuliah Kejepangan II	Bentuk : Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas pribadi untuk mencapai sub CPMK	Diskusi mengenai kontrak kuliah	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 1	Penjelasan Kontrak Kuliah	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
2	Dasar-dasar Sejarah dan Budaya Jepang (1)	Mahasiswa mengetahui dan memahami dasar-dasar Sejarah dan budaya Jepang	Bentuk : Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas pribadi untuk mencapai sub CPMK	Mahasiswa aktif bertanya dan berpendapat mengenai materi	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 2	Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Channel-channel NHK World	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
3	Dasar-dasar Sejarah dan Budaya Jepang (2)	Mahasiswa mengetahui dan memahami dasar-dasar Sejarah dan budaya Jepang	Bentuk : Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas pribadi dengan cara bertanya dan berpendapat untuk mencapai sub CPMK	Mahasiswa aktif bertanya, berpendapat, dan berdiskusi mengenai materi	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 3	Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Channel-channel NHK World	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
4	Anime dan J-Pop dalam kehidupan masyarakat Jepang (1)	Mahasiswa mengetahui dan memahami anime dan J-pop dalam kehidupan masyarakat Jepang	Kajian anime dan lagu atau MV J-pop yang berasal dari grup terkenal seperti Arashi, Hey Say Jump, dan beberapa solois lain	Melihat anime Melihat MV J-Pop	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 4	Anime, Film dan J-Pop J-Pop yang terlinkkan dengan youtube dan media lainnya	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
5	Anime dan J-Pop dalam	Mahasiswa	Kajian anime dan lagu atau MV J-pop	Melihat anime Melihat MV J-Pop	BM (1x2x60")	Anime, Film dan J-	Kehadiran

	kehidupan masyarakat Jepang (2)	mengetahui dan memahami anime dan J-pop dalam kehidupan masyarakat Jepang	yang berasal dari grup terkenal seperti Arashi, Hey Say Jump, dan beberapa solois lain	Melihat Youtube berupa vlog	SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 5	Pop J-Pop yang terlinkkan dengan youtube dan media lainnya	= 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
6	Film sebagai bahan kajian refleksi budaya Jepang (1)	Mahasiswa mengetahui dan memahami film sebagai bahan refleksi budaya Jepang	Kajian film dan diskusi film	Melihat Film	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 6	Film	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
7	Film sebagai bagian kajian refleksi budaya Jepang (2)	Mahasiswa mengetahui dan memahami film sebagai bahan refleksi budaya Jepang	Kajian film dan diskusi film	Berdiskusi mengenai film yang sudah ditonton	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 7	Film	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
8	Evaluasi Tengah Semester / Ujian Tengan Semester						20
9	Moral dan etika masyarakat Jepang dari sistem pendidikan Jepang (1)	Mahasiswa mengetahui dan memahami moral dan etika yang terbentuk dalam masyarakat Jepang akibat sistem pendidikan di Jepang	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif untuk mencapai sub CPMK	Mahasiswa aktif untuk bertanya, berpendapat mengenai moral dan etika yang mungkin saja direfleksikan melalui film atau video youtube	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 9	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
10	Moral dan etika masyarakat Jepang dari sistem pendidikan Jepang (2)	Mahasiswa mengetahui dan memahami moral dan etika yang terbentuk dalam masyarakat Jepang akibat sistem	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif untuk mencapai sub CPMK	Mahasiswa aktif untuk bertanya, berpendapat, dan berdiskusi mengenai materi	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 10	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%

		pendidikan di Jepang				Japanese Culture	
11	Sistem kekaisaran dan pemerintahan Jepang (1)	Mahasiswa mengetahui dan memahami sistem kekaisaran dan pemerintahan Jepang	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif untuk mencapai sub CPMK	Mahasiswa aktif untuk bertanya, berpendapat, dan berdiskusi mengenai materi	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 11	Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Channel-channel NHK World Channel-channel dari kanal berita	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
12	Sistem kekaisaran dan pemerintahan Jepang (2)	Mahasiswa mengetahui dan memahami sistem kekaisaran dan pemerintahan Jepang	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif untuk mencapai sub CPMK	Mahasiswa aktif untuk bertanya, berpendapat, dan berdiskusi mengenai materi	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 12	Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Channel-channel NHK World Channel-channel dari kanal berita	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
13	Monozukuri Jepang (1)	Mahasiswa mengetahui dan memahami Monozukuri Jepang	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif untuk mencapai sub CPMK	Mahasiswa aktif untuk bertanya dan berpendapat mengenai materi	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 13	Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Channel-channel NHK World Channel-channel dari kanal berita	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
14	Monozukuri Jepang (2)	Mahasiswa mengetahui dan memahami Monozukuri Jepang	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas individu yang aktif untuk mencapai sub CPMK	Mahasiswa aktif untuk bertanya dan berpendapat mengenai materi	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di Pertemuan 14	Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Channel-channel NHK World Channel-channel dari kanal berita	Kehadiran = 0.6% Alur Pembelajaran = 0.6%
15	Pengenalan Lintas Budaya Jepang dan Indonesia	Mahasiswa mengetahui dan mengenal bagaimana lintas	Bentuk: Non Test Kriteria: Menunjukkan tahapan aktifitas	Mahasiswa aktif untuk bertanya mengenai materi	BM (1x2x60") SIKOLA → Pelajari bahan ajar pada Menu Alur pembelajaran di	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events	Kehadiran = 0.6% Alur

		budaya antara Jepang dan Indonesia	individu yang aktif untuk mencapai sub CPMK		Pertemuan 15	Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture	Pembelajaran = 0.6%
16	Evaluasi Akhir Semester / Ujian Akhir Semester						

Catatan :

1. **Capaian Pembelajaran Lulusan PRODI (CPL-PRODI)** adalah kemampuan yang dimiliki oleh setiap lulusan PRODI yang merupakan internalisasi dari sikap, penguasaan pengetahuan dan ketrampilan sesuai dengan jenjang prodinya yang diperoleh melalui proses pembelajaran.
2. **CPL yang dibebankan pada mata kuliah** adalah beberapa capaian pembelajaran lulusan program studi (CPL-PRODI) yang digunakan untuk pembentukan/pengembangan sebuah mata kuliah yang terdiri dari aspek sikap, ketrampilan umum, ketrampilan khusus dan pengetahuan.
3. **CP Mata kuliah (CPMK)** adalah kemampuan yang dijabarkan secara spesifik dari CPL yang dibebankan pada mata kuliah, dan bersifat spesifik terhadap bahan kajian atau materi pembelajaran mata kuliah tersebut.
4. **Sub-CP Mata kuliah (Sub-CPMK)** adalah kemampuan yang dijabarkan secara spesifik dari CPMK yang dapat diukur atau diamati dan merupakan kemampuan akhir yang direncanakan pada tiap tahap pembelajaran, dan bersifat spesifik terhadap materi pembelajaran mata kuliah tersebut.
5. **Indikator penilaian** kemampuan dalam proses maupun hasil belajar mahasiswa adalah pernyataan spesifik dan terukur yang mengidentifikasi kemampuan atau kinerja hasil belajar mahasiswa yang disertai bukti-bukti.
6. **Kreteria Penilaian** adalah patokan yang digunakan sebagai ukuran atau tolok ukur ketercapaian pembelajaran dalam penilaian berdasarkan indikator-indikator yang telah ditetapkan. Kreteria penilaian merupakan pedoman bagi penilai agar penilaian konsisten dan tidak bias. Kreteria dapat berupa kuantitatif ataupun kualitatif.
7. **Bentuk penilaian:** tes dan non-tes.
8. **Bentuk pembelajaran:** Kuliah, Responsi, Tutorial, Seminar atau yang setara, Praktikum, Praktik Studio, Praktik Bengkel, Praktik Lapangan, Penelitian, Pengabdian Kepada Masyarakat dan/atau bentuk pembelajaran lain yang setara.
9. **Metode Pembelajaran:** Small Group Discussion, Role-Play & Simulation, Discovery Learning, Self-Directed Learning, Cooperative Learning, Collaborative Learning, Contextual Learning, Project Based Learning, dan metode lainnya yg setara.
10. **Materi Pembelajaran** adalah rincian atau uraian dari bahan kajian yg dapat disajikan dalam bentuk beberapa pokok dan sub-pokok bahasan.
11. **Bobot penilaian** adalah prosentasi penilaian terhadap setiap pencapaian sub-CPMK yang besarnya proposional dengan tingkat kesulitan pencapaian sub-CPMK tsb., dan totalnya 100%.
12. TM=Tatap Muka, PT=Penugasan terstruktur, BM=Belajar mandiri.

LOGO PT	PT	
	Fakultas Departemen/Program Studi	
SILABUS SINGKAT		
MATA KULIAH	Nama	Kejepangan II
	Kode	
	Kredit	2
	Semester	4
DESKRIPSI MATA KULIAH		
<p>Mata Kuliah ini kelanjutan Mata Kuliah Kejepangan I di semester genap. Pada mata kuliah ini mengajarkan kelanjutan dasar-dasar pengenalan studi kejepangan/Japonology yang merupakan pengantar bahasan yang akan diajarkan lebih detail pada mata kuliah tingkat master. Seperti, Pranata Sosial, Sejarah Jepang (Kuno, Modern dan Kontemporer) dan Sejarah Hubungan Indonesia Jepang. Mata kuliah ini memperkenalkan dan mendiskusikan kajian budaya, bahasa, sastra, dan sejarah Jepang tingkat dasar. Penyelenggaraan MK ini dilakukan secara blended learning; daring, luring dan menggunakan Sikola.</p>		
CAPAIAN PEMBELAJARAN MATA KULIAH (CPMK)		
1	Mampu mengenali mengenai latar belakang budaya, dan dasar-dasar cara berpikir dan sosial-kemasyarakatan Jepang	
2	Mampu mengidentifikasi dan mengenali keunikan masyarakat Jepang termasuk etika kerja dalam masyarakat	
SUB CAPAIAN PEMBELAJARAN MATA KULIAH (Sub-CPMK)		
1		
2		
3		
4		
7		
8		
MATERI PEMBELAJARAN		
1		
2		
3		
4		
5		
6		
PUSTAKA		
	PUSTAKA UTAMA	
	1.	
	PUSTAKA PENDUKUNG	
PRASYARAT (Jika ada)		
.....		

LOGO PT	PT			
	Fakultas Departemen/Program Studi			
RENCANA TUGAS MAHASISWA				
MATA KULIAH			
KODE	sks	...	SEMESTER
DOSEN PENGAMPU			
BENTUK TUGAS			WAKTU Pengerjaan Tugas	
.....			
JUDUL TUGAS				
.....				
SUB CAPAIAN PEMBELAJARAN MATA KULIAH				
.....				
DISKRIPSI TUGAS				
.....				
METODE Pengerjaan Tugas				
1.				
BENTUK DAN FORMAT LUARAN				
a. Obyek Garapan:				
b. Bentuk Luaran:				
1.				
INDIKATOR, KRETERIA DAN BOBOT PENILAIAN				
.....				
JADWAL PELAKSANAAN				
1.				
LAIN-LAIN				
.....				
DAFTAR RUJUKAN				
.....				

Pengertian 1 sks dalam BENTUK PEMBELAJARAN				Jam
a	Kuliah, Responsi, Tutorial			
	Tatap Muka	Penugasan Terstruktur	Belajar Mandiri	
	50 menit/minggu/semester	60 menit/minggu/semester	60 menit/minggu/semester	2,83
b	Seminar atau bentuk pembelajaran lain yang sejenis			
	Tatap muka		Belajar mandiri	
	100 menit/minggu/semester		70 menit/minggu/semester	2,83
c	Praktikum, praktik studio, praktik bengkel, praktik lapangan, penelitian, pengabdian kepada masyarakat, dan/atau bentuk pembelajaran lain yang setara			
	170 menit/minggu/semester			2,83

シラバス（日本語訳版）



バンドン YAPARI-ABA 外国語大学

日本文学学科

ドキュメントコード

一学期学習計画（シラバス）

科目	コード	科目類	単位	開講時期	作成日
日本事情	C54402	必修	2 単位	I	2020 年 10 月 25 日
承認	シラバスの開発者		コーディネーター	学科長	
	Dr. Titien Rostini, M.Hum.	Maria Gustini, M.Pd., M.A.	Asep Muchlisian, M.Pd.	Ari Rahmat Utama A., M.Pd.	
学習成果	学科からコースに期待する学習成果				
	S5	文化、視点、宗教・進行、他者の意見や発見の多様性を尊敬する。			
	S9	学問に合う仕事に責任を持つ。			
	S12	Pancasila（インドネシアの国是）に合った倫理や文化を応用できる。			
	P4	日本の社会や文化についての知識をもつ。			
	KK3	異文化コミュニケーションを行う際に、日本の文化や社会に関する知識を応用できる。			
	KU2	質のある独立作動が行える			
	KU8	グループワークに対する評価が行え、独立学習が管理できる。			
	コースの学習成果				
	CPMK1	日本語使用との関連性において、日本社会の構成、日本での生活、日本史と日本文化を理解することができる (S5,S9,S12,P4,KK3,KU2,KU8)。			
CPMK2	インドネシア社会に応用できる日本の習慣や文化を選択できる (S5,S9,S12,P4,KK3,KU2,KU8)。				
CPMK3	日本語使用に関わる日本史や日本文化の側面を理解することができる (S5,S9,S12,P4,KK3,KU2,KU8)。				

	CPMK4	獲得した情報について日本語でまとめ、伝えることができる(S5,S9,S12,P4,KK3,KU2,KU8)。
	コースの学習成果 (サブ)	
	Sub-CPMK 1	日本史と漢字の歴史を理解する。
	Sub-CPMK 2	地理と天候を理解する。
	Sub-CPMK 3	日本人の日常生活を理解することができる。
	Sub-CPMK 4	日本の伝統を理解することができる。
	Sub-CPMK 5	日本社会の芸を理解することができる。
	Sub-CPMK 6	日本とインドネシアの異文化について理解することができる。
	Sub-CPMK 7	日本語に関わる日本史と文化を理解することができる。
	Sub-CPMK 8	日本の政治のシステムを理解することができる。
コース概要	このコースでは日本史、日本への漢字の応用の歴史、日本の地理と天候、日本の都道府県の区分、日本社会の日常生活、伝統芸能や祭りなどを学習する。	
学習内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本史と漢字の歴史 2. 日本の地理と天候 3. 日本の政治のシステム 4. 日本社会の日常生活 5. 和食 6. 日本社会の伝統 7. 日本社会の芸能 	
教材	主教材: <ol style="list-style-type: none"> 1. Usuda, Atsuko. (1993). <i>Nihon no Kurashi 12kagatsu</i>. Japan: Apurikotto 2. Setsuko Kanemoto. (2002). <i>Nihon Bunka no Mitsukekata</i>. Japan: Ibaraki University 補助教材: <ol style="list-style-type: none"> 3. ビデオや日本に関わる記事 	
担当教師	Maria Gustini, M.Pd., M.A.	
履修条件	-	

週-	Sub-CPMK (期待される成果)	評価		学習形式；学習方法；タスク [時間] B		学習内容	評価率 (%)
		対象	基準・形式	対面	オンライン		
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
1,2	日本史を理解することができる	時代によって日本史の区分 各時代が果たした文化	基準: 概念の理解、学習について口頭形式や文書形式の叙述 非テスト形式 <ul style="list-style-type: none"> グループによる発表 授業が終わる際の質問 	TM: 1x(2x50") <ul style="list-style-type: none"> 形式: 講義 方法: テキストベース学習, ディスカッション 	Google Classroomへのアップロード	イントロダクションと授業の説明 時代の区分と各時代が果たした成果	5
3	日本史と日本の漢字を理解することができる	漢字の侵入についての理解 漢字の区分と日常生活における活用	基準: 概念の理解、学習について口頭形式や文書形式の叙述 非テスト形式 <ul style="list-style-type: none"> グループによる発表 授業が終わる際の質問 	TM: 1x(2x50") <ul style="list-style-type: none"> 形式: 講義 方法: テキストベース学習, ディスカッション 	Google Classroomへのアップロード	漢字の侵入についての歴史と漢字の区分と日常における使用	5
4,5	地理と天候に関わること理解することができる 日本の政治のシステムを理解することができる	日本の地理や天候に関する理解 日本の政治システムや政党についての理解	基準: 概念の理解、学習について口頭形式や文書形式の叙述 非テスト形式 <ul style="list-style-type: none"> グループによる発表 授業が終わる際の質問 	TM: 1x(2x50") <ul style="list-style-type: none"> 形式: 講義 方法: テキストベース学習, ディスカッション 	Google Classroomへのアップロード	日本での季節、地理、都道府県の区分 政治システムと政党	10
6,7	日本人の日常生活についてのことを理解することができる	お風呂、温泉、旅館についての理解 お組織、柔道、パチンコについての理解	基準: 概念の理解、学習について口頭形式や文書形式の叙述 非テスト形式 <ul style="list-style-type: none"> グループによる発表 授業が終わる際の質問 	TM: 1x(2x50") <ul style="list-style-type: none"> 形式: 講義 方法: テキストベース学習, ディスカッション 	Google Classroomへのアップロード	お風呂、温泉、旅館に関する歴史 お組織、受動、パチンコ	10

週-	Sub-CPMK (期待される成果)	評価		学習形式；学習方法；タスク [時間] B		学習内容	評価率 (%)
		対象	基準・形式	対面	オンライン		
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
8	中間試験 (20)						
9, 10	<p>日本社会の伝統を理解することができる</p> <p>文化においてインドネシアと日本についての類似点と相違点を理解することができる</p>	<p>お正月、お盆のような日本の伝統についての理解</p> <p>祭りや鯉のぼりなどについての日本社会の伝統についての理解</p>	<p>基準: 概念の理解、学習について口頭形式や文書形式の叙述</p> <p>非テスト形式</p> <ul style="list-style-type: none"> グループによる発表 授業が終わる際の質問 	<p>TM: 1x(2x50")</p> <ul style="list-style-type: none"> 形式: 講義 方法: テキストベース学習、ディスカッション 	Google Classroomへのアップロード	<p>お正月の定義、お盆、当時の活動</p> <p>お正月の定義、お盆、当時の活動</p>	10
11, 12, 13	<p>日本社会の伝統についてのことを理解することができる</p> <p>文化においてインドネシアと日本についての類似点と相違点を理解することができる</p>	<p>七夕、節分のような日本社会の伝統についての理解</p> <p>七五三、成人式、についての理解</p> <p>能、歌舞伎についての理解</p>	<p>基準: 概念の理解、学習について口頭形式や文書形式の叙述</p> <p>非テスト形式</p> <ul style="list-style-type: none"> グループによる発表 授業が終わる際の質問 	<p>TM: 1x(2x50")</p> <ul style="list-style-type: none"> 形式: 講義 方法: テキストベース学習、ディスカッション 	Google Classroomへのアップロード	<p>七夕、節分の定義、当時の活動</p> <p>七五三、成人式、当時の活動</p> <p>歌舞伎、能の歴史と背景</p>	15
14	<p>日本社会の日常を理解することができる</p> <p>文化において、インドネシアと日本</p>	<p>日本の食文化、食ること、和食についての理解</p>	<p>基準: 概念の理解、学習について口頭形式や文書形式の叙述</p> <p>非テスト形式</p> <ul style="list-style-type: none"> グループによる発表 授業が終わる際の質問 	<p>TM: 1x(2x50")</p> <ul style="list-style-type: none"> 形式: 講義 方法: 	Google Classroomへのアップロード	<p>食文化と和食の種類</p>	5

週-	Sub-CPMK (期待される成果)	評価		学習形式；学習方法；タスク [時間] B		学習内容	評価率 (%)
		対象	基準・形式	対面	オンライン		
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
	<p>の類似点と相違点を理解することができる</p> <p>文化において、インドネシアと日本の類似点と相違点を理解することができる</p>			<p>テキストベース学習, ディスカッション</p>			
15	<p>日本社会の芸能を理解することができる</p> <p>文化において、インドネシアと日本の類似点と相違点を理解することができる</p>	<p>日本社会におけるの芸能とインドネシアとの類似点と相違点に関する理解</p>	<p>基準: 概念の理解、学習について口頭形式や文書形式の叙述</p> <p>非テスト形式</p> <ul style="list-style-type: none"> グループによる発表 授業が終わる際の質問 	<p>TM: 1x(2x50")</p> <ul style="list-style-type: none"> 形式: 講義 方法: テキストベース学習, ディスカッション 	<p>Google Classroomへのアップロード</p>	<p>歌舞伎と能の歴史</p>	5
16	期末試験(20)						

インドネシアコンピューター大学 シラバス

I. コースの概要

コース名	:	日本事情
単位数	:	2
開講時期	:	1年前期
学年	:	1
学科名	:	日本文学
専攻	:	-
担当教師	:	Pitri Haryanti,M.Pd

II. コースでの学習概要

このコースでは日本の地理、経済、産業、芸能、文化、教育、文明、政治について学習する。そして、日本人の思考様式及び日本と他国の関係についても楽手する。そして、一般的な日本人の日常生活についても学習する。

III. コースの目的

このコースを受講した後、学生は日本の地理、経済、産業、芸能、文化、教育、文明、政治等を理解することができる。そして、日本人の思考様式や日本とタコ k との関係と一般的な日本人の日常生活を理解する。

IV. 授業の方法

講義、ディスカッション、発表と質疑応答

V. 評価システム

- 最終評価(NA) = 10% 出席 + 10% クイズ + 10% 課題 + 30% 中間テスト + 40% 期末テスト
- 評価の区分

成績評価	数値
A	$80 \subseteq NA$
B	$68 \subseteq NA \subseteq 79$
C	$55 \subseteq NA \subseteq 67$
D	$45 \subseteq NA \subseteq 54$
E	$0 \subseteq NA \subseteq 44$

VI. 授業の内容

週 1	授業の内容	参考文献
1.	日本の地理	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
2.	日本史	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
3.	住宅と日本人の習慣	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
4.	公共交通機関と通知システム	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
5.	食様式と伝統衣類	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
6.	日本語と日常の言い回し	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
7.	日本の教育	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
8.	中間テスト	
9.	政治	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
10.	経済、産業、技術と作物	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
11.	楽器と日本の伝統文化	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
12.	スポーツ	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
13.	日本文学	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
14.	宗教と信仰	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
15.	日本人のライフサイクル	Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd
16.	期末テスト	

VII. 参考文献

Handout All about Japan, Pitri Haryanti. M.Pd

VIII. メディア及び道具等

LCD, パソコン, 画像, ボードマーカー, ホワイトボード

		ウダヤナ大学 文化学学部 日本文学学科 一学期学習計画（シラバス）			ドキュメントコード		
コース名		コード	コース類	単位	履修時期	作成日	
日本事情		SAJ2040	日本文化	2	2年前期	2020年10月30日	
OTORISASI		シラバス開発者		コースコーディネーター		学科のコーディネーター	
		NI LUH PUTU ARI SULATRI, S.S.,M.SI		NI LUH PUTU ARI SULATRI, S.S.,M.SI		NGURAH INDRA PRADHANA, S.S.,M.HUM.	
学習成果(CP)	期待される成果						
	S12	言語、文学、社会文化に関わる問題の解決策から社会、環境、グローバルへの影響に対する感受性をもつ。					
	S13	言語、文学、社会文化に関わる問題に対する感受性をもつ。					
	P1	文化や社会領域に関わる概念を理解し、手続き的な解決策に移すことができる					
	KU1	ヒューマニスティックな価値を配慮し、知識及び技術開発コンテキストにおいて論理的かつ批判的かつ体系的かつ革新的な思考を持つ。					
	KK13	日本語を使う社会における社会文化現象を理解するために、文化の概念を応用できる。					
	コースの学習成果		学習者は日本の地理、人口統計、文化的な側面を理解する。				
	M1	学習者は日本の地理に関することが述べられる。					
	M2	学習者は都道府県の区分が述べられる。					
	M3	学習者は日本社会における信仰が述べられる。					
M4	学習者は日本における祭りや祝日が述べられる。						
M5	学習者は日本における衣服の文化が述べられる。						
M6	学習者は日本社会における食文化に関わるものが述べられる。						
M7	学習者は日本における住宅に関するものが述べられる。						
M8	学習者は日本における公共交通機関のシステムに関するものが述べられる。						

	M9	学習者は日本におけるポピュラースポーツや伝統的なスポーツに関することが述べられる。
	M10	学習者は日本における様々なポピュラーエンタテインメントに関することが述べられる。
	M11	学習者は日本における様々な伝統文化に関することが述べられる。
	M12	学習者は様々なコンテンポラリーの文化に関することが述べられる。
コースの概要	日本事情は日本に関する地理、人口統計、伝統文化の所産、コンテンポラリーの文化化について」学習するコースである。	
学習内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本の自然環境、日本の島々、季節の区分 2. 都道府県の区分、各県の特徴 3. 日本における神道、仏教、キリスト教の歴史と展開 4. 日本における1月から6月までの祭り及び祝日 5. 日本における7月から12月までの祭り及び祝日 6. 日本の伝統的な衣装類、季節から服装の文化への影響、世界ファッションにおける日本の位置づけ、 7. 日本社会の食様式、伝統的な料理と飲み物、食店類 8. 日本における住宅類、伝統的な住宅の中、部屋の貸し出し方法 9. 日本における陸海空の公共交通機関 10. 日本の伝統的なスポーツ:相撲、柔道、空手、剣道、弓道 11. 日本のモダンなスポーツ：サッカー、野球 12. カラオケとパチンコの歴史とその展開 13. 生花、茶道、書道の歴史とその展開 14. 日本におけるコンテンポラリーなドラマ、映画、音楽の歴史とその展開 	
教材	主教材	
	1	Mizue, Sasaki. 1999. <i>Nihon Jijo Nyumon</i> . Tokyo: Aruku
	2	Atsuko, U., Ayako, U., Yukiko, S., Masako, H., dan Reiko, M. 1993. <i>Tanoshiku Yomeru Nihon no Kurashi 12 kagetsu</i> . Tokyo: Kyobundoh
	3	Danandjaja, James. 1997. <i>Foklor Jepang: Dilihat dari Kacamata Orang Indonesia</i> . Jakarta: P.T. Pustaka Utama Grafiti

		補助教材				
		1				
		2				
		Dst				
メディア		ソフトウェア		ハードウェア		
		MS Word; MS Power Point; Youtube		PC, Flash Disk, LCD, and Projector		
担当教師		1	Ni Luh Putu Ari Sulatri, S.S.M.Si.			
		2	Dr. Ida Ayu Laksmi Sari, S.Hum., M.Hum.			
週	期待される学習成果	対象	評価方法	形式、学習方法、課題、時間の配分	学習リソース	評価率 (%)
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
1	学習者は日本の地理に関することが述べられる。	以下のことに関する発言の正確性： <ol style="list-style-type: none"> 日本の自然的な環境 日本の島々pulau 日本における季節の区分 	基準： <ol style="list-style-type: none"> レポートのルーブリック 発表のルーブリック 非試験形式： <ol style="list-style-type: none"> グループのレポート グループの発表 	1. 講義 & ディスカッション (2x50分): <ul style="list-style-type: none"> 学習内容の解説 ビデオ視聴 小グループディスカッション 2. 構造的課題(2x60分) 3. 個人の課題 (2x60分)	主教材1, 2, 3	5%
2	学習者は日本における都道府県の区分について発言できる	<ol style="list-style-type: none"> 都道府県の区分 各県の特徴 	基準： <ol style="list-style-type: none"> レポートのルーブリック 発表のルーブリック 非試験形式： <ol style="list-style-type: none"> グループのレポート グループの発表 	1. 講義 & ディスカッション (2x50分): <ul style="list-style-type: none"> 学習内容の解説 ビデオ視聴 小グループディスカッション 2. 構造的課題(2x60分) 3. 個人の課題 (2x60分)	主教材1, 2, 3	10%

3	学習者は日本の社会における信仰に関することを叙述できる	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本における神東、仏教、キリスト教の歴史と展開 2. 日本におけるシンクレティズム的な信仰 3. 日本社会における新宗教 	<p>基準:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. レポートのルーブリック 2. 発表のルーブリック <p>非試験形式:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. グループのレポート 2. グループの発表 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義 & ディスカッション (2x50分): <ul style="list-style-type: none"> - 学習内容の解説 - ビデオ視聴 - 小グループディスカッション 2. 構造的課題(2x60分) 3. 個人の課題 (2x60分) 	主教材1, 2, 3	5%
4 & 5	学習者は日本における祭りや祝日に関することを叙述できる	<ol style="list-style-type: none"> 1. 1月から6月までの祭りまたは祝日 2. 7月から12月までの祭りまたは祝日 	<p>基準:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. レポートのルーブリック 2. 発表のルーブリック <p>非試験形式:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. グループのレポート 2. グループの発表 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義 & ディスカッション (2x50分): <ul style="list-style-type: none"> - 学習内容の解説 - ビデオ視聴 - 小グループディスカッション 2. 構造的課題(2x60分) 3. 個人の課題 (2x60分) 	主教材1, 2, 3	15%

6	学習者は日本における文化に関わる衣服を叙述できる	<ol style="list-style-type: none"> 1. 伝統的な衣装, 2. 季節から衣服の文化の影響 3. 世界ファッションにおける日本の位置づけ 	<p>基準:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. レポートのルーブリック 2. 発表のルーブリック <p>非試験形式:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. グループのレポート 2. グループの発表 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義 & ディスカッション (2x50分): <ul style="list-style-type: none"> - 学習内容の解説 - ビデオ視聴 - 小グループディスカッション 2. 構造的課題(2x60分) 3. 個人の課題 (2x60分) 	主教材1, 2, 3	10%
7	学習者は日本社会における食文化を叙述できる。	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本社会の食様式, 2. 伝統的な飲食類 3. 食店類 	<p>基準:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. レポートのルーブリック 2. 発表のルーブリック <p>非試験形式:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. グループのレポート 2. グループの発表 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義 & ディスカッション (2x50分): <ul style="list-style-type: none"> - 学習内容の解説 - ビデオ視聴 - 小グループディスカッション 2. 構造的課題(2x60分) 3. 個人の課題 (2x60分) 	主教材1, 2, 3	10%

8	中間試験				20%	
9	学習者は日本における住宅及び貸し出し方法に関することを叙述できる。	<ol style="list-style-type: none"> 1. 住宅類そして住宅のインテリアの区分 2. 住宅の貸し出し方法 	基準: <ol style="list-style-type: none"> 1. レポートのルーブリック 2. 発表のルーブリック 非試験形式: <ol style="list-style-type: none"> 1. グループのレポート 2. グループの発表 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義 & ディスカッション (2x50分): <ul style="list-style-type: none"> - 学習内容の解説 - ビデオ視聴 - 小グループディスカッション 2. 構造的課題(2x60分) 3. 個人の課題 (2x60分) 	主教材1, 2, 3	5%
10	学習者は日本における公共交通機関に関することを叙述できる	日本における陸海空の公共交通機関	基準: <ol style="list-style-type: none"> 1. レポートのルーブリック 2. 発表のルーブリック 非試験形式: <ol style="list-style-type: none"> 1. グループのレポート 2. グループの発表 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義 & ディスカッション (2x50分): <ul style="list-style-type: none"> - 学習内容の解説 - ビデオ視聴 - 小グループディスカッション 2. 構造的課題(2x60分) 3. 個人の課題(2x60分) 	主教材1, 2, 3	10%

11 & 12	学習者は日本における伝統的なスポーツに関することを叙述できる	1. 日本における伝統的なスポーツ類：相撲、柔道、空手、剣道、弓道 2. 日本におけるモダンかつポピュラーなスポーツ：サッカー、野球	基準: 1. レポートのルーブリック 2. 発表のルーブリック 非試験形式: 1. グループのレポート 2. グループの発表	1. 講義 & ディスカッション (2x50分): - 学習内容の解説 - ビデオ視聴 - 小グループディスカッション 2. 構造的課題(2x60分) 3. 個人の課題 (2x60分)	主教材1, 2, 3	10 %
13	学習者は日本におけるエンタテインメント類に関することを叙述できる	パチンコとカラオケの歴史とその展開 2.	基準: 1. レポートのルーブリック 2. 発表のルーブリック 非試験形式: 1. グループのレポート 2. グループの発表	1. 講義 & ディスカッション (2x50分): - 学習内容の解説 - ビデオ視聴 - 小グループディスカッション 2. 構造的課題(2x60分) 3. 個人の課題 (2x60分)	主教材1, 2, 3	15%
14	学習者は伝統芸能に関することを叙述できる	生花、茶道、書道の歴史とその展開	基準: 1. レポートのルーブリック 2. 発表のルーブリック 非試験形式: 1. グループのレポート 2. グループの発表	1. 講義 & ディスカッション (2x50分): - 学習内容の解説 - ビデオ視聴 - 小グループディスカッション 2. 構造的課題(2x60分) 3. 個人の課題 (2x60分)	主教材1, 2, 3	15%

15	学習者は日本のコンテンポラリー文化に関することを叙述できる。	日本におけるコンテンポラリーの音楽、ドラマ、映画の歴史と展開	基準: 1. レポートのルーブリック 2. 発表のルーブリック 非試験形式: 1. グループのレポート 2. グループの発表	1. 講義 & ディスカッション (2x50分): - 学習内容の解説 - ビデオ視聴 - 小グループディスカッション 2. 構造的課題(2x60分) 3. 個人の課題 (2x60分)	主教材1, 2, 3	15%
16	期末試験					20%

備考:

学習評価

プロセス評価 (60%):

- a. 記事・ビデオのレビュー : 20%
- b. ケーススタディから個人の課題 : 20%
- c. グループレポート : 10%
- d. グループ発表 : 10%

成果評価 (40%):

- a. 中間試験 (esai test) : 20%
- b. 期末試験 (esai test) : 20%



ハサヌディン大学, 文化学学部,
日本文学学科

ドキュメント
コード

RENCANA PEMBELAJARAN SEMESTER

コース名	コード	コース類	単位		履修時期	作成日
日本事情 I		歴史・文化	2	P=?	1年後期	2020年8月
OTORISASI	シラバス開発者		コーディネーター		学科長	
	Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph. D		Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph. D		Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph. D	
Capaian Pembelajaran (CP)	学科からコースに期待する成果					
	ELO	To understand multidisciplinary aspects of Japanese Studies				
	ELO	To identify multicultural diversity and the dynamic of globalization phenomenon				
	Capaian Pembelajaran Mata Kuliah (CPMK)					
	CLO	日本の文化、歴史、文化・社会の特徴を知って理解できる				
	CPL® Sub-CPMK					
	CPL-1	日本の歴史、文化、伝統、社会、政治、経済を認識できる				
	CPL-2	日本社会のライフスタイルと思考様式の特徴を認識できる				
コースの概要	このコースでは日本の特徴、哲学、文化、労働倫理について学習する このコースでは日本事情・Japanologyについて学際的に学習する このコースでは日本における歴史の特徴、民族、宗教、文化を識別する					
学習内容	1. 日本の歴史、地理、文化、社会の概論 2. 製品のグローバル化はモノ作りの特徴の概論 3. 日本のソフトパワーとしてJ-Pop 4. 日本社会のライフスタイルの概論 5. 日本の教育の概論 6. その他、例えば、現状の日本					
文献	教材（記載はそのまま）					
	Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan) Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Youtube J-Pop					

	補助教材 The Way of Life in Japan 日本事情に関わるオーディオビジュアル Youtubeからアクセスが可能なJ-Pop Youtube Hallyu とその他 Podcast Metaze
担当教師	Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph.D
コースの条件	日本事情 I

週	学習成果	評価		学習形式、学習方法、課題設定 [時間配分]		学習内容 [文献]	評価率 (%)
		対象	基準・形式	Luring (offline)	Daring (online)		
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
1	イントロダクション	学習者は日本事情1のシラバスを知って理解する	学習者は日本事情1の領域と学習内容に関する理解	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週1の学習内容を予習しておくこと	形式: 応答的 d TM (1x2x50") Metode : Discovery Learning	出席率=0.6% 授業の流れ = 0.6%
2	日本に関わる哲学的な側面を理解するために日本文化の元の紹介。 日本文化に関わる用語を知る	学習者は日本に関わる哲学的な側面を理解し、日本文化に関わる用語の理解	学習者は学習内容に反応する。学習者は国の元と哲学的な側面に関することについて意見交換をする	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週2の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture	出席率=0.6% 授業の流れ = 0.6%
3	日本の地理、日本社会の習慣の基礎をしる。	学習者は日本の地理、日本社会の習慣に関わることを理解する	学習者は文化に関する面白いことやたの国にない日本の習慣についてディスカッションを行う際に反応する	形式: フォラーム 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週3の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture	出席率=0.6% 授業の流れ = 0.6%

						The Way of Life in Japan	
4	鎖国の歴史と日本社会における侍の紹介。	学習者は鎖国の歴史と日本社会における侍を知る	学習者は質問したり発言した能動的に反応することによって、好奇心を満たす	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週4の学習内容を予習しておくこと	Youtube Hallyu とその他	出席率= 0.6% 授業の流れ = 0.6%
5	モノづくりの特徴として製品のグローバル化を知る	学習者はモノづくりの特徴として製品のグローバル化を知って理解する	与えられた学習内容に関して、もっと知りたいことがあれば、学習者は能動的に質問したりする	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週5の学習内容を予習しておくこと	Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan)	出席率= 0.6% 授業の流れ = 0.6%
6	日本のソフトパワーとしてのj-popのグローバル化を知る	日本のソフトパワーとしてのj-popのグローバル化を知って理解する	与えられた学習内容に対する意見交換したり質問したり、能動的に反応する	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週6の学習内容を予習しておくこと	Youtube からアクセスが可能なJ-Popと他のメディア Youtube Hallyu とその他 Youtube J-Pop	出席率= 0.6% 授業の流れ = 0.6%
7	日本社会のライフスタイルを知る	日本人のライフスタイルを知って理解する	学習者は発言したり意見を述べたり能動的に反応する。学習者は日本社会のライフスタイルに関わる反応や発言のチャンスが与えられる	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週7の学習内容を予習しておくこと	Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan) Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Youtube Hallyu とその他 日本事情に関わるオーディオビジュアル	出席率= 0.6% 授業の流れ = 0.6%
8	中間試験						

9	日本の教育を知る	学習者は日本の教育を知って理解する	学習者は日本の教育について質問したり意見を述べたり能動的に反応する	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週9の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Audio Visual yang berkaitan dengan kejeperangan	出席率= 0.6% 授業の流れ = 0.6%
10	パンデミックにおける日本の現状を知る	学習者はコロナにおける日本の現状を知って理解したり情報を調べる	学習者は意見を述べたり日本の現状について質問したり情報を調べたり能動的に参加する	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者がディスカッションや発言を能動的にする姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週10の学習内容を予習しておくこと	Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan)	出席率= 0.6% 授業の流れ = 0.6%
11	日本舞踊を知る	学習者は日本舞踊を知って理解する	学習者は能動的に質問したり意見交換をしたりする	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者がディスカッションや発言を能動的にする姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週11の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture 日本事情に関わるオーディオビジュアル	出席率= 0.6% 授業の流れ = 0.6%
12	日本の労働倫理を知る	学習者は日本の労働倫理を知って理解する	学習者は日本の労働倫理について能動的に質問したり意見を述べたりする	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者が能動的に質問したり議論したりする姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週12の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan) Japan Movie or Drama	出席率= 0.6% 授業の流れ = 0.6%
13	日本の特徴を知る	学習者は日本の特徴を知って理解する	学習者は日本の特徴について質問したり能動的に意見を述べたりする	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者が能動的に質問したり議論したりする姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週13の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture	出席率= 0.6% 授業の流れ = 0.6%

						日本事情に関わるオーディオビジュアル	
14	日本の政治と経済のシステムを知る	学習者は日本の政治や経済のシステムを知って理解する	学習者は日本の政治と経済について質問したり能動的に意見を述べたりする	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者が能動的に質問したり議論したりする姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週14の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan)	出席率= 0.6% 授業の流れ = 0.6%
15	日本社会の四股様式を知る	学習者は日本社会の思考様式を知って理解する	学習者は日本社会の思考様式について能動的に室温したり意見を述べたりディスカッションしたりする	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者が能動的に質問したり議論したりする姿勢が見える	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週15の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events 日本事情に関わるオーディオビジュアル	出席率= 0.6% 授業の流れ = 0.6%
16	Evaluasi Akhir Semester / Ujian Akhir Semester						



ハサヌディン大学、文化学学部
日本文学学科

ドキュメントコード

一学期学習計画

コース名	コード	コース類	単位	履修時期	作成日	
日本事情II		歴史・文化	2	P=?	2年前期 2020年8月	
OTORISASI	シラバス開発者		コーディネーター		学科ちょう	
	Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph. D		Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph. D		Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph. D	
学習成果	学科がコースに期待する成果					
	To understand multidisciplinary aspects of Japanese Studies					
	To identify of multicultural diversity and the dynamic of globalization phenomenon					
	コースの学習成果					
	学習成果	<ul style="list-style-type: none"> 労働倫理を含め、日本社会の特徴を認識することができる。 日本の社会文化の背景や思考様式の基礎を理解することができる。 				
	サブ学習成果					
1	地理、天候、歴史、伝統、社会、政治、経済といった日本事情の基礎を知って理解する。また、外国人観光客、特にインドネシアからの観光客に有名な日本の観光地についても学習する。					
2	モダンな日本社会の思考やライフスタイルの基礎を認識する。					
3	モダンな日本社会における社会的変遷を理解することができる。					
4	日本文化の特徴を認識し、インドネシアの文化特に地方文化である南スラウェシ州の文化と比較する。					
コース概要	<p>このコースは日本事情Iの続きである。</p> <p>このコースは日本事情・Japanologyに関わる学習内容をマスターレベルでより細かく学習する。例えば、日本社会、日本史（古典、モダン、コンテンポラリー）そして、日本とインドネシアの関係についての歴史も学習する。このコースの領域は文化学習、言語、文学、基礎の日本史である。授業方法は混合学習法、すなわちオンライン学習、対面授業、Sikolaを利用する。</p>					

学習内容	<p>以下のようなことの基礎;</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日本事情Iからの続きとして、日本史、地理、文学、文化、日本社会、 2. 気候学、そして日本の伝統と文化の調和、 3. 日本のソフトパワーの象徴となるJ-Popについてディスカッション・学習、 4. 日本の教育、 5. 祭りと祝日、 6. 文化と日常的な伝統 7. その他
教材	<p>主教材:</p> <p>Nihon Jijou Nyuumon 日本事情入門 (View of Today's Japan) Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Anime, Film & J-Pop</p> <p>補助教材:</p>
	<p>The Way of Life in Japan 日本事情に関わるオーディオビジュアル Youtubeからアクセスが可能なJ-pop NHK World からのニュースチャンネル</p>
担当教師	Meta Sekar Puji Astuti, S.S., M.A., Ph.D
履修条件	日本事情 II

週	学習成果	評価		学習形式,学習方法, 課題設定, [時間の配分]		学習内容[参考文献]	評価率 (%)
		対象	基準と形式	Luring (offline)	Daring (online)		
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
1	イントロダクション	学習者は日本事情IIのシラバスを知って理解する	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	履修に関するディスカッション	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週1の学習内容を予習しておくこと	履修についての説明	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%
2	日本史と日本文化の基礎(1)	学習者は日本史と日本文化の基礎を知って理解する	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	学習者は学習内容について質問したり能動的に発言する	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週2の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Channel-channel NHK World	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%
3	日本史と日本文化の基礎 (2)	学習者は日本史と日本文化の基礎を知って理解する	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	学習者は学習内容について質問したり能動的に発言する	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週3の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture Channel-channel NHK World	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%
4	日本社会におけるアニメとJ-Pop (1)	学習者は日本におけるアニメとj-Popを知って理解する	アニメや、アラシ、Hey say jump、ソロ歌手等のような有名なMV J-Pop について学習する。	アニメやMV J-Popを視聴	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週4の学習内容を予習しておくこと	You-tube や他のメディアからアクセスが可能なアニメ、映画、J-Pop	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%

5	日本社会におけるアニメとJ-Pop (2)	学習者は日本におけるアニメとj-Popを知って理解する	アニメや、アラシ、Hey say jump、ソロ歌手等のような有名なMV J-Pop について学習する。	アニメやMV J-Popを視聴	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週5の学習内容を予習しておくこと	- You-tube や他のメディアからアクセスが可能なアニメ、映画、J-Pop	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%	
6	日本文化を反映する映画 (1)	学習者は日本文化を反映する映画を知って理解する	映画についてディスカッション・学習	映画視聴	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週6の学習内容を予習しておくこと	映画	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%	
7	日本文化を反映する映画 (2)	学習者は日本文化を反映する映画を知って理解する	映画についてディスカッション・学習	映画視聴	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週7の学習内容を予習しておくこと	映画	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%	
8	中間試験							
9	教育システムから日本社会の礼儀やモラル (1)	日本社会における礼儀やモラルは日本の教育システムからの影響であることを知って理解する	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	学習者はyoutubeや映画から反映されたモラルや礼儀について能動的に質問した発言したりする	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週9の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%	
10	教育システムから日本社会の礼儀やモラル (2)	日本社会における礼儀やモラルは日本の教育システムからの影響であることを知って理解する	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	学習者は学習内容について質問したり能動的に発言する	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週10の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%	

1 1	日本の帝国と政治のシステム (1)	学習者は日本の帝国と政治のシステムを知って理解する	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	学習者は学習内容について質問したり能動的に発言する	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週11の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%
1 2	日本の帝国と政治のシステム (2)	学習者は日本の帝国と政治のシステムを知って理解する	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	学習者は学習内容について質問したり能動的に発言する	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週12の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%
1 3	日本のモノづくり (1)	学習者は日本のモノづくりを知って理解する	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	学習者は学習内容について質問したり能動的に発言する	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週13の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%
1 4	日本のモノづくり (2)	学習者は日本のモノづくりを知って理解する	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	学習者は学習内容について質問したり能動的に発言する	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週14の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of Japanese Culture	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%
1 5	日本とインドネシアの異文化紹介	学習者は日本とインドネシアの異文化について理解する	形式: 非テスト 基準: 学習成果を達するために、学習者個人の能動的に活動する姿勢が見える	学習者は学習内容について質問したり能動的に発言する	BM (1x2x60") SIKOLA → 授業の流れのメニューにて週15の学習内容を予習しておくこと	Pictorial Encyclopedia of Japanese Life and Events Pictorial Encyclopedia of	出席率 = 0.6% 授業の流れ = 0.6%

						Japanese Culture	
16	期末試験						

アンケート（日本語訳版）

日本事務コースについてのアンケート

名前：

学年：

このアンケートは研究のみに使用します。研究の目的以外、使用しないことを保障します。

I. 日本文化学習において、どのような学習項目が必要だと思いますか。（必要なものから順番に書いてください）

- 1) 人間関係（挨拶、名前・敬称、上下関係、親疎関係、内外関係等）
- 2) 生活（衣食住、趣味・娯楽、仕事・職業、家族構成、生活リズム、休日・休暇等）
- 3) 社会システム（交通システム、生活インフラ、通信、メディア、学校、金融、医療、行政、社会ルール等）
- 4) 習慣・慣習（礼儀・作法、冠婚葬祭、年中行事、贈答等）
- 5) 伝統（茶道、華道、書道、日本的な遊び等）
- 6) 伝統芸能（歌舞伎、文楽、能、狂言等）
- 7) 武道（剣道・居合道・合気道・弓道・空手道・柔道等）
- 8) サブカルチャー（アニメ、マンガ、ゲーム、ドラマ、コスプレイヤー等）
- 9) スポーツ（野球、相撲、サッカー等）
- 10) 社会人文科学（政治、経済、教育、歴史、宗教等）
- 11) 自然環境（地理、天候等）
- 12) その他_____

必要な項目から順番に書くこと・必要ではないものは書かないこと									



この最初の項目が最も必要な理由

上記のものや上記のもの以外に最も興味がある場合は細かく書いてください。

II. 通常あまり学習していない以下の項目には日本文化に必要なだと思う項目がありますか。(必要な項目があれば、順番に書いてください)

- 1) コミュニケーション項目 (言語・非言語、依頼し方、断り方、話しかける方法等)
- 2) マナー項目 (同僚や上司との礼儀、食事のマナー、対話のマナー、仕事のマナ等)
- 3) 人間関係を構築するための項目 (礼儀等)
- 4) 専攻に関する項目 (教育、文学、IT、言語学等)
- 5) 日本での生活 (最低限の必要な理解や能力に関する項目)
- 6) その他 _____

必要な項目から順番に書くこと・必要ではない項目を書かないこと					

↓

この最初の項目が最も大切な理由

III. これまで行っている日本文化の学習方法のうち、どのような学習方法を好みますか。(好きな学習方法から順番に書いてください)

- 1) 教師主体の授業、
- 2) 学生の個人やグループによる発表 (発表+質疑応答)、
- 3) ビデオ、アニメ、映画などのようなマルチメディアでの学習、
- 4) レポート作成、
- 5) その他 _____

好きな学習方法から順番に書く事・好まない学習方法を書かないこと						

↓

この最初の項目が最も必要な理由

IV. IIIの学習方法の以外で、他の日本文化の学習方法にはどのような方法が必要だと思いますか。(必要だと思うものから順番に書いてください)

- 1) 日本人を招待し、ディスカッション等で日本文化を深める、
- 2) 日本人学校や、日系企業のような、日本文化的な環境への訪問、
- 3) 日本人コミュニティや日本愛好会との交流、
- 4) プロジェクトワーク、
- 5) ディベート
- 6) その他_____

必要な学習方法から順番に書く事・必要ではない学習方法を書かないこと

--	--	--	--	--	--



この最初の項目が最も必要な理由

V. 学部では何回（何単位）日本事情・日本文化コースを履修する必要があると思いますか。

- a) 1回のみ（2単位） d) 6回まで（12単位まで） e) 8回まで（16単位まで）
b) 2回まで（3 - 4単位） で） で）
c) 4回まで（8単位まで）

理由：

VI. 日本事情コースや、これまでの日本語コースを履修したことにより、日本人・日本社会や日本・日本文化にどのような印象を持っていますか。（最も印象が強いものを書いてください）

ご協力、ありがとうございます

日事情 (日本文化) コースについてのアンケート (日本語訳) (本調査用)

本研究において「日事情」コースは日本文化、日本社会、日本に関わる物事を扱う科目のことを指します。このアンケートは研究のみに使用します。研究の目的以外、使用しないことを保障します。

コード	アンケート項目											
Q1	名前 :											
Q2	所属大学 :											
Q3	学年 :											
Q4	<p>I 日本文化学習において、どのような学習項目が必要だと思いますか。(必要なものから順番に書いてください)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 人間関係 (挨拶、名前・敬称、上下関係、親疎関係、内外関係等) 2) 生活 (衣食住、趣味・娯楽、仕事・職業、家族構成、生活リズム、休日・休暇等) 3) 社会システム (交通システム、生活インフラ、通信、メディア、学校、金融、医療、行政、社会ルール等) 4) 習慣・慣習 (礼儀・作法、冠婚葬祭、年中行事、贈答等) 5) 伝統 (茶道、華道、書道、日本的な遊び等) 6) 伝統芸能 (歌舞伎、文楽、能、狂言等) 7) 武道 (剣道・居合道・合気道・弓道・空手道・柔道等) 8) サブカルチャー (アニメ、マンガ、ゲーム、ドラマ、コスプレイヤー等) 9) スポーツ (野球、相撲、サッカー等) 10) 社会人文科学 (政治、経済、教育、歴史、宗教等) 11) 自然環境 (地理、天候等) 12) その他 _____ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0; text-align: center;"> 必要な項目から順番に書くこと・必要ではないものは書かないこと </div> <table border="1" style="width: 100%; height: 30px; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;"></td> </tr> </table> <p style="text-align: center;">↓</p>											

この最初の項目が最も必要な理由

上記のものや上記のもの以外に最も興味がある場合は細かく書いてください。

Q5

II. 通常あまり学習していない以下の項目には日本文化に必要なだと思う項目がありますか。
(必要な項目があれば、順番に書いてください)

- 1) コミュニケーション項目 (言語・非言語、依頼し方、断り方、話しかける方法等)
- 2) マナー項目 (同僚や上司との礼儀、食事のマナー、対話のマナー、仕事のマナー等)
- 3) 人間関係を構築するための項目 (礼儀等)
- 4) 専攻に関する項目 (教育、文学、IT、言語学等)
- 5) 日本での生活 (最低限の必要な理解や能力に関する項目)
- 6) その他

必要な項目から順番に書くこと・必要ではない項目を書かないこと

--	--	--	--	--	--



この最初の項目が最も大切な理由

Q6

III. これまで行っている日本文化の学習活動のうち、どのような学習活動に興味を持ちますか。
(好きな学習方法から順番に書いてください)

- 1) 教師主体の授業 (担当教師による講義型)、

- 2) 学生の個人やグループによる発表（発表＋質疑応答）、
- 3) ビデオ、アニメ、映画などのようなマルチメディアでの学習、
- 4) レポート作成、
- 5) その他_____

興味をもつ学習活動から順番に書くこと・もったない学習活動を書かないこと						

↓

この最初の項目が最も必要な理由

Q7

IV. IIIの学習活動の以外で、他の日本文化の学習活動にはどのような活動が必要だと思いますか。(必要だと思うものから順番に書いてください)

- 1) 日本人を招待し、ディスカッション等で日本文化を深める、
- 2) 日本人学校や、日系企業のような、日本文化的な環境への訪問、
- 3) 日本人コミュニティや日本愛好会との交流、
- 4) プロジェクトワーク、
- 5) ディベート
- 6) その他_____

必要な学習活動から順番に書く事・必要ではない学習活動を書かないこと					

↓

この最初の項目が最も必要な理由

	<hr/> <hr/>
Q8	V 日本語関連学科に在籍しているうちに、日本事情科目または単位はいくつ履修する必要があると思いますか。
Q9	VI 教室外で、日本事情に関する情報を入手していますか。
Q10	VII. VIにはいと答えた方は、どのような手段で入手していますか。（選択は1つ以上可能） <ul style="list-style-type: none"> ○ インターネット ○ 日本語テキスト ○ 日本テレビ ○ 日本の新聞、雑誌窓 ○ 日本人の友達 ○ 学習者同士
Q11	VIII. 週に何回入手していますか。 <ul style="list-style-type: none"> ○ 毎日 ○ 週2回 ○ 週3回 ○ 週1回

ご協力、ありがとうございました。